大社町立大社小学校改築事業に伴う発掘調査報告書

鹿蔵山遺跡

2005年1月
大社町教育委員会

題字：大社町教育委員会 教育長 阿部和男
写真：大社町全景（南東上空より）

大社町立大社小学校改築事業に伴う発掘調査報告書

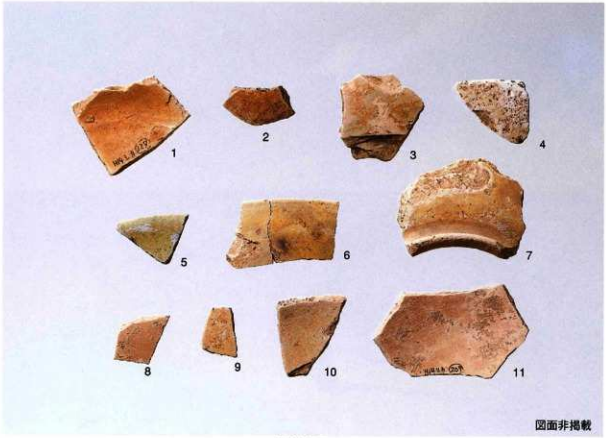
鹿蔵山遺跡

2005年1月

大社町教育委員会

奈良三彩

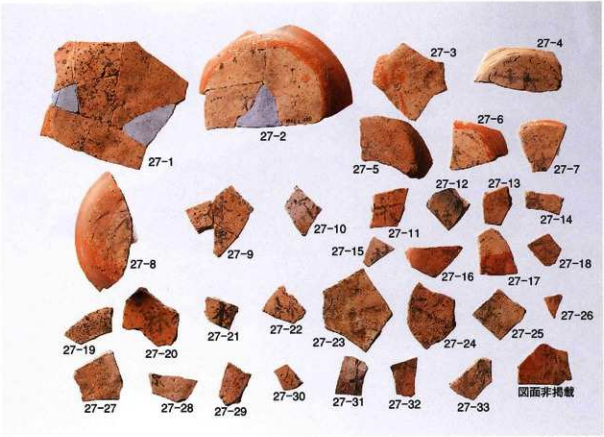
口絵２



図面非掲載

緑釉陶器

銅製品



（林・林原）

墨書土器

（大・太・大成）

口絵４

井戸内枠及框脚部

井戸内枠及框脚部

調査区と弥山（校庭下調査区・南西から）

序

この度、鹿蔵山遺跡の発掘調査報告書を発刊する運びとなりました。発掘調査は、大社小学校の改築事業に伴い平成14年度・15年度と２ヵ年にわたり、延べ約６ヶ月間の発掘調査を実施いたしました。

発掘調査の結果、出雲地方で初の出土となります奈良三彩をはじめ、墨書土器、銅製金具など当地域の古代の歴史を考えるうえで貴重な遺物が多数出土いたしました。

大社町は、周辺市町二市四町の合併により、2005年３月に新制出雲市となりますが、鹿蔵山遺跡の発掘調査で得られました成果は、現大社町域における古代の様相を古代の杵築地域を復元するうえで重要な発見となりました。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対してさらなる理解と関心を高めるための一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたり御協力いただきました島根県教育委員会をはじめ、関係の方々に対して心からお礼申し上げます。

2005年（平成17年）１月

大社町教育委員会　教育長　**阿部和男**

例　　言

1．本書は、2002年（平成14年）11月から2003年（平成15年）7月まで2ヵ年にわたり大社町教育委員会を調査主体として実施された島根県簸川郡大社町鹿蔵山遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査組織は次の通りである。（職名等は当該年度のものである）

○平成14年度（発掘調査）

事　務　局　阿部和男（大社町教育委員会教育長）、吉田明弘（同教育課長）、吉川浩（同課長補佐）、内藤直久（同社会教育係主任）、廣田英資（同地域教育コーディネーター）
景山真二（同社会教育係主任）、森山勇人（同主任）、大梶智徳（同副主任）

調　査　員　石原聡（同社会教育係主事）

調査補助員　坂根健悦、露梨靖子

○平成15年度（発掘調査）

事　務　局　阿部和男（大社町教育委員会教育長）吉田明弘（同教育課長）、吉川浩（同課長補佐）、内藤直久（同社会教育係長）、廣田英資（同地域教育コーディネーター）、景山真二（同社会教育係主任）、大梶智徳（同主任）、広沢陽子（同副主任）

調　査　員　石原聡（同社会教育係主事）、露梨靖子（同嘱託）

○平成16年度（報告書作成）

事　務　局　阿部和男（大社町教育委員会教育長）、吉田明弘（同教育課長）、吉川浩（同課長補佐）、内藤直久（同教育課主査）、廣田英資（同社会教育係地域教育コーディネーター）、景山真二（同社会教育係主任）、大梶智徳（同主任）、広沢陽子（同主任）

調　査　員　石原聡（同社会教育係主事）、露梨靖子（同嘱託）

3．作業員

【発掘作業員】（五十音順）

麻野利子、天野重夫、飯塚由起、石原成、板垣将信、上野弘子、上野昌訓、大島唯、岡崎美枝、岡田雄一、小川清己、影山嘉一、加藤秀樹、鎌田静子、河井茂夫、川上吉伸、黒田真雄、児島節子、小玉周平、坂本美見、佐々木紀子、佐藤幸司、佐藤千晃、清水作、曽田裕則、高橋正、多久和正行、竹田美代子、田中聡子、土肥源市、長廻敬一、中島康之、中筋隆仁、永見トキ代、橋本伸也、林秀樹、原道徳、原礼子、原勇喜夫、原鶴、日野昂悦、平尾和子、福江孝夫、福田智彦、松浦憲慧、三木久美子、水師保昭、三原節夫（故人）、宮本純子、森浩一郎、山口正夫、山根利江、山根浪子、山本壽朗、吉川幸男、吉川善美、吉村健、吉山義則、渡部昭二

【整理作業員】（五十音順）

伊藤幸子、糸賀五月、江角ひろみ、加藤秀樹、坂根喜世美、清水作、山根寿美子、山根利江、渡部怜美

4．本書の刊行にあたり、次の方々から玉稿をお寄せいただいた。記して敬意を表する。（順不同、敬称略）

高橋照彦（大阪大学大学院）、渡辺正巳（文化財調査コンサルタント）、古野毅（島根大学）、今西寿光（株式会社京都科学）

5．本書の刊行にあたって次の方々及び諸機関にご協力を頂いた。記して謝意を表する。

（順不同、敬称略）

内田律雄、広江耕史、松尾充晶、伊藤徳広（島根県埋蔵文化財調査センター）、平石充、錦田剛志、深田浩（島根県古代文化センター）、椙山林継（國學院大學）、辰巳和弘（同志社大学）、巽淳一郎、金田明大（奈良文化財研究所）、舘野和己（奈良女子大学）、原俊二（平田市教育委員会）、宍道年弘（斐川町教育委員会）、関和彦（共立女子第二中学高等学校）、平野卓治（横浜市歴史博物館）、柴田博子（宮崎産業経営大学）、高島英之（群馬県埋蔵文化財調査事業団）、島根県教育委員会

6．本書の執筆者については、目次及び各項の末尾に記す。

7．写真については、石原・坂根が撮影した。

8．挿図中に図示した北方位および平面直角座標系のXY座標は、日本測地系による測量法第3座標系の座標北および軸方位を示す。

9．遺構略号SK：土坑　SX：性格不明　なお、遺構略号を用いていない遺構もある。

10．出土遺物・図面・写真類は大社町教育委員会で保管している。

凡　　例

1．遺物実測図のうち、須恵器は断面を黒塗りし、金属器と石器は断面に斜線を入れ、それ以外は白抜きをして区別した。木製品は木目を認識できたものを断面内に模式的に表現している。また、文字資料については、平面図の天地を文字の正位置に合わせ、断面計測点を「－」で示している。一部「－」に付加する矢印は土器底面の中心方向を表現し、墨書の位置及び方向の検討にも対応できるようにした。なお、中心方向は、調整、丹塗りのハケ目などの観察から判断している。須恵器の天井部及び底部切り離し技法は以下のように記号化した。土師器の丹塗り製品については丹塗りの範囲を網掛けで表現し、底面部分の丹塗りの有無は記号化し、網掛けと白抜きで示した。

2．本文中、図版中、写真図版中の遺物番号は一致する。

3．本書で用いた分類（用語含む）・及び編年観は基本的に下記の各論文・報告書に依拠している。

(1) 奈良三彩・緑釉陶器
愛知県陶磁資料館　1998『日本の三彩と緑釉－天平に咲いた華－』
奈良文化財研究所　2004『古代の官衙遺跡Ⅱ　遺物・遺跡編』
(2) 墨書土器
島根県古代文化センター　2003『山陰古代文字資料集成』Ⅰ（出雲・石見・隠岐編）島根県古代文化センター調査研究報告書14
(3) 銅製品・鋼関連遺物
奈良文化財研究所　2002『銙帯をめぐる諸問題』
田中広明　2003「Ⅰ腰帯の語る古代の官人社会」『地方の豪族と古代の官人』柏書房
(4) 鉄製品・鉄関連遺物
杉山秀宏　1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第８集　吉川弘文館
松井和幸　2001『日本古代の鉄文化』雄山閣
(5) 弥生土器
松本岩雄　1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社
鹿島町教育委員会　1992『南講武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５
(6) 須恵器
大谷晃二　1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　島根考古学会
島根県教育委員会　1984『高広遺跡発掘調査報告書』

(7) 土師器
大川清・鈴木公雄・工楽善通　1996『日本土器事典』雄山閣
鹿島町教育委員会　1992『南講武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5
(8) 土師質土器
大社町教育委員会　2004『出雲大社境内遺跡』
(9) 土製品
内田律雄　2004「内水面漁業における土製魚網錘－宍道湖の浮付刺網用土錘の調査－」
『考古論集（河瀬正利先生退官記念論文集）』
岩橋孝典　2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について－土製支脚・移動式竈を中心として－」『古代文化研究』第11号　島根県古代文化センター
(10) 石製品
島根県古代文化センター　2004『古代出雲における玉作の研究Ⅰ』
(11) 木製品
綿山まり　1998「榧－その系譜と展開－」『古事』天理大学考古学研究室紀要第2冊　天理大学考古学研究室

目　　次

第1章　位置と環境 …… (露梨靖子) 1
第1節　地理・地質的環境 …… 1
第2節　歴史的環境 …… 2

第2章　調査に至る経緯と経過 …… (石原　聡) 5
第1節　調査に至る経緯 …… 5
第2節　調査の経過 …… 5

第3章　基本層序について …… (石原　聡) 7
第1節　基本層序について …… 7
第2節　試掘調査結果について …… 7
第3節　土層の堆積状況 …… 8
第4節　遺物包含層の堆積状況 …… 8

第4章　出土遺物について
第1節　概要 …… (石原・露梨) 13
第2節　奈良三彩・緑釉陶器 …… (石原) 14
第3節　文字関係遺物 …… (石原) 15
第4節　銅製品・銅関連遺物 …… (石原) 17
第5節　鉄製品・鉄関連遺物 …… (石原) 18
第6節　弥生土器 …… (露梨) 19
第7節　須恵器 …… (露梨) 19
第8節　土師器 …… (露梨) 24
第9節　土製品 …… (露梨) 26
第10節　土師質土器 …… (露梨) 28
第11節　石製品 …… (伊藤幸子) 28
第12節　木製品 …… (露梨) 29

第5章　遺構について …… (石原　聡) 31
第1節　校庭下調査区 …… 31
第2節　旧体育館下調査区 …… 37

第6章　まとめ
第1節　土器の特徴と年代 …… (露梨) 41
第2節　遺構について …… (石原) 49
第3節　遺跡の性格について …… (石原) 50

(考察)
第7章　鹿蔵山遺跡出土奈良三彩について ……（高橋照彦） 55
(分析)
第8章　鹿蔵山遺跡出土木製品の樹種 ……（渡辺正巳・古野　毅） 57
第9章　鹿蔵山遺跡出土青銅製品　蛇尾の材質について ……（今西寿光） 59

挿図目次

第1図　鹿蔵山遺跡の位置 …… 1
第2図　周辺の遺跡（S=1/100,000） …… 3
第3図　鹿蔵山遺跡と周辺（S=1/75,000） …… 9
第4図　調査区の配置図（S=1/1,000） …… 10
第5図　基本層序模式図（S=1/150） …… 11
第6図　文字資料種別出土割合 …… 16
第7図　文字資料器種別出土割合 …… 16
第8図　文字資料文字の位置別割合 …… 16
第9図　文字資料の文字内容別割合 …… 16
第10図　櫂の構造と名称 …… 30
第11図　校庭下調査区　井戸平面図・断面図（S=1/100） …… 32
第12図　校庭下調査区　集石1平面図・立面図（S=1/20） …… 33
第13図　校庭下調査区　V－2層上面検出状況平面図（S=1/300） …… 34
第14図　校庭下調査区　V－3層上面検出状況平面図（S=1/300） …… 35
第15図　校庭下調査区　Ⅵ層上面検出状況平面図（S=1/300） …… 36
第16図　旧体育館下調査区　集石2平面図・立面図（S=1/20） …… 38
第17図　旧体育館下調査区　V－2層上面検出状況平面図（S=1/300） …… 39
第18図　旧体育館下調査区　V－3層（上層）上面検出状況平面図（S=1/300） …… 39
第19図　旧体育館下調査区　V－3層（下層）上面検出状況平面図（S=1/300） …… 40
第20図　旧体育館下調査区　Ⅵ層上面検出状況平面図（S=1/300） …… 40
第21図　坏蓋の形態模式図 …… 42
第22図　坏身の形態模式図 …… 43
第23図　鹿蔵山遺跡出土須恵器編年表 …… 47
第24図　蛇尾①のXRFスペクトル …… 60
第25図　蛇尾②のXRFスペクトル …… 61
第26図　奈良三彩実測図（S=1/2） …… 107
第27図　文字資料（墨書）実測図（S=1/4） …… 108
第28図　文字資料（墨書）実測図（S=1/4） …… 109
第29図　文字資料（墨書・線刻）実測図（S=1/4） …… 110
第30図　文字資料（線刻・朱墨）実測図（S=1/4） …… 111
第31図　鋼製品実測図（S=1/1） …… 112
第32図　鋼製品・鋼関連遺物・鉄関連遺物実測図（1～3：S=1/1　4～21：S=1/4） …… 113
第33図　鉄製品実測図（S=1/4） …… 114
第34図　鉄製品実測図（S=1/4） …… 115
第35図　須恵器（坏蓋）実測図（S=1/4） …… 116
第36図　須恵器（坏蓋）実測図（S=1/4） …… 117
第37図　須恵器（坏身）実測図（S=1/4） …… 118
第38図　須恵器（坏身・Ⅲ）実測図（S=1/4） …… 119
第39図　須恵器（坏身）実測図（S=1/4） …… 120

第40図　須恵器（ヘラ切り坏身・皿）実測図（S=1/4）…… 121
第41図　須恵器（高坏・鉢）実測図（S=1/4）…… 122
第42図　須恵器（壺類）実測図（S=1/4）…… 123
第43図　須恵器（甕）実測図（S=1/4）…… 124
第44図　須恵器（甕）実測図（S=1/4）…… 125
第45図　須恵器（甕）実測図（S=1/4）…… 126
第46図　特殊な性格をもつ土器群（S=1/4）…… 127
第47図　土師器（坏）実測図（S=1/4）…… 128
第48図　土師器（坏）・土師質土器実測図（S=1/4）…… 129
第49図　土師器（甕）実測図（S=1/4）…… 130
第50図　土師器（甕）実測図（S=1/4）…… 131
第51図　土製品（土錘・甑・かまど）実測図（S=1/4）…… 132
第52図　土師器（製塩土器）実測図（S=1/4）…… 133
第53図　土製品（土製支脚）実測図（S=1/4）…… 134
第54図　土製品（土製支脚）実測図（S=1/4）…… 135
第55図　弥生土器・手づくね土器実測図（S=1/4）…… 136
第56図　石製品実測図（1～4：S=1/4　5：S=1/1）…… 136
第57図　木製品実測図（1・2　S=1/6）…… 137
第58図　木製品実測図（1～3　S=1/6）…… 138
第59図　木製品実測図（1～3　S=1/6）…… 139
第60図　鹿蔵山遺跡出土櫃復元図（S=1/6）…… 140

表　目　次

第1表　周辺の遺跡一覧表 …… 4
第2表　樹種鑑定結果一覧表 …… 57
第3表　奈良三彩（実測図掲載）観察表 …… 63
第4表　奈良三彩（実測図非掲載）観察表 …… 63
第5表　緑釉陶器観察表 …… 64
第6表　文字資料遺物（実測図掲載）観察表 …… 65
第7表　文字資料遺物（実測図掲載）観察表 …… 66
第8表　文字資料遺物（実測図掲載）観察表 …… 67
第9表　文字資料遺物（実測図掲載）観察表 …… 68
第10表　文字資料遺物（実測図非掲載）観察表 …… 69
第11表　文字資料遺物（実測図非掲載）観察表 …… 70
第12表　文字資料遺物（実測図非掲載）観察表 …… 71
第13表　文字資料遺物（実測図非掲載）観察表 …… 72
第14表　銅製品観察表 …… 73
第15表　鉄・銅・鍛冶関連遺物観察表 …… 74
第16表　鉄製品観察表 …… 75
第17表　鉄製品観察表 …… 76
第18表　須恵器（坏蓋）観察表 …… 76
第19表　須恵器（坏蓋）観察表 …… 77
第20表　須恵器（坏蓋）観察表 …… 78
第21表　須恵器（坏蓋）観察表 …… 79
第22表　須恵器（坏蓋）観察表 …… 80
第23表　須恵器（坏身）観察表 …… 81
第24表　須恵器（坏身）観察表 …… 82
第25表　須恵器（坏身）観察表 …… 83
第26表　須恵器（坏蓋）観察表 …… 84
第27表　須恵器（坏身）観察表 …… 85
第28表　須恵器（坏身）観察表 …… 86
第29表　須恵器（坏身）観察表 …… 87
第30表　須恵器（高坏）観察表 …… 88
第31表　須恵器（甕・壺類）観察表 …… 89
第32表　須恵器（甕・壺類）観察表 …… 90
第33表　須恵器（甕・横瓶）観察表 …… 90
第34表　須恵器（甕・横瓶）観察表 …… 91
第35表　特殊な性格をもつ土器群観察表 …… 92
第36表　特殊な性格をもつ土器群観察表 …… 93
第37表　土師器（坏身）観察表 …… 94
第38表　土師器観察表 …… 95
第39表　土師器観察表 …… 96
第40表　土師器観察表 …… 97
第41表　土師器（甕・低脚坏）観察表 …… 98
第42表　土師器（甕）観察表 …… 99
第43表　土製品（土錘）観察表 …… 100
第44表　土製品（瓶・かまど）観察表 …… 100
第45表　土師器（製塩土器）観察表 …… 100
第46表　土師器（製塩土器）観察表 …… 101
第47表　土師器（土製支脚）観察表 …… 101
第48表　土師器（土製支脚）観察表 …… 102
第49表　土師器（手づくね土器）観察表 …… 102
第50表　弥生土器（甕）観察表 …… 103
第51表　石製品観察表 …… 104
第52表　木製品観察表 …… 105

写 真 目 次

口　絵1　奈良三彩
口　絵2　上：緑釉陶器
　　下：銅製品
口　絵3　上：墨書土器（林・林原）
　　下：墨書土器（大・太・大成）
口　絵4　上：井戸内枠及覆脚部
　　下：井戸内枠及覆脚部
口　絵5　調査区と弥山
　　（校庭下調査区・南西から）

写　真1　公開風景 …… 6
写　真2　展示風景 …… 6
写　真3　出土木質遺物の顕微鏡写真… 58
写　真4　蛇尾表面① …… 59
写　真5　蛇尾表面② …… 59

写真図版1　調査前の状況 …… 141
写真図版2　校庭下調査区完掘状況 …… 142
写真図版3　上：発掘調査の様子 …… 143
　　下：調査前の状況
写真図版4　旧体育館下調査区完掘状況… 144
写真図版5　試掘調査 …… 145
写真図版6　試掘調査 …… 146
写真図版7　集石1 …… 147
写真図版8　集石2 …… 148
写真図版9　井戸 …… 149
写真図版10　井戸枠検出状況 …… 150
写真図版11　SX01 …… 151
写真図版12　奈良三彩 …… 152
写真図版13　墨書土器 …… 153
写真図版14　墨書土器 …… 154
写真図版15　墨書土器・線刻土器 …… 155
写真図版16　墨書土器・線刻土器 …… 156
写真図版17　銅製品 …… 157
写真図版18　銅製品 …… 158
写真図版19　銅製品 …… 159
写真図版20　鉄・銅関連遺物 …… 160
写真図版21　鉄製品 …… 161
写真図版22　鉄製品 …… 162
写真図版23　須恵器　坏蓋 …… 163
写真図版24　須恵器　坏蓋 …… 164
写真図版25　須恵器　坏蓋 …… 165
写真図版26　須恵器　坏蓋 …… 166
写真図版27　須恵器　坏蓋 …… 167
写真図版28　須恵器　坏身・皿 …… 168
写真図版29　須恵器　坏身・皿・高坏 … 169
写真図版30　須恵器　高坏 …… 170
写真図版31　須恵器　甑・甕 …… 171
写真図版32　須恵器　甕 …… 172
写真図版33　須恵器　甕 …… 173
写真図版34　須恵器　甕・壺 …… 174
写真図版35　須恵器　壺 …… 175
写真図版36　丹波容器・硯・漆塗ベラ … 176
写真図版37　硯・灯明皿 …… 177
写真図版38　須恵器　仏鉢他 …… 178
写真図版39　上：把手付鉢 …… 179
　　下：中世須恵器
写真図版40　土師器　坏・皿 …… 180
写真図版41　土師器　皿 …… 181
写真図版42　土師器　坏 …… 182
写真図版43　土師質土器他 …… 183
写真図版44　土師器　高坏・坏 …… 184
写真図版45　土師器　甕・低脚坏 …… 185
写真図版46　土師器　甕・土錘 …… 186
写真図版47　甑・かまど …… 187
写真図版48　製塩土器 …… 188
写真図版49　製塩土器・土製支脚 …… 189
写真図版50　上：土製支脚使用例 …… 190
　　下：弥生土器
写真図版51　弥生土器・手づくね土器 … 191
写真図版52　石製品 …… 192
写真図版53　石製品・軽石 …… 193
写真図版54　木製品 …… 194
写真図版55　木製品 …… 195
写真図版56　獣骨類 …… 196

第1章

位置と環境

第1章　位置と環境

第1節　地理・地質的環境

1．遺跡の位置

鹿蔵山遺跡は、島根県簸川郡大社町大字杵築南の鹿蔵山に所在する。

大社町は、出雲平野の西北部の極地に位置し、北に島根半島北山山系を抱え、西に日本海を望む。遺跡の所在する杵築は、町の中心地であり、北山山系弥山山地の山麓・出雲大社付近から南に広がる微高地（大社砂丘）上に立地する。ここに出雲大社の関係者の住居が集まり、参詣者を相手とした土産店・旅館・寺院・住居や学校などの公共施設等が立ち並ぶ。

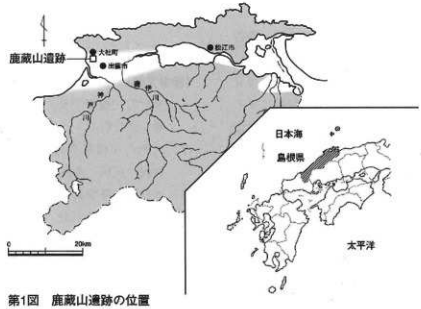
本調査区はこの大社砂丘の東南端・大社小学校の敷地内にある。この付近一帯は民家が密集する。日本海まで直線距離にして1.0km、出雲大社まで北方に0.8kmの地点に位置する。

2．遺跡周辺の地理的・地質的基盤

遺跡が位置する出雲平野は、東西南北を宍道湖・日本海・中国山地・島根半島北山山系に囲まれた、東西約20km・南北約５kmの県内最大の平野で、有数の穀倉地帯として知られる。

この平野のなかほどに、一級河川の斐伊川が、その西に神戸川がながれる。斐伊川は中国山地の島根県横田町に源があり、北上して出雲平野に流れ出たあと、東へ流れを変えて宍道湖に注ぐ。神戸川は中国山地の島根県赤来町に源をもち、大社町の南西端、出雲市との境界に河口があり、日本海に流れ出る。この河口南側一帯は、『出雲国風土記』に載る神門の水海と呼ばれる周囲35里74歩（18.84km）の入海があったところである。（文献３）

遺跡所在地を含む出雲平野のほとんどは縄文時代の海進期には海域であったが、縄文後・晩期以降の海退と三瓶山の噴火活動、二大河川である斐伊川・神戸川の沖積作用などによって平野が形成されていく。平野中央部が形成され始めたのは、遺跡の分布状況や地質学的研究から約3,600年前のことと考えられている。以来徐々に平野は広がり、人々の生活空間も広がっていった。中・近世、上流の中国山地における製鉄業の隆盛に伴い、「鉄穴流し」による土砂流入量が増大し、平野の形成・拡大に大きな役割を果たした。それまで日本海に流れ出ていた斐伊川が宍道湖へと流路を変え現在の地形に定着したのは江戸時代以降のことである。



第1図　鹿蔵山遺跡の位置

第2節　歴史的環境

以下では出雲平野における遺跡の概要を各時代毎に述べる。なお文中の（数字）は、第2図及び第1表の番号と対応している。

縄文時代

早期末の遺跡として西部の砂丘下にある上長浜貝塚（30）が知られている。海退の進む後・晩期には平野南部の丘陵下に三田谷Ⅰ遺跡（24）、後谷遺跡（36）、平野中央部に矢野遺跡（13）などがある。

本遺跡周辺には、早・晩期に菱根遺跡（11）、後・晩期に原山遺跡（8）、出雲大社境内遺跡（4）があり、北山南麓一帯が数千年前から生活の舞台となっていたことが窺える。（文献3）

弥生時代

この時期新たに平野部で集落の展開がみられ、矢野遺跡（13）、蔵小路西遺跡（14）、古志本郷遺跡（25）、姫原西遺跡（15）、中野美保遺跡（16）、青木遺跡（32）がある。首長による地域統合を推測させる墳墓の造成も盛んになり、西谷墳墓群（18）では丘陵上に大規模な四隅突出型墳丘墓が築かれた。北山南麓一帯には本遺跡の他に原山遺跡（8）、出雲大社境内遺跡（4）、南原遺跡（9）、五反配遺跡（3）などがある。

古墳時代

平野中心部の集落は衰退するとともに、西谷の四隅突出型墳丘墓も築かれなくなる。前期には大寺一号墳（33）、中期に軍原古墳（41）、神庭岩船山古墳（40）などが知られる。後期になると墳墓築造が活発化し、上島古墳（34）、大念寺古墳（19）、上塩冶築山古墳（22）、地蔵山古墳（23）と首長系統の大規模な古墳が続く。終末期になると九州系の横穴墓が出現し、神戸川右岸に上塩冶横穴墓群（21）、左岸に宝塚古墳（28）、地蔵堂横穴墓群などが築造される。北山南麓一帯には、集落遺跡に本遺跡（1）、原山遺跡（8）、南原遺跡（9）、修理免本郷遺跡（7）、ひろげ遺跡（6）がある。

奈良・平安時代

本遺跡の所在する大社町は、律令制下では出雲郡杵築郷に属していた。杵築郷は、東は出雲大川（斐伊川）で区分され、南は神門水海を隔てて神門郡と相対していた。北は日御碕から鷺浦・鵜峠まで、すなわち今の大社町域とほぼ同じであったという（文献1）。当時の官衙関連遺跡として知られるものに、神門郡家関連遺跡と比定される古志本郷遺跡（25）、神門郡の公的施設とみられる三田谷Ⅰ遺跡（24）、出雲郡家の正倉跡とされる後谷遺跡（36）などがある。絵馬・木簡・日本最古の神像・大量の墨書土器などが出土した青木遺跡（32）は、出雲郡の伊努郷と美談郷の郡境付近に位置する（文献5）。杵築大社（現出雲大社）の位置は『出雲国風土記』「出雲御埼山」（今の弥山）の項で「西のふもと下に謂はゆる所造天下大神の社坐す」と見え、およそ現在の所にあったことが知られる（文献1）。また、神門水海の汀線付近に中分貝塚（10）がある。

平安時代末

杵築大社を祀る国造出雲氏が意宇郡大領として拠点を定めていた国府地域から杵築に移住してきたのがこの頃（10世紀）と推定される（文献1）。この時代の遺跡は、出雲大社境内遺跡(4)などがある。

（露梨）

【参考文献】

1．大社町史編集委員会　1991『大社町史』上巻　大社町
2．大社町史編集委員会 2002『大社町史』史料編（民俗・考古資料）　大社町
3．大社町教育委員会　1984『鹿蔵山遺跡』
4．大社町教育委員会　2004『出雲大社境内遺跡』
5．松尾充晶　2004「奈良・平安初期の神社遺構－島根県青木遺跡－」『季刊考古学』第87号　雄山閣

第2図　周辺の遺跡（S＝1/100,000）

第1表　周辺の遺跡一覧表

地図番号	遺　跡　名	時　代	主な遺物・遺構	備　考
1	鹿蔵山遺跡	弥生～中世	奈良三彩、腰帯金具、墨書土器	官衙関連か
2	真名井銅弋出土地	弥生	銅戈、硬玉製勾玉	
3	五反配遺跡	縄文～奈良	木製品、杭列	
4	出雲大社境内遺跡	縄文～現代	旧本殿・拝殿遺構、巨大柱根	本殿国宝指定
5	奉納山経塚	中世	金銅製経筒、銭貨	
6	ひろげ遺跡	弥生～奈良	祭壇状遺構、焼き火跡	
7	修理免本郷遺跡	古墳～中世	木製品、土師器、須恵器	
8	原山遺跡	縄文～中世	配石墓、出雲平野最古の弥生土器	
9	南原遺跡	弥生～近世	弥生土器、磨製石斧	
10	中分貝塚	奈良・平安	漁具、獣骨、貝殻	神門水海関連
11	菱根遺跡	縄文	縄文土器、石器、骨角器	平野部最古級
12	鷺銅山	室町～昭和	採掘坑	
13	矢野遺跡	弥生	土壙墓、弥生土器	
14	蔵小路西遺跡	弥生～中世	弥生集落跡、中世館跡	国人領主館跡か
15	姫原西遺跡	弥生	木製品、弥生土器	
16	中野美保遺跡	弥生	四隅突出型墳丘墓	
17	荻杼古墓	中世	青磁、壺（ともに国指定）、五輪塔	
18	西谷墳墓群	弥生	四隅突出型墳丘墓、特殊器台	
19	大念寺古墳	古墳	91mの前方後円墳、横穴式石室	国史跡指定
20	天神遺跡	弥生	環濠集落跡、土師器、須恵器	
21	上塩冶横穴墓群	古墳	34支群115穴以上	
22	上塩冶築山古墳	古墳	40余mの円墳、横穴式石室	国史跡指定
23	地蔵山古墳	古墳	16mの円墳、横穴式石室	国史跡指定
24	三田谷Ⅰ遺跡	縄文～平安	丸木舟、墨書土器、斎串、石帯、掘立て柱建物	神門郡衙関連
25	古志本郷遺跡	奈良・平安	大型建物柱跡、土師器	郡家郡庁関連
26	田畑遺跡	弥生～中世	環濠集落跡、須恵器、中世土師器	
27	下古志遺跡	弥生～中世	環濠集落跡、古式土師器、建物跡	神門郡家関連
28	宝塚古墳	古墳	横穴式石室、横口式家形石棺、埴輪	国史跡指定
29	知井宮多聞院遺跡	弥生	弥生土器、須恵器、貝類	
30	上長浜貝塚	縄文	貝類、獣骨、弥生土器、須恵器	平野部最古級
31	鷺ヶ巣城跡	中世	城郭遺構	
32	青木遺跡	弥生～奈良・平安	近畿式銅鐸、四隅突出型墳丘墓、木製神像	官衙関連
33	大寺古墳	古墳	50mの前方後円墳、竪穴式石室	
34	上島古墳	古墳	円墳、竪穴式石室	
35	猪目洞窟遺物包含層	弥生・古墳	縄文土器、弥生土器、須恵器、人骨	
36	後谷遺跡	縄文～平安	礫石建物跡、竪穴住居跡	出雲郡家跡
37	上ヶ谷遺跡	縄文	縄文土器	
38	杉沢Ⅱ遺跡	奈良・平安	総柱建物、土師器、須恵器	
39	神庭荒神谷遺跡	弥生	銅剣358本、銅矛16本、銅鐸6個	国史跡指定
40	神庭岩船山古墳	古墳	48mの前方後円墳、舟形石棺	県史跡指定
41	軍原古墳	古墳	48mの前方後円墳か、長持形石棺	
42	高瀬城跡	中世	城郭遺構	

（1～12：大社町、13～33：出雲市、34・35：平田市、36～42：斐川町）

第2章

調査に至る経緯と経過

第2章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査に至る経緯

鹿蔵山遺跡は、昭和8年（1933）5月、小村尚司氏によって発見された遺跡である。

昭和37年（1962）に調査員大谷従二氏を中心として埋蔵文化財包蔵地の分布調査が行なわれ、3ヶ所の貝塚とマシジミ・ヤマトシジミ・須恵器・土師器などが確認されたことから、現大社小学校・現大社中学校を中心に広範囲に遺跡が広がる周知の遺跡として登録された。

昭和43年（1968）7月2日には、出土遺物（弥生土器・土師器・須恵器など）が町指定文化財として指定された。

昭和48年（1973）に再調査され、さらに3箇所に貝塚が分布していることが判明し、6箇所の貝塚が鹿蔵山貝塚と呼ばれるようになった。

昭和57年（1982）には、旧大社高校跡地に大社中学校統合校舎の建設に伴い発掘調査が行われた。期間は、同年3月15日から30日まで試掘調査が行われた。調査の結果、まとまった貝層は確認できなかったが、調査区の一部から土師器・須恵器片が出土した。

調査結果を踏まえて、同年6月19日に町文化財保護審議会を開催し、再調査が決定した。同年7月6日に4箇所の試掘調査を行った。調査の結果、貝層は確認できなかったものの、弥生後期前半と思われる土器破片10数点が出土した。同年7月21日に再度町文化財保護審議会が開催され、遺跡の範囲確認調査が必要であるとの意見が出され、大社中学校総合体育館建設予定地を発掘調査することとなった。

発掘調査は、昭和58年（1983）7月19日から同年8月16日まで実施され、調査対象面積は、100㎡であった。

検出された遺構としては貝塚が1カ所確認された。規模は、地表下約2mに、厚さ17cm（最大厚）東西幅2m、南北幅3.4mに分布する貝層であった。

遺物はヤマトシジミを主体とする17種の貝類、鹿の骨、奈良時代を中心とする土師器、須恵器、石器などが出土した。住居跡などは確認できなかったが、貝塚が確認されたことにより周囲に集落が存在する可能性が考えられることとなった。

【参考文献】

1．大社町教育委員会　1984『鹿蔵山遺跡』
2．大社町史編集委員会　2002「⑦鹿蔵山遺跡」『大社町史　史料編（民俗・考古資料）』大社町

第2節　調査の経過

1．試掘調査

大社小学校改築事業に伴い、校舎・プール建設予定地の遺構・遺物の有無を確認するため、試掘調査を実施した。

試掘調査区は、プール予定地に3箇所、校舎予定地に2箇所の調査区を設定した。

調査の結果、校舎予定地において、地表下約3.5mから、遺物包含層（土師器・須恵器が多量に出土）が厚さ約1mで、ほぼ水平に堆積していることが確認され、試掘調査の結果を受けて本調査を実施することとなった。

2．校庭下調査

試掘調査の結果、現地表面下約3.5mの地点から包含層が確認されたため、この包含層を対象に発掘調査することとなった。包含層検出面まで重機による掘り下げを行い、その後包含層の人力による掘り下げを行った。調査対象面積1,000㎡である。調査区をⅠ区からⅥ区に便宜的に分け、掘り下げた。調査期間は平成15年2月17日から4月17日までであった。

3．旧体育館下調査

旧体育館下調査区は、校庭下調査区の北側に位置する。校庭下調査区の調査結果を受け、体

育館下に重要遺構が存在する可能性が指摘されたため、体育館解体後、急遽500㎡の調査区を設定して発掘調査を行った。調査期間は、平成15年６月10日から７月11日までである。

第３節　調査日誌抄

平成14年度

11月６日（水）晴れ時々曇り
　試掘調査開始
12月24日（火）雨
　第Ⅳトレンチ調査区より須恵器・土師器が多量に出土。
２月８日（土）曇りのち雨
　校庭下調査区表土剥ぎ開始
２月14日（金）晴れ
　試掘調査終了
２月17日（月）晴れ
　校庭下本調査開始　作業員32名

平成15年度

４月３日（木）晴れ
　奈良三彩の多口瓶注口部出土
４月15日（火）晴れ
　大社小学校　小学生5年生・6年生　発掘現場見学会
４月17日（木）晴れ
　校庭下発掘調査終了
６月10日（火）晴れ
　旧体育館下　表土剥ぎ開始
６月16日（月）晴れ
　旧体育館調査区発掘調査開始
７月３日（木）雨
　文化財調査コンサルタント　渡辺正巳氏来訪
７月11日（金）曇り
　旧体育館下発掘調査終了
９月27日（土）晴れ
　國學院大學　椙山林繁氏、同志社大学　辰巳和弘氏出土遺物調査指導
10月６日（月）雨
　大阪大学　高橋照彦氏出土遺物調査指導
11月12日（水）晴れ
　報道発表（大社文化プレイスうらら館　ごえんホール）
11月16日（日）晴れ
　出土遺物の一般公開（第１日目）
　250名参加

写真1　公開風景

写真2　展示風景

11月17日（月）晴れ
　出土遺物の一般公開（第２日目）
　80名参加
２月18日（木）晴れ
　奈良文化財研究所　巽淳一郎氏調査指導
３月22日（月）晴れ
　奈良女子大学　舘野和己氏調査指導

平成16年度

４月20日（火）晴れ
　内田律雄氏出土遺物調査指導

（石原）

第3章

基本層序について

第３章　基本層序について

第１節　基本層序について

現大社中学校における発掘調査によって、遺物包含層の存在は判明していたが、大社小学校校内における遺構・遺物の有無については不明であったため、試掘調査を行った。さらに、試掘調査結果を受け、本調査を実施した。試掘調査および、本調査における基本層序については、第５図において掲載した。

以下試掘調査区、本調査区、大社中学校総合体育館調査区の概要、基本層序について述べる。

第２節　試掘調査結果について

(1) 試掘調査の目的

①大社小学校校内敷地は、鹿蔵山遺跡として周知の遺跡となっている。調査の範囲は、校舎及び関連施設建設予定地内に限定されるが、遺跡の範囲、規模、時代を確認する。

②現大社中学校（当調査地より南東に約300mに位置する）の建設に伴い、昭和57年～58年に行われた試掘調査及び本調査の結果、遺構・遺物が確認されており、この調査結果との関連性の有無について確認する。

(2) 試掘調査の概要

平成14年11月６日から平成15年２月14日まで継続して実施した。プール建設予定地に３ヶ所、本校舎建設予定地に２ヶ所のトレンチを設定した。調査総面積は、331㎡である。

(3) 試掘調査の結果

①第１トレンチ（写真図版５上段）

プール建設予定地の南西側に南北10m、東西10mのトレンチを設定し、調査した。しかしがら、上層はコンクリートブロックなどを包含する撹乱層、また下層は有機性のない淡黄褐色のハマ砂のみであり、遺物包含層は確認できなかった。

②第２トレンチ（写真図版５下段～６）

プール建設予定地の北東側に南北10m、東西10mのトレンチを設定し、調査した。有機性のないハマ砂の下層から遺物包含層を確認した。遺物包含層（Ⅴ層）の厚さは約45cmである。包含層は、南側から北側に下がる約30度の斜面を持つ。（写真図版６下段）包含層中から、須恵器・土師器の破片約200点が出土している。

③第３トレンチ

第２トレンチより南側１mに南北４m、東西４mのトレンチを設定し、調査した。第２トレンチで確認した遺物包含層（Ⅴ層）の南側への広がりを確認するために設定したトレンチである。包含層の傾斜は続くが、調査区の途中で、上面からの撹乱により削平されていることが確認された。

④第４トレンチ

校舎建設予定地の南西側に南北10m、東西10mのトレンチを設定し、調査した。表土層が１m堆積しており、その下層に有機性のないハマ砂が、2.5m堆積し、地表下約3.5mで遺物包含層（Ⅴ層）を確認した。遺物包含層は、ほぼ水平に良好に残存していることが判明した。

⑤第５トレンチ

校舎建設予定地の南東側に南北５m、東西３mのトレンチを設定し、調査した。第４トレンチから東へ50mの位置に設定した。表土下には、石膏ボードが1.6m堆積しており、その直下から旧表土面が検出された。旧表土面からは、現代の遺物が出土しており、旧表土面も現代の面であると考えられる。なお、この旧表土は、西側に傾斜して上がっている。

土層の分層の結果では、炭化物の有無や色調によりⅠ層からⅦ層までが分層できるが、遺物包含層として確認できるのは、Ⅴ層のみである。Ⅴ層は、出土遺物から７世紀後半から９世紀前

半の遺物を中心とする包含層である。なお、Ⅴ層は、土層の色調の変化、遺構面の確認からさらにⅤ－1層からⅤ－3層に細分している。

第3節　土層の堆積状況

試掘調査の結果から、第4トレンチ及び第5トレンチ部分（校舎建設予定地）について発掘調査を行うこととなった。

（校庭下調査区）

第4トレンチ・第5トレンチを含む部分である。

調査区内では、Ⅴ層が調査区東側から西側にむかって緩やかに下がる傾斜を確認した。また、北側から南側にむかって緩やかに下がる傾斜も確認できた。本調査区では、南西側にすり鉢状に傾斜しており、もっとも低い位置から井戸を1基検出した。

（旧体育館下調査区）

旧体育館においてもⅤ層を確認できた。Ⅴ層は、東西軸では、校庭下調査区とは逆に西側から東側にむかって緩やかに下がる傾斜を確認した。また、南北軸では、校庭下調査区と同様に北側から南側にむかって緩やかに下がる傾斜も確認できた。この傾斜は、体育館下調査区から、井戸の確認された場所にむかって下がる。

（大社中学校A1調査地点）

大社中学校総合体育館建設予定地のA1調査地点（第3図）においては、砂の堆積状況が現地表下約1.3mから斑点状褐色砂層（15～10cm）、黒褐色砂層（10cm弱）、茶褐色砂層（25cm）と堆積し、その下に黄色砂層が続いて深く堆積していると考えられる。このうち、遺物包含層は、黒褐色砂層と茶褐色砂層である。調査区内での当時の砂丘は東が高く西が低い、南が高く北が低いという南東から北西へ傾斜していた。(注1)

第4節　遺物包含層の堆積状況

試掘調査の結果、および本調査区の壁面観察による結果から、大社小学校内の遺物包含層の堆積状況について考察したい。

砂丘の形成にあたっては、調査区の南の方角に位置したと想定される神門水海の影響を考えておく必要があろう。鹿蔵山遺跡においても、大社中学校体育館地点において、貝層が発見されていることから、神門水海の汀線からそれほどかけ離れていたとは考えにくい。確認した遺物包含層は、南北方向の標高差2m前後の起伏が確認されており、おそらくは、遺跡の南方向に広がる神門水海からの風成砂により形成されていたと考えられる。

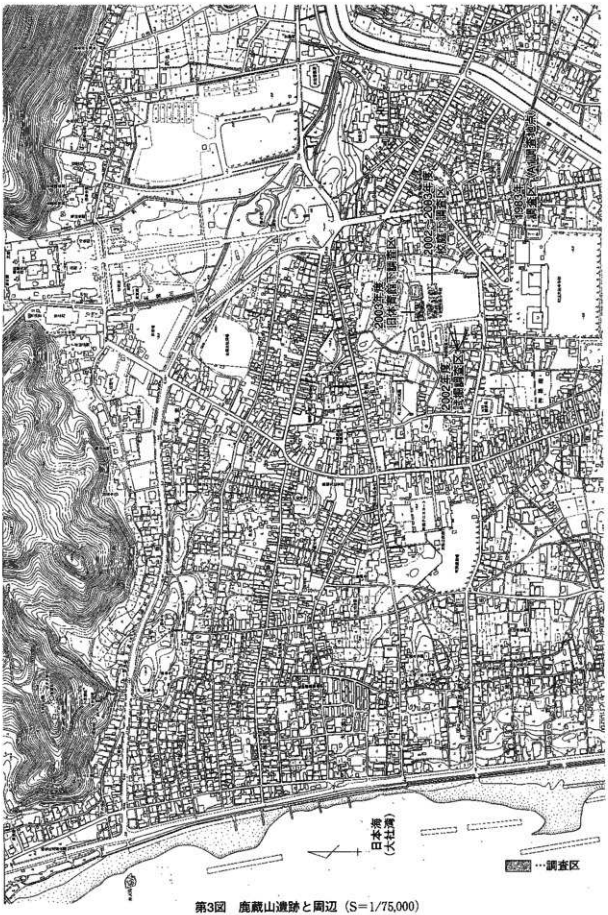
遺物包含層として確認できるのは、Ⅴ層のみであり、上層に存在が予想される中・近世の遺構・遺物包含層は確認できなかった。可能性としては、すでに削平されて消滅している可能性である。

その一つの可能性を示唆する資料としては、大社小学校北側の鹿蔵山西側砂丘低地に所在する鹿蔵山経塚である。畑の耕作中に土師質土器81点（梵字の墨書）・銭貨約27点が出土しており、16世紀前後の遺跡と考えられる。ごく浅い深さから中世末の遺構が検出されていることから、中世以降大規模な地形の変動はなかったと推定できる。

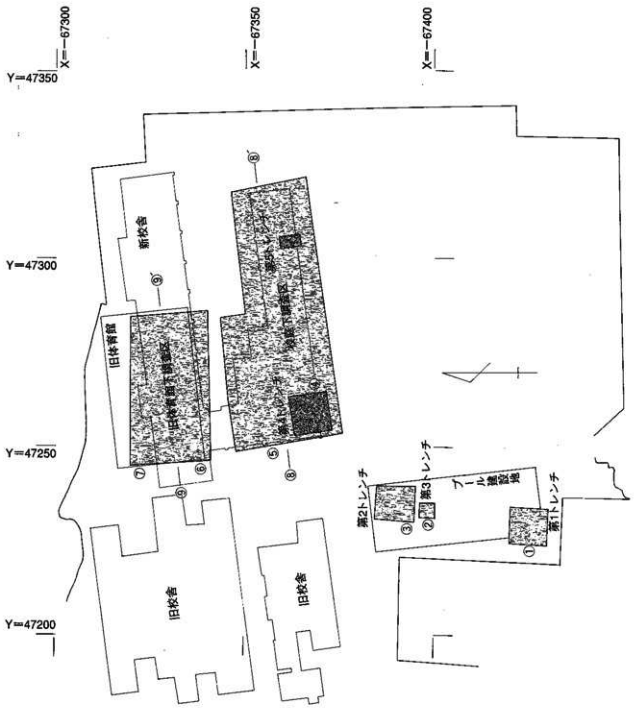
大社小学校校地内の平坦面は鹿蔵山の砂丘地を大規模にL字状にカットして、平坦面をつくり、校舎が建設されていることから、中世以降の遺構面や遺物包含層はすでに削平されて消滅している可能性が考えられる。

（石原）

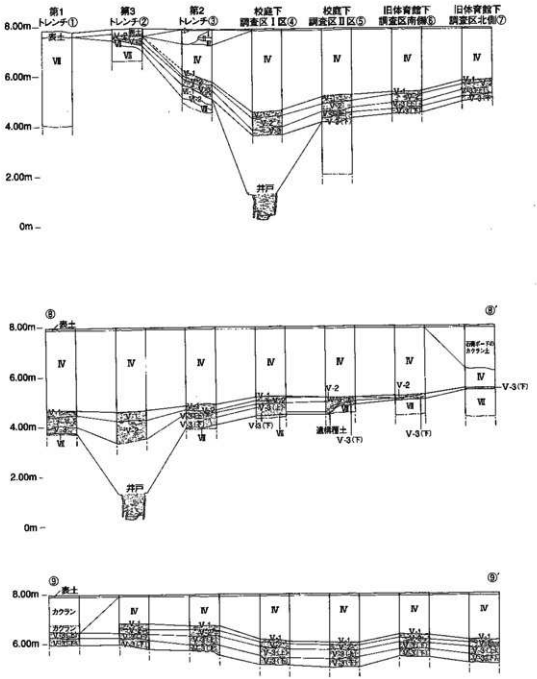
【註】註1　大社町教育委員会　1984『鹿蔵山遺跡』



第3図　鹿蔵山遺跡と周辺（S＝1/75,000）



第4図　調査区の配置図（S＝1/1,000）（図中○囲み数字は、第５図と対応）



土層注記

Ⅰ　灰茶色砂質土　よくしまる。炭・焼土、近・現代の陶磁器を包含する

Ⅱ　灰茶褐色砂質土　ややしまる。炭混在。

Ⅲ　暗灰茶色砂質土　ややしまる。炭混在。

Ⅳ　灰黄色砂質土　しまりゆるい。無機質。

Ⅴ〔7世紀後半～9世紀前半を中心とする遺物包含層〕

Ⅴ－1　暗灰褐色砂質土　しまりゆるい。黒色土が所々で混じり合う。須恵器・土師器の細片を多量に含む。

Ⅴ－2　暗褐色砂質土　ややしまる。黒褐色土が交互に重なり合う。暗灰褐色砂質土を斑状に多く含む。須恵器・土師器を多量に含む。

Ⅴ－3（上）褐色砂質土　よくしまる。暗褐色砂質土と褐色砂質土が斑状に混じり合う。

Ⅴ－3（下）暗黄褐色砂質土　よくしまる。炭が混在する。

Ⅵ－1　明灰赤褐色砂質土　ややしまる。炭が混在する。

Ⅵ－2　明灰赤褐色砂質土　しまりゆるい。炭が混在する。

Ⅶ　黄褐色砂質土　しまりなし。無機質。

第5図　基本層序模式図（S＝1/150）（図中○囲み数字は第４図と対応）

第4章

出土遺物について

第4章　出土遺物について

第1節　概要

1．掲載遺物について

本遺跡は砂丘上に立地し、本調査区の土層は風成砂によって形成されていること[註1]に加えて、調査区が砂丘間の低地に位置し、上方からの流入砂も考えられることから土層堆積からの検討はほぼ不可能であった。

今回の調査の出土点数は1万点弱と、調査面積に比して膨大な数の遺物が出土している。これらの出土遺物のほとんどが遺物包含層からの出土遺物であることを鑑み[註2]て、掲載遺物の選出に際しては層位や調査区を無視して遺物の形式的分類を進め、時代を示す個体、また時代毎に器種・形態のバリエーションを示す個体を選出した[註3]。選出作業にあたっては本遺跡の消長及び出土傾向を示す客観的情報提供を主眼に置いている。ただし1点のみの出土であっても上記の条件を満たすものであれば図化・掲載しており、逆に同タイプのものが多く出土していれば、一部割愛したものもあり、本報告書の掲載遺物の比率がそれぞれの出土量における割合を反映しているものではない。

また本調査区での主要年代を奈良三彩などが出土した包含層（Ⅴ層）に求め、Ⅴ層出土遺物を対象に選出・図化・写真撮影を行い、表土層から近世～現代の陶磁器片が出土しているが割愛した。

図面を掲載した遺物については全点、写真のみの掲載遺物についても基本的に観察表を作成した。

2．包含層出土遺物の時期的傾向

最も古いもので、弥生時代Ⅰ－4様式（文献1）の甕の口縁部小片が1点確認されている。その後は弥生土器ではⅤ様式、須恵器で出雲2期（文献2・古墳時代前期）のものが甕の口縁部に限定される形でわずかに確認されている。

その後は一旦遺物の断絶がみられ、突如7世紀後半以降の遺物量が急激に増加する。その大半は須恵器の坏身・土師器の坏・皿・甕などの日用雑器であるが、奈良三彩などの施釉陶器・腰帯金具などの銅製品・墨書土器といった特殊な性格をもつ遺物を含む点が注目される。また土師器の一部に、飛鳥時代の京域のものである可能性が指摘される搬入土器が少量混じる。平安時代前期まで須恵器・土師器などが出土し続けるが、遺物量は減少していき、平安期までで終息する。

中世・近世の出土遺物・包含層は確認できない。

（石原・露梨）

【註】

註1　第3章第1節

註2　出土遺物全点の基本データを登録した台帳を作成した。本調査区では包含層Ⅴ層を1～3層に分層したものの、台帳を元に層位ごとの出土傾向を検討した結果、弥生土器・奈良三彩・墨書土器・須恵器など、全種において1～3層からまんべんなく出土していること、また層を越えて接合関係にある個体も確認された

註3　報告書作成期間の制約上図化できなかったタイプについても、必要に応じて写真で掲載している。

【参考文献】

1．正岡睦夫・松本岩雄編　1992『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社

2．大谷晃二　1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　島根考古学会

第2節　奈良三彩・緑釉陶器

1．奈良三彩（第26図）

出土した奈良三彩破片点数は12点である。

出土状況としては、1ヶ所から集中して出土したわけではなく、V－1～3層中にそれぞればらばらに出土しており、廃棄後にかなり移動したと考えられる。

1は、奈良三彩の多口瓶である。破片2点をもとに、滋賀県南滋賀廃寺出土の多口瓶を参考にして復元した[註1]。破片2点は、校庭下調査区より出土しており、注口部及び高台部分のみ残存している。器形を復元した法量は、器高35.5cm、口径12.4cm、底径10.4cmである。高台部分は、貼り付けて成形されており、そのほとんどが、欠損している。胴部外底面には、ヘラ削りが確認できる。

多口瓶の出土例としては、奈良県奈良市薬師寺（三彩）、同奈良市佐保山遺跡（二彩）、京都府京都市北野廃寺（二彩）、同京都市梅ヶ畑祭祀遺跡（二彩）滋賀県大津市南滋賀廃寺（二彩）東京都調布市上石原遺跡（二彩）などにおいて出土例がみられる[註2]。

2は、多口瓶注口部の口縁部である可能性もあるが、口縁部上面に幅1cm程度の平坦面がめぐることから、火舎の口縁部の可能性も考えられる[註3]。

3は、多口瓶注口部の口縁部であると考えられ、1と同一個体である可能性が考えられる。

また、破片であるため、図化していないが、多口瓶の体部及び注口部と考えられる破片が上記3点のほか、8点出土しており、本遺跡出土奈良三彩は、多口瓶1点と火舎1点の2点が出土している可能性が考えられる。（第4表、口絵1・写真図版12）

時期については、8世紀前半段階であるとの見解を得ている[註4]。一方、須恵器の年代は、8世紀後半から9世紀に主要年代があるとしており[註5]、奈良三彩は、時期的に主要年代よりもやや古い年代である。可能性としては、貴重な遺物であるため、伝世した遺物と考えられる。

なお、奈良三彩については、第7章に高橋照彦氏の考察を掲載した。

2．緑釉陶器（口絵2上）

いずれも破片であるため、図化していない。出土総数は、11点であり出土状況としては、奈良三彩と同様に1ヶ所から集中して出土したわけではなく、V－1～3層中からそれぞればらばらに出土しており、廃棄後にかなり移動したと考えられる。

器形のわかるものとしては、1、6，7が碗である。6は無台椀、7は高台付椀であり、いずれも奈良県興福寺一乗院跡に出土例がみられる。

8～11が水瓶の一部である可能性がある。11の外面には、溝の浅い2本の沈線が確認できる[註6]。

（石原）

【註】

註1　梅原末治　1944「正倉院蔵の所謂三彩釉器に就いて」『美術研究』137　美術研究所
奈良文化財研究所　2004「古代の官衙遺跡Ⅱ　遺物・遺跡編」

註2　愛知県陶磁資料館　1998『日本の三彩と緑釉－天平に咲いた華－』

註3　奈良文化財研究所　巽淳一郎氏の御教示による。

註4　大阪大学　高橋照彦氏の御教示による。

註5　本書第6章　第1節を参照

註6　奈良文化財研究所　巽淳一郎氏の御教示による。

第3節　文字関係遺物

1．文字関係遺物の出土量と傾向

本節で述べる文字関係資料の合計は、221点である。出土層位は、V－1層から3層に分散して包含されており、層位的な傾向はつかめない。発掘調査総面積が、1,500㎡であるので、6.7㎡あたり1点の出土量となる。内訳は、墨書土器が193点と全体の文字出土量の87%である。また、文字と判別できない遺物も含まれるが線刻のある土器が、25点で全体の11%、その他、朱墨の遺物2点、スタンプ状の刺突文が確認できる遺物1点が含まれる。

器種別では、土師器が213点、須恵器が8点であり、土師器の割合が96%と圧倒的である。鹿蔵山遺跡の土師器・須恵器について全出土遺物の破片点数を統計化していないが、コンテナ数では、須恵器・土師器ともほぼ同量の出土であり、出土傾向として土師器が突出して多いとは言い切れない。したがって、鹿蔵山遺跡における土師器への墨書・線刻は、本遺跡における文字資料の一つの特徴といえよう。

また、文字の位置は、外底面が181点と全体の82%となる。内底面12点、外側面13点、内鰭面11点とほぼ同量であるが、内底面は、12点のうち8点が線刻記号である。また、外・内の両底面に墨書が確認できるものが2点であった。

2．文字の判読可能な土器

現段階で文字と判読できた土器は、80点である。以下墨書土器を中心に文字資料の文字内容について見ていきたい。

(1)「林」・「林原」「原」（第27図）

最も出土量の多い文字は、「林」・「林原」・「原」である。「林」の可能性がある土器が28点、また「林原」の可能性がある土器が11点、「原」の可能性がある土器が2点出土している。（第27図1～37）墨書の判読できる土器のうち、53%をこの「林」「林原」・「原」で占められている。「原」は上部に文字が続く可能性があり、「林」が、「林原」を省略したと考えるならば、「林原」が本来の墨書の目的とする文字になろう。この文字の性格について詳細は、不明であるが、地名を示すとすれば、現在の大社町内に林原の地名は存在しない。松江市佐草町の八重垣神社の南西部に林原の地名が残されている。国造出雲氏が大庭（松江市大庭町）から杵築に移住してきたのが10世紀頃とされており[註1]、移住以前の杵築周辺地域と大庭周辺地域の関連性を考察する上で参考となる資料となろう[註2]。

(2)「大」・「大成」・「成」・「太」（第28図）

「大」が墨書9点、線刻2点の計11点である。墨書土器は、全て外底面に墨書されている。また、線刻については、外側面に刻書されている。「大成」が2点のほか、欠損により「成」の部分のみが確認できるものもある。「太」については、墨書であるが、外側面によこ書きされており、「大」線刻のものと特徴が似通っているため、同類としたものである。

「大」と墨書された土器は、松江市出雲国府跡、松江市平ノ前廃寺、宍道町堀平遺跡、仁多町カネツキ免遺跡、八代長福寺遺跡、芝原遺跡、大田市白杯遺跡などで出土している[註3]。

(3)「高志」（第28図）

「高志」の可能性がある墨書土器が2点、「志」が2点、「高」が1点出土している。『出雲国風土記』には、神門郡に古志郷が所在するとあり、となり合う出雲郡と神門郡との交流を示すものであろうか。

(4)「堂」・「宮」・「社」（第28図）

「堂」が4点、「宮」が1点、「社」が2点出土している。いずれも宗教的施設を示唆する墨書である。当遺跡の性格付けに関連すると思われる。第6章第3節で述べることにしたい。

(5)「三家」・「家」（第28図）

「三家」の可能性のあるもの1点、「家」の可能性のあるものが2点出土している。第6章第3

節で述べるが、郷家の所在に関連する資料の可能性がある。

(6) その他の判読文字（第28図）

「土木」「爪」「飯□」「方」「皆」「部」「壬」「禾」の可能性がある墨書土器がそれぞれ1点、また「廾」は2点が出土している。それぞれの墨書内容の正確については、現在のところ不明である。

(7) 記号

口縁外面に「○」の記号を墨書したもの（第29図32）、底部内面に幅1cm毎に5条の平行線文が確認できる線刻土器（第30図3）。内面底部にスタンプ状の刺突文が確認できる土器（第30図4）などである。いずれも墨書は明確であるが、欠損により全体が不明確である。記号としたもののなかにも文字と成り得るものも含まれる可能性もある。

3．文字の判読不明な土器

判読が困難であるが、墨書が明確に確認できる遺物については、できるだけ掲載することに努めた（第29図・第30図）。現在までのところ不明としているが、何らかの文字として確認できる可能性がある。実測図を参照していただき、ご意見をいただきたいところである。

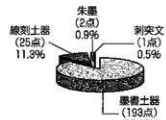
（石原）

【註】

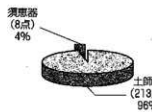
註1　大社町史編集委員会　1991『大社町史』上巻　大社町

註2　岡和彦氏の御教示による。

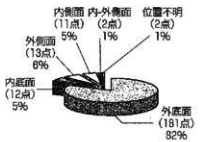
註4　島根県古代文化センター　2003『山陰古代文字資料集成』Ⅰ（出雲・石見・隠岐編）



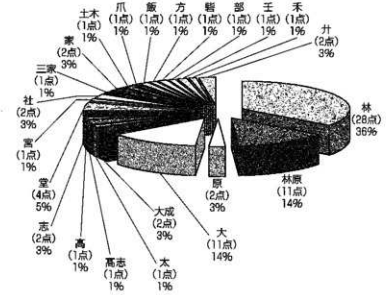
第6図　文字資料種別出土割合



第7図　文字資料器種別出土割合



第8図　文字資料文字の位置別割合



第9図　文字資料の文字内容別割合

第4節　銅製品・銅関連遺物

1．腰帯金具（第31図1～7）

腰帯金具と考えられる銅製品は、7点出土している。出土状況としては、1ヶ所から集中して出土したわけではなく、V－1～3層や、井戸・ピットとそれぞればらばらに出土しており、廃棄後にかなり移動したと考えられる。1、2は、丸鞆の表金具である。扁平な半円形を呈し、下寄りに細長い長方形のくぐり孔（透孔）を設けている。裏面には、3方に鋲足をつける。いずれも先端が欠損している。3は、巡方の表金具である。方形を呈し、丸鞆と同様に、下寄りに細長いくぐり孔（透孔）を設けている。表面には、部分的に漆塗痕が残る。また、裏面には、4方に鋲足をつける。そのうち1ヶ所は、残存しているが、先端部は欠損しているものとみられる。他の3ヶ所は、鋲の痕跡が残るのみである。4は、巡方の裏金具である。3とともにセット関係にあるとみられる。上部については欠損しており不明であるが、下寄りに2ヶ所の穿孔がみられる。5は、飾り金具である。裏面には、2方に鋲足が残る。そのうち1ヶ所にC状の裏金具が残存している。腰帯金具に付属する飾り金具であると考えられ、類例としては、山口県ジーコンボ古墳群でみられる[註1]。6は、コハゼ形の小型の蛇尾である。表金具であり、裏面に3ヶ所の浅いくぼみが確認されることから3方に鋲足が存在したと考えられる。

7は、大型の蛇尾である。表・裏金具がセットとなっている。長方形の先端を弧形につくる横長のものである。一部で赤色顔料が確認できるほか、部分的に金色に光る。蛍光X線分析の結果では、金銅製金具であることが確認された[註2]。なお、現在までのところ島根県内の銅製腰帯金具に金銅製のものは、本遺跡以外に確認されていない。また、山陰地域においても鳥取県倉吉市大御堂廃寺で出土した金銅製蛇尾1点の出土例が確認できるのみである[註3]。

2．刀装具（第31図8）

刀の鍔の表裏、柄と鞘とにあたる部分に添える切羽の可能性がある。表面のみに稜をもつ。

なお、第31図1～8については、保存処理を実施している。

3．不明銅製品（第31図9・第32図1～3）

9は、大部分が欠損していると考えられ、製品を想定することは困難であるが、厚さ0.2cmと薄手であり、上部に段を有し、下端に向かって広がる形態から、何らかの脚部が想定できようか。第32図1・2は銅粒である。球形であり、全体的に緑青に覆われる。2は、2点が固着したものと考えられる。銅の鋳造の際に生成した銅粒であろうか。3は、板状の銅板である。全体的に緑青に覆われている。鋳造の際の銅素材であろうか。

4．銅関連遺物（第32図4～8）

銅の鋳造に関連したと考えられる溶解炉片、銅滓が出土しているが、鋳造遺構は検出していない。

4～7は、炉壁でありいずれも表面が紫紅色である。また、6は炉壁胎土中に銅粒を包含しており（写真図版20中段右）、これらは銅に関する炉壁であると考えられる。広範囲に散在して出土しており、二次的に移動したものであると考えられる。

8は、銅滓である。全体に緑青で覆われており、側面には木炭痕が確認できる。

（石原）

【註】

註1　山口県埋蔵文化財センター　1983『見島ジーコンボ古墳群』山口県埋蔵文化財調査報告第73号　山口県教育委員会

註2　本書第9章の蛍光X線分析結果を参照

註3　奈良文化財研究所　2002『銙帯をめぐる諸問題』

第5節　鉄製品・鉄関連遺物

鉄製品としては、釘、鉄鏃、刀子などが確認され、また鍛冶に関連する遺物も数は少ないが出土している。出土状況としては、1ヶ所から集中して出土したわけではなく、広範囲にまた、V－1～3層中にそれぞればらばらに出土しており、廃棄後にかなり移動したと考えられる。また、鍛冶に関連する明確な遺構も検出していない。

鉄製品のうち、第34図1～10については、保存処理を実施している。

1．鉄製品（第33・34図）

第33図1～7は、鉄釘である。釘は、いずれも小型のものであり、断面方形の角釘である。頭部が残存している釘は、上端部を折り曲げて頭部を作り出している。第33図8～12、及び第34図1・2は、鉄鏃である。8～12は、鏃身部が欠損しており、茎部のみが残存している。1・2は、鏃身部のみが残存しており、外形が方頭形、断面平造のものである。第33図13～23は刀子である。欠損により大部分の刀子は、形状が不明であるが、22・23は、比較的残存状態が良い。22は、刃幅9.5cmであり、他の大部分の刀子は、この刀子と同規模であると考えられる。23は、大型の刀子であり、全長22.9cm、刃幅15.4cmである。

第34図3・4は火打ち金である。4の上端には0.5cmの円形の穿孔が見られる。持ち手の紐通し部分であろうか。第34図5は、紡錘車である。直径5.2cm前後で中心に円形の孔が開く。6・7は、鍬先である。方形鍬先で長方形鉄板の両端を折り曲げて装着部としたものである。8は、U字状の鋤先である。全長8.5cmと小型のものであり、祭祀用のミニチュア鋤先である可能性がある[註1]。9は、袋状鉄斧である。袋部は断面方形である。10は、鉸具である。馬具として使用されたものであろうか。11は、頭部付近が断面2cm前後の方形であり、他に出土した釘類よりも断面で比較すると極端に大きく、可能性としては鍛冶具の鏨類もしくは、巨大な釘が想定されよう。12・13は、用途不明品である。12は、先端が細くなっており鑢状の製品が想定されようか。14は、断面方形で体部を90°折り曲げて成形されており、鏃状の製品が想定される。15は、大部分は欠損しており用途不明であるが、上部は折り曲げによりリング状にまた下部は、フック状の部分を作り出している。16・17は、環状の製品である。16の用途については、井戸内枠に転用された樋蓋に付属する樋金具（第10図P30参照）の可能性を指摘しておきたい。18・19は鉄鏃であると考えられる。いずれも大部分が欠損しているため刃幅などは不明である。18は、刃部が直線的で先端が曲がる形状である。20は、用途不明である。釘もしくは鏨であろうか。

2．鉄関連遺物（第32図）

本調査区において、明確な鍛冶遺構は検出されていないが、鍛冶に関連する遺物が出土していることから、周囲に鍛冶遺構が存在する可能性を示唆する遺物群である。

9～13は、羽口である。このうち最も残存状態が良好であるのは、9の羽口である。旧体育館下調査区、Ⅵ層上面の遺構面から出土している。先端部分の残存が良好であり、外径7.5cm前後、内径2.1cmである。また、10の羽口は、内面の断面が方形である。14～21は椀形鍛冶滓である。14～17は小型、18～21は、比較的大型の滓である。21の上面には1ヶ所の工具痕がみられる。第4章銅製品・銅関連遺物でも述べているが、銅の鋳造に関連する遺物も出土しており、鉄・銅の製品の生産に関連する遺構が周囲に存在する可能性もあり、今後周辺の発掘調査において鍛冶遺構の存在に注意する必要があろう。

（石原）

【註】

註1　國學院大學　椙山林繁氏の御教示による。

第6節　弥生土器（第56図1）

校庭下調査区・旧体育館下調査区のV－1～3層から、破片点数にして20点余が出土した。そのうち図化したものは1点のみで、他は写真のみで掲載した。

ほとんどがV－1様式のもので、口縁部に、上下に拡張された幅の狭い帯状の部位を持ち、その直線的な拡張部外面に3～5条の凹線文が施されている。凹線文には、凹線の幅と、凹線文間の凸部幅が均一なもの（第56図1、写真図版50下－8）、凸部幅が広く、浅く狭い沈線状のもの（写真図版50下－3）、施文の後のナデ調整によって、押しつぶされて沈線状になったもの（写真図版50下－10・15）拡張部に均一に施されたもの、上半部に偏って施されたもの（写真図版50下－9・13・14）などがある。今回の調査区で出土したうち最も古い時期のものにI－4様式の甕の口縁部小片（写真図版50下－19）が1点確認されている。写真図版50下－16は草田5期の複合口縁甕である。写真図版50下－18は、弥生甕底部としたが、内面にナデ調整が施されていることから台形土器の可能性も残る。

（露梨）

【註】

註1　文献1の分類による。

註2　同上

註3　文献4の分類による。

【参考文献】

1．正岡睦夫・松本岩雄編　1992『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社

2．佐原真　1964『紫雲出』香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会　真陽社

3．佐原真　1986『弥生文化の研究3　弥生土器I』雄山閣

4．鹿島町教育委員会　1992『南講武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5

5．島根県土木部河川課・島根県教育委員会　2001『朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13冊　西川津遺跡Ⅷ』

第7節　須恵器

校庭下・旧体育館下両調査区V－1～3層からまんべんなく大量に出土した。

個体数が非常に多く、坏蓋・坏身・皿・高坏・鉢・壺・甕類など器種・器形ともにバラエティーに富む。今回の調査では、各器形の変遷を層位別におさえて検討することはできないが、既に提示されている編年研究をもとに、後述する第6章第1節にて鹿蔵山遺跡出土土器の特徴をまとめることとする。

また硯・灯明皿や丹溜め容器などといった特殊な用途に用いられる土器も一部出土している（第46図）。これらについては本節第8項で一括して述べる。

さらに、一部に竹管文やヘラ記号、墨書などを記す個体が、各器種に混じるのが目立つ。墨書土器については第4章第3節で一括して述べている。

以下では各器種の概略・特徴・個体別の観察などを述べることとする。なお、以下文中の分類は第6章第1節に詳しい。

1．坏蓋（第35図・第36図）

天井部形態では大別して2種、すなわち曲面を意識して形作るものと、平面形態であるものに分けられる。またその調整技法として、前者に回転ヘラケズリや、糸切りやヘラ切りの後に稜を削るものなどがあり、後者に糸切りやヘラ切り、またその後に回転ナデやヘラケズリで整形するものなどがある。

口縁部形態は3種類で、かえりを有するもの、端部を下方に折り曲げて接地するもの、端部を下方につまんで隅状に突出するものがある。

つまみを有するものでは、ボタン状に貼り付ける宝珠つまみ、環状に貼り付ける輪状つまみ、さらにその中間形態に、宝珠つまみに凹面を形成することにより輪状を呈すつまみの3種がある。技法の異なる二つの輪状つまみを識別するために、本報告書では便宜的に前者を輪状つまみ、後者を擬輪状つまみとして呼び分けることとする。

以下各タイプ毎に個体別にみてゆくこととする。

①曲面を意識した天井部とかえりを有するタイプ（第35図3～15・高広編年ⅡB期に相当）は天井部をすべて回転ヘラケズリで整形する。3～5は小型で頂部が突出する宝珠つまみをもつ。6・7は大型で輪状つまみをもつ。8～15は中型でかつ、つまみ形状が各種揃い、頂部が突出する宝珠つまみ・頂部の平坦な宝珠つまみ（14）・輪状つまみ・擬輪状つまみ（13・15）が確認された。これら中型の蓋には竹管文が施される個体（13～15）が集中するのが特徴的である（写真図版24）。

②曲面を意識した天井部に口縁部を下方に折り曲げて接地させるタイプ（第35図22～26・高広編年ⅢB～ⅣA期に相当）は天井部を回転ヘラケズリ、あるいは回転ヘラケズリの後ナデをほどこすものである。18は輪状つまみ内部に静止糸切り痕を残す（高広編年ⅢB期に相当）。19～26は輪状つまみの内部の糸切り痕をナデ消す（高広編年ⅣA期か）。

③曲面を意識した天井部に口縁端部をつまみ下方に突出させるタイプ(第36図1～4)は天井部に回転ヘラケズリ後ナデを施すもの（2・3）、丁寧な回転ナデで切り離し調整痕をナデ消すもの（1）、ヘラ切り後ナデを施すもの（4）がある。つまみの形状は頂部の突出する宝珠つまみ、平坦な宝珠つまみ、擬輪状つまみがある。1は口縁端部を下方に折り曲げながらも、天井部と口縁部の境に屈曲点をもち、下方に突出するタイプとの中間形態である印象を受ける。

④平坦な天井部に口縁端部をつまみ下方に突出するタイプ（第36図5～20・22）は天井部の外周を回転ヘラケズリの後ナデを施すもの（6・8～11・14～16・19）ヘラ切りの後ナデを施すもの（7・12・13・18・20）、回転糸切り痕が残るもの（18）がある。これらは小型・中型・大型に分けることができる。小型のものでは宝珠つまみが用いられている。17は平坦な天井部に回転ナデを施し、肩に明瞭な稜をもつ。直線的に広がる体部をもち、口縁部を横に広げてから下方につまみ出し、突出して接地する。灰白色の軟質な胎土をもつ。これは体育館下のSX01から坏身（第40図7）とセットで出土した。（写真図版11、27）

⑤第36図23～33は天井部がヘラ切りの一群である。後ナデを施す。天井部を曲面に仕上げるもの（23～25）、平面であるもの（26・27）、押しつぶして平坦にするもの（28～31）、さらに口縁部ラインにつまみ頂部がくる、強い凹面に形作るもの（32・33）がある。28は一部に工具による圧痕が残る。中心に向かって直線的に、二段階に引っ張る（写真図版24）。ヘラ記号の一種と考えられる。

2．坏（第37図・第38図1～7・第39図・第40図1～10）

底部形態では、坏蓋同様に曲面と平面に分けることができる。前者はヘラケズリで整形し、後者は糸切り、ヘラ切りといった切り離し技法が観察できる。

体部は外傾するもの、内湾するもの、外反するものがあり、さらに口縁端部に稜をもつもの、端部を折り曲げるもの、端部内縁に面をもつものなどがある。

高台のつくものでは、ハの字状にひらくしっかりした高台と低平な高台がある。前者は主に底部の中央寄り、さらにいうなら曲面の底部や、平坦な底部からゆるやかに立ち上がり外傾する体部をもつ器種につく。一方低平な高台は、平坦な底部の外周沿い（あるいは外周沿いからやや内寄り）につき、これは直線的に外傾して立ち上がる器種に限られる。

以下は各タイプ毎に個体別に述べる。

高台をもたない坏身について（第37図）

①1は外面に回転ヘラケズリを施す。口縁端部を外方に折り曲げる。

②平面形態の底部から、ゆるやかに立ち上がり

外傾する体部をもつタイプのなかで口縁端部にアクセントをもつもの（端部折り曲げ2～6・10、端部外縁玉縁状7～9、端部外面に沈線をめぐらす13～15）。端部を折り曲げるものでは静止糸切り痕、回転糸切り痕のちナデ消し、回転糸切り痕が確認された。それに対して玉縁状及び外面に沈線をめぐらす口縁部をもつものでは回転糸切り痕のみが確認された。7は内面に格子状のヘラ記号を刻む(写真図版29)。

③平面形態の底部から、ゆるやかに立ち上がり外傾する体部をもつタイプのなかで、口縁端部を上方へ意識してひきあげるもの。これらは端部内縁に内傾する面をもつ。16は回転糸切り痕をナデ消す。17～20は回転糸切り痕を残す。18・20は口縁端部外面に工具を当てて整形する。この2点が沈線ではなく平坦面を作ることを意識しているということは、①に分類された13～15の口縁端部外縁にめぐらされた沈線の凹面が均一な曲面をもつのに対し、工具痕の谷線（1点破線）をはさんだ傾き、幅が均一でないことから窺える。

④平面形態の底部からゆるやかに外傾して立ち上がり体部と口縁部に明瞭な境をもたないもの（第37図11・12、第38図1～6）。第37図11は静止糸切り痕を残し、体部は外上方に大きくひらく。第37図12・第38図1は回転糸切り痕をナデ消し、口縁は強く内湾する。回転糸切り痕を残す2～6のうち、3が内湾する口縁をもつ他は上方へのびる。

高台を有する坏身について（第39図）

⑤曲面を形作る底部を有するタイプ（高広編年ⅢA期に相当）は外面を回転ヘラケズリで整形する。中央寄りにハの字に開くしっかりした高台をもつ。2は高台端部に面をもたない。高台内面を欠くため切り離し調整は不明だが、体部は1同様外上方に大きくひらく形態を取る。口縁端部はかるく屈曲し、角度を変えて上方にのびる。

⑥平面形態の底部を有するタイプで、ゆるやかに立ち上がり外傾するもの（3～5・9～14）は、3～5・9・10が静止糸切り（高広編年ⅢB期に相当）、11が不明、12～14は回転ナデ（回転糸切り痕をナデ消す高広編年ⅣA期に相当か）を施し、12・13は高台端部に面をもたない。

⑦平面形態の底部を有するタイプで、角度をもって立ち上がり直線的に外傾するもの（6～8・15・16）は、6が回転糸切り痕をナデ消し（高広編年ⅣA期に相当か）、8・15・16は回転糸切り痕を残す（高広編年ⅣB期に相当）。またこのタイプに小型の一群（17～24）があり、17・18は静止糸切り、19・20は不明、21は回転糸切り痕をナデ消し、22～24は回転糸切り痕を残す。17は口縁端部外縁が玉縁状である。これらは総じて低平な高台をもち、底面外周沿い（あるいはやや内沿い）につく。

ヘラ切りの一群の坏身（第40図1～10）

坏蓋と同様、坏身にもヘラ切りの一群がみられた。

形態の分類は前述した坏身に準ずる。1は⑥の第39図3（静止糸切り）に似る。2～7は⑦と殆ど形態が変わらない。高台内部は回転ナデを施す。7は灰白色の軟質の胎土をもち、口縁部はかるく外反する。これは体育館下調査区のSX01から坏蓋（第36図17）からセットで出土した（写真図版11・27）。8～10は⑦の高台のないタイプである。この器形はヘラ切り以外では確認できなかった。

3．皿（第38図8～17・第40図11～20）

基本的に坏身の形態に準ずる。器高:口径（高台付の場合、体部高：口径）の比率で器高（体部高）1に対して口径3以下は坏身、3より上は皿に分類できる。

底部形態は平面である。回転ヘラケズリで平面に整形するもの、糸切り痕を残すものやナデ消すものがある。体部立ち上がりはゆるやかなもの、角度をつけるものに分けられ、体部は外傾するものと外反するもの、さらに口縁端部を折り曲げるもの、端部に面をもつもの、高台を

もつもの、もたないものなどがあった。
以下は各タイプ毎に個体別にみてゆく。

高台をもたない皿について（第38図）

すべて回転糸切り痕を残す。

①ゆるやかに立ち上がり、口縁端部を外側に折り曲げるタイプ（**8・9**）。

②ゆるやかに立ち上がり、外反するタイプ（**10～13**）。13は底部との境に明瞭な稜をもつ。

③ゆるやかに立ち上がり、外傾するタイプ（**12**）。

④角度をもって立ち上がり、直線的に外傾するタイプ（**14**）。14は口縁端部外縁に沈線をめぐらす。

高台を有する皿について（第38図）

⑤ゆるやかに立ち上がり、外上方にひらくタイプ（**15**）。高台内部の回転糸切り痕をナデ消す。しっかりした高台が中央寄りにつき、ハの字にひらく。

⑥角度をつけて立ち上がり、外反するタイプ（16～19）。**16・19**は高台内部の回転糸切り痕をナデ消す。**16**の高台端部は面をもたない。**17・18**は回転糸切り痕を残す。高台は中央寄り（16は底面外周からやや内寄り）につく。

⑦角度をつけて立ち上がり、直線的に外傾するタイプ（20・21）。**20**は底面に回転ヘラケズリを施し平坦に整形する。**21**は内面に火だすきがみられる。2点とも底面外周沿いに高台が付き、小型。

ヘラ切りの一群の皿（第40図11～20）

坏身・坏蓋同様、皿にもヘラ切りの一群が確認できた。

高台付のものは底面外周から少し内寄りにつく。高台内部はヘラきり痕をナデ消す。高台なしのものはヘラきり痕を残す。いずれも体部は角度をつけて立ち上がり、直線的に外傾する。**17・20**は体部外面が外反する。**11～13・18～20**は内面や外面に火だすきがみられる。**14**は口縁端部に面をもつ。**15**は口縁内縁に凹面をもつ。

4．高坏（第41図1～17）

主に校庭下から出土している。透かしをもつもの、もたないもの、透かしをもつものでは二方向切れ目状透かし1段のもの、1条沈線で区画された二段のもの、などがある。

13～15は坏部内面に竹管文があり、14・15は2箇の連続した竹管文を施す（写真図版30）。

16・17は坏部外面にヘラ記号を刻む（写真図版30）。2点とも斜位の切れ目状透かしで、**17**は7世紀に相当する。[注2]

3は灰白色の堅緻な胎土をもつ。坏部内面の回転ナデ痕が顕著なこと、坏部内面にススが付着すること、外面の自然釉が脚内部のみならず透孔内部まで厚くかかることが特徴的である（写真図版29）。

5．甕・小型壺（第41図18～24）

甕はくびれた頸部から大きくひらいて上方にのびる口縁部をもつ。体部下半部を回転ヘラケズリで整形する。底部調整は、**20**は糸切り、**21**は回転ヘラケズリ、**23**は回転ナデ、**24**は回転糸切りである。**24**は体部にヘラ記号を刻む（写真図版31）。

19は高台内部のナデによって、高台が大きく横にひらくものである。**22**は底部を欠くが、欠損部の観察から下方にのびる可能性をもち、瓶の可能性をもつ。赤褐色の胎土をもち、外面は指オサエ、ヘラケズリで整形する。

6．壺類（第42図）

1・2は短頸壺蓋である。**3～5**は短頸壺である。口縁端部に面をもつもの（3）、もたないもの（4・5）がある。**6～8**は壺である。**14**は底部外周沿いを両方向からの工具によるナデ調整を施し高台状に作り出すのが特徴的である（写真図版35中段左左上に見える塊は自然釉）。**9**は平瓶である。把手はヘラケズリで整形する。把手の先端は焼成面ではない断面色調が現れていることから焼成後に欠損したものであることがわかるが、その破面の凹凸が平滑になっているのが特徴的である。

10～15は壺である。**11**は高台内面に回転糸切り痕を残す。外面にクシ目をめぐらす。**13・**

14は高台内面に静止糸切り痕を残す。13は外面に別個体の溶着がみられる。12は浅黄色の精緻な胎土をもち、底部内面を放射線状になでつけ、底面はヘラ状工具によるナデで平坦に仕上げる（写真図版35上段）。色調・胎土・調整ともに他の個体と異質な印象を受ける。

7．甕類（第43図～第45図）

第43図1～4は口縁部が外傾して上方にのびる。1～3は口縁端部外縁に帯状の面をもち、口縁部外面に沈線で区画された波状文帯をもつ。5は短く外傾する。口縁端部外縁に帯状の面をもつ。第44図4は口縁部外面に沈線をめぐらす。端部外縁に帯状の面を作るタイプが退化したものか。口縁部外面に竹管文を施す。このほかに図化はしていない甕の小片でヘラ記号を記すものが2点あった（写真図版33）。6は頸部から大きく横に広がる体部をもつ。8は外面に回転カキ目を施す。第45図5は大型の甕の体部破片である。

9～11は横瓶である。9は口縁端部が玉縁状、10は口縁端部外縁に面をもつ。

このほか図化していないが把手付鉢も1個体確認している。（写真図版39）

8．硯・灯明皿等（第46図）

本調査出土品の特徴のひとつに、硯や灯明皿、鉄鉢型土器（仏鉢）など、特殊な性格をもつ土器が混じることがあげられる。1・6は旧体育館下調査区から、他は校庭下調査区から出土している。遺跡におけるこれらの遺物の意義付け・考察については第6章第3節を参照されたい。

以下では個体別に述べる。

1は高台付坏身の底部内面全体に丹が残る。使用痕はなく丹溜め容器と考えられる。高台内面のヘラ切り痕をナデ消す。2は高台付坏身の底部内面の一部に墨が付着する。使用痕はなく、墨溜め容器と考えられる。高台内面のヘラ切り痕をナデ消す。3は丹塗りの土師器皿の破片である。両面に漆膜が残る。破片を漆塗りヘラに利用したものと考えられる。同様の破片が図化したものの他に1点確認されている（写真図版36）。4は円面硯の脚部である。5も硯の破片である。上面から観察して（写真図版37）、曲面がみられないことから、円面硯である可能性は薄い[注3]。6は内面に墨が付着する。使用痕のみられないことから墨溜め容器である。底面のヘラ切り痕をナデ消す坏身を利用する。7は転用硯である。高台端部に面をもたない坏身の高台内部を利用している。

8～22は灯明皿[注4]である。須恵器（8～14）、土師器（15～17・19～21）、手づくね土器（18）、土師器の丹塗（22）がある。須恵器以外のものは口縁端部にタール状のススが付着する。須恵器の灯明皿は図化した5点の他に、小片で4点確認されている。

23・24は強く屈曲した口縁部をもつ鉢である[注5]。

25・26・28は仏鉢である。25は口縁端部を上方につまみあげる。26は口縁端部に面をもつ。28は口縁端部に面・稜をもたない。

30は托である[注6]。高台内面に回転糸切り痕を残す。

27は器種不明の小片で、体部に突帯をめぐらす。突帯の頂部には凹面をもつ[注7]。

28は坏身か。ハの字にひらくしっかりした高台端部外縁に面をもつ。高台内部にスタンプ文が施される。切り離し技法はナデ消されて不明。

29は器種不明の小片。校庭下調査区井戸埋土から出土した。赤褐色の粗いレンガ質の胎土で、内外面をヘラ削りで面取り整形をする。側面に面をもち、一部に円孔を穿つ。脚の一部か。

32は注口をもつ坏身。口縁端部玉縁状で底面に回転糸切り痕を残す。33は鉢。底面に回転糸切り痕を残す。34は高台坏身。赤褐色で砂粒を含む土師器の胎土をもつ。内外面暗赤褐色。高台内部は赤褐色を残す。切り離し技法は不明。口縁付近に大きくヘラ記号を刻む。

（露梨）

【註】

註1　内田律雄氏御教示による。

註2　内田律雄氏御教示による。

註3　硯の観察には文献1を参考にした。

註4　灯明皿は文献2を参考にした。

註5　出土例は他に郡家と比定される古志本郷遺跡、松江市出雲国府跡などがある。

註6　出土例は他に松江市出雲国府跡がある。

註7　突帯のある須恵器は松江市出雲国府跡に数例みられる。坏身・壺・平瓶などについていた。

【参考文献】

1．奈良文化財研究所編　2004「Ⅰ－6　紙・筆・墨・硯」『古代の官衙遺跡　Ⅱ遺物・遺跡編』

2．林健亮　2000「灯明皿型土器からみた仏教関係遺跡」『出雲古代史研究』第10号　出雲古代史研究会

3．島根県教育委員会　2003『古志本郷遺跡Ⅴ－出雲国神門郡家関連遺跡の調査－』

4．島根県教育委員会　2003『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書14　史跡出雲国府跡1』

5．島根県教育委員会　1983『高広遺跡発掘調査報告書』

第8節　土師器

1．坏・皿（第47図・第48図）

校庭下調査区旧体育館下調査区Ⅴ－1～3層からまんべんなく大量に丹塗りの坏・皿の破片が出土した。

器形の特徴として、底面が曲面であるもの、平面であるもの、高台がつくもの、つかないもの、また体部が内湾するもの、外傾するもの、外反するものなどがある。口縁端部形態では、外方に折り曲げるもの、内湾するもの、内面に沈線をもつもの（写真図版44）、面・稜をもたず単純に終わるものなどがある。また、丹塗りを内面・外面・底面と、全面ににほどこすもの、内面・外面のみで底面は露胎するものの2種がある。詳しい分類などは第6章第1節で述べることとする。また、丹塗りの坏の一部には灯明皿として使用されたもの（第46図22）や、墨書が確認される一群がある。墨書土器については第4章第3節で詳しく述べている。

第48図17は内面に2段の斜放射線状の暗文をもち、坏A[註1]、飛鳥・藤原編年の飛鳥（飛鳥浄御原宮期・7世紀第4四半期）に分類されるもので、京域からの搬入品である。**18**は坏C[註2]、飛鳥・藤原編年の飛鳥（7世紀第3四半期）である（文献1）。**16**～**18**は丹塗りがなく、焼成により赤みのある胎土をもつ。また、本調査区出土の丹塗り製品は水簸された細やかな粘土を使用しているのに対し、この3点は砂粒を含むやや粗い粘土を用いる。胎土観察から、**16**は在地製の都の模倣品であり、**18**は現地でも京域でもなく、別の地域から搬入された土器である可能性が高い[註3]。一方で、水簸された粘土を用いて赤焼し、表面を平滑にみがくタイプが破片で他に数十点出土している（写真図版43で一部掲載）。これらも内面に斜放斜線状の暗文をもつ。

第47図**19**は蓋のつまみで内外面に丹塗りが施されている。

第48図**15**・**19**は皿である[註4]。高台を欠くが、接合痕から中央寄りにつけられていることがわかる。**19**は内面に暗文がみられる。水簸された灰白色の胎土をもつ在地産である。このような丹塗りの暗文土器は図化した以外にも数十点確認

している（写真図版42はその一部）。

第48図27は高台の貼り付け方が特殊な例で、今回の調査ではもう1点出土している（写真図版44中段）。低平で幅広の帯状の高台を底面に貼り付け、高台底面に火だすきとも丹とも判然としない、赤褐色の筋状の斑文がある。内外面は丹が塗られている。

また、水簸された灰白色の細やかな胎土を使ったもので、丹塗りでも赤焼でもない素焼きの一群が破片にして数十点、ごく少量出土している。このタイプは平安以降に出現するものである。[注5] 総じて薄手の小型で、底面は指オサエで調整している。一部に灯明皿として使用され、ススが付着するものもある（第46図15～21）。

2．甕（第49図1～4・6～12・14～17、第50図）

校庭下調査区・旧体育館下調査区Ⅴ－1～3層から大量に出土した。

器形の特徴として、口径が体部最大径とほぼ同じもの、体部最大径が頸部径とほぼ同じもの、体部の丸みの重心がやや下方にあるもの、殆ど丸みをもたないもの、器壁が薄いもの、器壁がぶ厚く内面のケズリで丸みを出すもの（第50図10・11・13）などがある。口縁端部形態では、内面に段をもつもの（第49図1・2・3）、面・稜をもたず単純に終わるもの、横方向に折り曲げるもの（第50図2・3）がある。口縁部が非常に短いもの（第50図9・14・15など）もある。第49図4は内外面に丹が塗られている。

3．壺（第49図5）

確認できたものでは破片1点のみで、校庭下調査区Ⅴ－2層から出土した。頸部外面に羽状文が施文される。

4．低脚坏（第49図13）

確認できたものでは1点のみで、校庭下調査区Ⅴ－3層から出土した。

5．甑（第51図6～9）

確認できたものでは両調査区Ⅴ－2層から出土している。図化したのは4点で、いずれも体部下辺端部付近に貫通する円孔を穿つ。端部形態は面をもつもの、もたないものがある。6・7は把手貼り付け痕が残る。7は外面を指オサエで整形し、内面を巾の狭いヘラケズリで平滑にする。9は端部付近にくびれを有し、かるく屈曲する。器厚などから小型の印象を受け、あるいは別器種の可能性も考えられる。

6．製塩土器（第52図）

校庭下・旧体育館下調査区Ⅴ－1～3層から出土した。図化したもののうち、遺構からのものは、旧体育館下Ⅴ－3層ピット3から2点（14・17）、同じくピット39から2点（9・16）、同じくSX01から2点（6・12）である。これらはいずれも土製支脚と共伴して出土している（第18図～第19図）。

形態のバリエーションは、尖り底で口が大きくひらく鹿蔵山式[注6]とよばれるもの、口縁端部が薄く、強く外傾するもの、口縁端部がぶ厚く、その一部に面をもつもの、さらに刻み目状の圧痕をもつものなどがある。これらの一群は外傾の度合いは低く、上方にのびるコップ型をしている。外面調整では、連続した指オサエ、不規則な指オサエ、不定方向の指ナデ、一定方向の指ナデなどがある。内面調整では、ハケ目のみのもの、布目痕が残るもの（18、この他に非掲載で小片6点）、横方向の指ナデで、そのうち凹凸の強いもの、弱いものがある。また器壁の非常に薄いもの、厚いものなど、多量に出土したが、2点を除いては（写真図版49上段、2点とも鹿蔵山式）いずれもススや被熱による黒変色はみられない。

出土した製塩土器の殆どは浅黄橙色の土師質の胎土をもつが、ごく少量ながら、赤褐色や灰色の須恵質の胎土をもつもの（写真図版49上段）が混じる。これは製塩土器の製作を酸化炎焼成で行ったか、還元炎焼成（須恵器と同様に窯内）で行ったかのちがいによるもので[注7]、製塩土器の製作を検証・復元する上で、興味深い事例である。

7．手づくね土器（第55図2～8）

校庭下・旧体育館下調査区Ⅴ－1・3層から破片にして十数点出土した。

非常に小型のものが1点（2）、これはクルミ大の、ころんとしたかわいらしいものである。安定感のある平坦な底部をもち短く立ち上がって外傾するタイプ（3～5）は比較的小型、安定感のない底部で口縁が上方にひらくタイプ（6～8）は比較的大型である傾向がみられる。外面調整は指オサエやナデ、内面は指ナデ、ケズリなどを施す。底部が平坦で直線的に立ちあがるタイプのうち、口縁にススの付着するものがある（第46図18）。灯明皿に使用されていたと考えられる。

（露梨）

【註】

註1　内田律雄氏御教示による。

註2　巽淳一郎氏御教示による。

註3　胎土観察による製作地推定については、内田氏・金田明大氏の実見によるコメントをいただいた。

註4　内田律雄氏御教示による。

註5　内田律雄氏御教示による。

註6　文献2・3によれば、このタイプは、およそ古墳時代から奈良時代に移行するころに出現したとある。

註7　内田律雄氏に実見によるコメントを頂いた。現時点では製塩土器を窯で製作したかということは確証されていない。

【参考文献】

1．『日本土器事典』1996　雄山閣

2．内田律雄　1994「鳥取県・島根県」『日本土器製塩研究』近藤義郎編　青木書店

3．飛田恵美子　2002「山陰地方における製塩土器について」『出雲古代史研究』第12号

4．大社町教育委員会　1984『鹿蔵山遺跡』

第9節　土製品

1．土錘（第51図1～5）

校庭下調査区・旧体育館下調査区のⅤ－1～3層からまばらに数点出土している。

土錘については、内田律雄氏が宍道湖周辺地域の民俗資料[註1]と考古資料を用いて検討[註2]をしている（文献1）。

それに従って本調査区の出土土錘を見ると、1は長さ6.9cm、最大径3.1cmで、2も大半を欠くが、1とほぼ同じとみてよい。このサイズは古代～現代を通して土錘としてはかなり大型である。形状も他が非掲載遺物も含め両端をすぼめるものであるのに対し、この2点はずん胴で重量感がある。

2．かまど（第51図10・11）

校庭下調査区・旧体育館下調査区のⅤ1～3層から出土している。接合して一個体の全形が推測できる資料は11のみであった。11は炊き口上部から庇下面にかけて黒変色が見られる。10の内面も黒変色する。

3．土製支脚（第53図・第54図）

校庭下調査区・旧体育館下調査区のⅤ－1～3層から出土している。

土製支脚については岩橋孝典氏が山陰地域に分布するものの集成・型式分類を行っている（文献2）。それによれば「山陰地域で土製支脚が出現するのは出雲大谷編年3期（TK43）であり、炊飯具として定着するのは大谷4期（TK43後半～TK209）以降である」とし、その後6世紀末～8世紀前半に日常的な炊飯具として定着し、9世紀初頭にその下限を求められるとしている[註3]。

本調査区からは、突起が2方向で胴部に穿孔がないタイプ（岩橋分類ⅠA類）に第53図3・6・7、突起が2方向で胴部に貫通孔があるタイプ（岩橋分類ⅠB類）に第54図4、突起が2方向で胴部背面に非貫通孔があるタイプ（岩橋分類ⅠC類）に第54図5～7、突起が3方向で背面の

突起が前方突起より短いタイプ（岩橋分類ⅡA類）に第53図8、突起が3方向で背面の突起が環状を呈するタイプ（岩橋分類ⅡB類）に第54図3、突起が3方向で背面の突起がヒレ状を呈するタイプ（岩橋分類ⅡC類）に第54図1・2がある。

岩橋氏は文献2で土製支脚の型式を分類し、その分布を分析した結果、出雲地域を二分し、西部出雲（出雲市・斐川町）では2方向突起のⅠ類、東部出雲（松江市南東部・東出雲町）では3方向突起のⅡ類が優勢と、地域性が現れるとしている(註4)。さらにⅠ類の分布の中核を西部出雲の中でも平野南半部に求め、Ⅱ類が主流を占める東部出雲と南半部にはさまれるかたちになる平野北半部では、東部出雲地域の影響を受けてⅡ類が過半数以上を占める可能性があることと、南半部を取り巻くかたちで、北部・東部外周にはⅠ・Ⅱ類の比率が均衡する地域が存在する可能性があることを指摘している。

出雲平野北半部に位置する今回の調査では、これまで西出雲地域では例がなかったⅡB・C類が新たに加わり、形式が判別できるもののなかでⅠ類とⅡ類の比率は均衡することで、今後の土製支脚の研究に一資料を提供できるものと考える。

（露梨）

【註】

註1　文献1で近年まで行われていた漁具としての土錘の民俗資料を分類して、タイプ別に対象魚類が異なることを指摘している。昭和47年（1972年）まで島根県八束郡玉湯町にある雲善寮にて宍道湖における刺し網漁に、考古遺物とほとんど形状が変わらない管状土錘を製作して資していたという。文献内で内田氏が往時の土錘作りの復元を試みている。

註2　内田氏は宍道町歴史民俗資料館所蔵資料・オノ峠遺跡（松江市・古代）・上長浜遺跡（出雲市・中世）両遺跡出土土錘の長さと巾の関係分布をグラフ化して比較検討している。その結果、外海に比べて穏やかな内水面（この場合宍道湖）における漁では土錘は小型化・軽量化を志向することが明らかになった。このグラフの分布から大きく外れる大型の土錘について、外海で用いられた可能性も残るとしつつ、魚網錘であること自体に疑問をなげかけている。

註3　第54図5．6は体育館下調査区SX01出土である。共伴遺物に坏蓋・坏身がセットで出土した（第19図）。この坏蓋・坏身は今後の編年研究で所属年代が鑑定されることが期待される。

註4　ただし、今後の研究・検討を行うさいに東西出雲二極論という単相に拘束されない広域的・複相的な視点が必要であると述べている。

【参考文献】

1．内田律雄　2004「内水面漁業における土製魚網錘－宍道湖の浮付刺網用土錘の調査－」『考古論集（河瀬正利先生退官記念論文集）』

2．岩橋孝典　2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について－土製支脚・移動式竈を中心として－」『古代文化研究』第11号　島根県古代文化センター

第10節　土師質土器（48図20～24）

少量出土しているが、ほとんどが第2トレンチ上層（表土直下Ⅰ層）のものである。図化に際してはⅤ層に包含されていた遺物を選択している。

1．皿

第2トレンチ上層（表土直下Ⅰ層）から十数点、まとまって出土している。

図化した3点は、校庭下調査区Ⅴ－1～3層からそれぞれ出土した。いずれも胎土は水簸され、浅黄橙色の砂粒を含まないこまやかな粘土である。

2．柱状高台付坏

この器種は出雲地域では12～13世紀にかけて多く見られる[註1]（文献1）。校庭下調査区Ⅴ－1～2層からそれぞれ出土した。

（鷺梨）

【註】

註1　この器種は「集落遺跡にもあるが居館や寺院関連遺跡からまとまって出土する例が多く、日常具というより宗教行為・儀礼に用いられた可能性が高い。ロクロ挽きによる付部内面の窪みや小孔を残したまま焼成するものが多いため、単独ではなく小皿を乗せる器台として補助的に使用されるものと考えられる。」（注1文献より引用）

【参考文献】

1．松尾充晶　2004「柱状高台付坏の性格」『出雲大社境内遺跡』第9章第4節　大社町教育委員会

第11節　石製品（第56図）

1は砥石である。破損しており本来の形態は不明であるが、一条の溝があり、内部に使用痕がみられる。所属時期は不明である。2は扁平で三角形な石材である。砥石の可能性があり、石材は片岩の一種と思われる。3は四面を使用している砥石である。片端を欠いているが、研磨痕の形状から本来はさほど大きくなかったと想像できる。使用面は四方とも研磨の度合いが高い。4は棒状の石製品である。一部側面は反っており、研磨痕がみられる。先端には剥離面がみられることから敲石として使用された可能性がある。下方は欠損しており、本来の形状は不明であるが、石棒の可能性も考えられる。5は碧玉製の丸玉である。仕上げ研磨が進んでおらず、剥離面も確認されるが、未製品ではない。また、片面から穿孔がされている。その形態は明確な球状ではない。出雲地方では古墳時代後期以降から丸玉が製作されることから、これもこの時代に属する可能性が高い[註1]。なお肉眼観察ではあるが、色調が濃緑色であることから、花仙山産の碧玉であると考えられる。

また写真図版のみの掲載であるが、磨石や敲石、黒曜石製の二次加工のある剥片、玉髄や碧玉の剥片、軽石が12点出土している。

（伊藤）

【註】

註1　深田浩氏の御教示による。

【参考文献】

1．島根県古代文化センター　2004『古代出雲における玉作の研究Ⅰ』島根県古代文化センター

第12節　木製品（第57図～59図）

全点校庭下調査区の井戸から出土した。取上げたのは、杭材4点・杭で区画された外側に一段で組まれた土留めの板材・区画の内側に、井戸の外枠として5段に組まれた方形の井戸枠のうち、東西南北それぞれに上から3段ずつ、内枠として方形に組まれた板材などである（第11図P32参照）。

うち図面化に際し、外枠に関しては、南北軸に対して縦軸材・横軸材を1点ずつ、遺存度の良好なものを選択した。内枠は全点図化した。杭材は観察の結果、形態・製作技法に差異はみられなかった為、比較的良好な状態の北西材1点のみを選択し、図化した。

井戸内枠内底面からは、土器小片（須恵器・土師器・丹塗り・墨書土器）とともに、漆塗木製品4点、樹皮製曲げ物1点、数点の木の枝が出土した。

それぞれの樹種鑑定については、渡辺正巳氏（文化財調査コンサルタント株式会社）による本書第8章に詳しい。

1．杭材（第59図2）

芯持ちの丸太材である。樹皮を剥ぎ、下半部にのみ工具による加工が施されている。残存長91.5cmのうち、出土時に井戸外枠検出面から10cmほど突き出ていた。上端は腐食している。

2．井戸外枠材（第58図3・第59図1）

方形に5段に組まれた井戸材のうち、遺存度の良好な、西側・上から3段目（第58図3）、北側・上から2段目（第59図1）を図化した。井戸外枠は井戸掘り方検出面から約2.7m下方・海抜1.4mから検出された。

形状は図化したもの以外に関しても、縦軸材・横軸材ともに長辺の片側に方形の刳りがある。井戸枠設置作業は刳りを下方に向けて順に組上げている。

第58図3は、幅18.5cmに対し刳りの深さは約9.0cmと、材の2分の1まで切り込む。また刳りの幅は約6.5cmだが、板厚が4.0cmなのに対して刳り幅が広く、小口面は腐食が進んでいるように観察される。

第59図1は、前述した第58図3と形状が異なり、幅広の材で、上辺にも（腐食が進んで輪郭が崩れているが）浅い刳りがあったと思われる。幅28.0cmに対し、刳りの深さは下辺が約12.0cm、上辺が1.5cmと、合わせるとやはり材の幅2分の1に相当する。刳りの幅は約5.0cmである。

3．井戸内枠材（第57図1・2・第58図1・2）

井戸内枠は井戸堀方検出面から約3.7m下方・海抜0.5mから方形に組まれた形で検出された。内枠内には調査時にもなお湧水が海抜0.4mでみられた。

4点とも材厚約1.3cmの柾目の杉材（第8章参照）で、小口面及び外面の一部に漆膜が残る。小口面に矩形の切込みをいれ、方形の釘穴が残る。釘は遺存していなかった。

第57図1・2にはそれぞれの片面に4ヶ所、腐食が遅れる長方形の高まりがみられる。高まりには一ヵ所ずつ方形の釘穴が残る。釘は遺存していない。

4．漆塗木製品（第57図3～6）

井戸内枠底面から出土した。面取りされた棒状の、途中一部が屈曲して弧形に張り出し、把手状を呈する。張り出しの両脇に一ヵ所ずつ釘穴が貫通する。釘は遺存していない。5の断面に残る釘穴の観察から、釘を両方向から打ちつけて緊結していることがわかる。

面取りのされていない平滑な一面（別個体との接合面）を除き、全面に漆を塗る。5・6は腐食が進み漆が剥落している。

5．樹皮曲げ物（第57図7）

井戸内枠底面から出土した。桜樹皮である。幅2.5cm程度の帯状で、3周する。内法は1.0cm×1.8cmで楕円形を呈する。

【井戸内枠に転用された櫃】

井戸内枠内から出土した漆塗り木製品は、出土後の観察で、弧形に張り出した取っ手をはさんだ両端が長さ・形状とも非対称であるうえに、一方は嬬部に磨耗が見られることから縦位に使用したものであることが予測された。(註1)

その後、井戸内枠材の片面に残る方形の高まり（第57図1・2）と漆塗り木製品接合面の形状、それぞれの釘穴の位置が合致し、結果、櫃であることが判明した。(註2)

復元すると（第60図）56.4cm×47.4cm×高さ30cm程度の縦桟形式の櫃になる。(註3) 正面材（第57図2）に1ヶ所、背面材（第57図1）に2ヶ所、それぞれ上辺付近にみられる釘穴は、蓋の取り付け金具に付随するものである。底板材の取り付けに付随する釘穴は当該部位の腐食で確認できない。

櫃は、現在正倉院にその多くが残されていることが知られている。(註4) 文献1によれば、正倉院に残る縦桟形式の櫃は「蓋・身ともに杉または桧の一枚板が使用されている。櫃本体全面に赤漆塗（素地に藁芳を塗って、上から生漆をかけたものものとされている）を施したものと、塗りのない白木のものに大別され、両者とも、蓋と身の稜角に黒漆を塗る「蕨切」と称される技法を施す。（中略）蓋は被せ蓋形式である。（中略）脚は、2箇所が組通しのために刳られている。脚の側面は、向かい合った脚を連結する受け桟から下で内側に張り出し、その上に底板を乗せる構造である。脚は、赤漆塗りの場合は全て黒漆を塗り、白木の場合は脚も白木のままである」という。

縦桟形式の櫃の出土例は京都府長岡京跡で確認されている。784～794年に埋没したと推定されている溝から出土した（文献1）。

井戸枠に転用された例は京都府瓦谷遺跡、大阪府野々上遺跡の2例（文献1）で、いずれも横桟形式の櫃で、底板は外してからの利用であった。野々上遺跡の井戸の埋没は8世紀中頃とされている。本遺跡では出土した4点の脚の遺存度に差がみられることから、破損して不要となっていた櫃を利用したことが推測できる。底板は該当する木片が井戸枠内から出土していないため、京都府・大阪府の2遺跡の事例からも底板を外して設置したと考える。また、釘が井戸枠内・釘穴内ともに確認できないことから、釘を抜いて後、設置した可能性が高い。これは水に金気を忌むことからの行為と考えることができる。

以上述べてきたように鹿蔵山遺跡出土井戸内枠は、赤漆塗に蕨切技法を施した縦桟形式の櫃を転用している特殊な事例である。正倉院伝来品並びに長岡京跡出土品の脚の形状と本遺跡出土品の脚の形状は異なること、正倉院に伝わる櫃の法量の平均値が長側90～100cm、短側60～70cm、高さ40～50cmであることと比して本遺跡のものが小型であることなどから本遺跡の櫃の年代は特定できない。

当時の高価な調度品である櫃が、破損品とはいえ井戸枠材として利用されていることは、井戸の性格を考察する上で大変興味深い。

（鵜梨）

【註】

註1　平野卓治氏・関和彦氏御教示による。

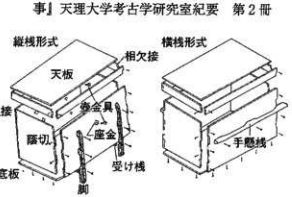
註2　内田律雄氏御教示による。

註3　島根県木器研究会の御教示及び文献1による。

註4　以下櫃については文献1を元に述べる。

【参考文献】

1．鵜山まり　1998「櫃－その系譜と展開－」『古事』天理大学考古学研究室紀要　第2冊



第10図　櫃の構造と名称
（鵜山まり　1998文献1より再トレースして転載）

第5章

遺構について

第5章　遺構について

第1節　校庭下調査区

(1) 遺構の概要

堆積土の色調・しまりの状況からV層を3層に分層し、各層の上面を遺構面であると認識して精査した。その結果を以下に記す。

V－1層上面

灰褐色土がベース土であり、所々黒色土が斑状に確認できる面である。遺物は小破片が多量に出土するものの、遺構は確認できなかった。遺構面は、北傾から南側へ、また東側から西側へ向けて緩やかに傾斜している。

V－2層上面（第13図）

暗褐色土がベース土であり、暗灰褐色土が斑状に確認できる面である。V－2層中は、黒褐色土が交互に重なっている。遺構は、調査区西側でピット2基と集石（集石1と呼称）1基を検出した。集石1については後述する。ピット1からは、須恵器坏蓋、土製支脚が、またピット2からは、須恵器の坏・甕、土師器甕が出土しているが、遺構の性格に言及できる遺物は出土していない。遺構面は、V－1層上面と同様にゆるやかな傾斜が見られる。

V－3層上面（第14図）

褐色土がベース土であり、暗褐色土と混じり合っている。検出した遺構は、調査区西北部を中心として、ピット146基、土坑2基、焼土1ヶ所と井戸1基を確認した。ピットについては、建物の柱穴の可能性を考え検討を行ったが、建物の並びは確認できなかった。土坑（SK01・02）についても住居址の可能性を考えたが、内・外に柱穴がないこと、焼土などが周辺から出土していないため、住居址ではないと考えている。出土遺物で、遺構の性格を示唆する遺物は出土していないが、「林」・「林原」・「堂」と墨書された土器の出土したピットや、金銅製腰帯金具の蛇尾が出土したピットもある。遺構面は、V－1層上面と同様にゆるやかな傾斜が見られる。

Ⅵ層上面（第15図）

黄褐色土の無機質土がベース土である。ピット14基を検出したが、遺構からの遺物の出土はなかった。遺構面は、V－1層上面と同様にゆるやかな傾斜が見られる。

(2) 井戸

①規模（第11図）

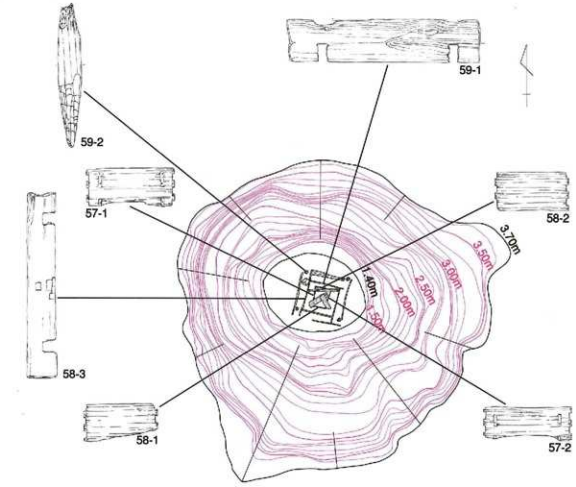
V－3層上面の遺構検出面において井戸の上面プランを確認した。

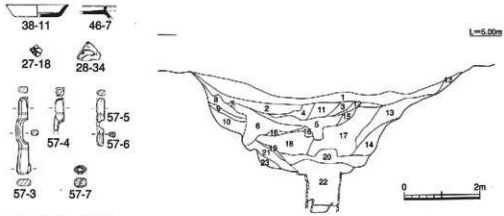
検出した井戸の規模は、直径約9.0×9.0mの不整楕円形の堀形を有し、深さは約2.7mを測る。堀形の断面形状は、すり鉢状を呈する。井戸底面には120cm×120cmの方形の井戸枠（木製）を確認した。さらに内側には、漆塗の櫃を転用した内枠が埋置されていた。内枠の規模は、南北56.4cm×東西47.4cmである。櫃は、付属する脚が出土するなど器形が復元できるが、櫃の製品をそのまま埋置したわけではなく、底板、側板を接合していた釘などは取り外して埋置したようである。

なお、井戸枠内では、発掘調査の時点でも湧水が確認できた。（写真図版10）

②井戸枠内出土遺物

井戸枠内からは、内枠に転用したと考えられる櫃に付属していた脚部、曲げ物、墨書土器などが出土している。井戸内枠内から出土した遺物は少量であり、祭祀儀礼で用いるような性格の遺物は出土していない。



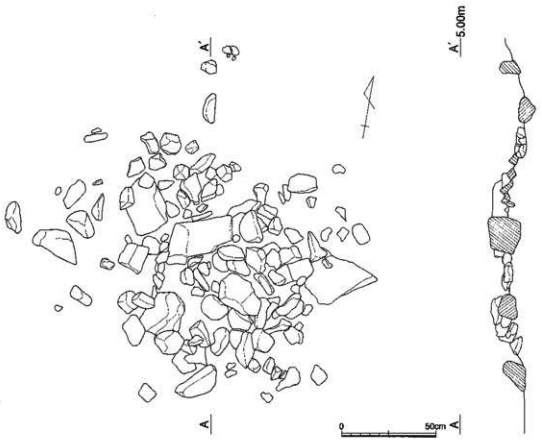


井戸内枠内出土遺物

井戸埋土土層注記

1　暗褐色砂質土に暗黄褐色砂質土を斑状に含む。しまり弱・粘性なし。炭化物を多く含む。
2　褐色砂質土に暗黄褐色砂質土を斑状にわずかに含む。しまり弱・粘性なし。炭化物少し含む。
3　暗褐色砂質土に暗黄褐色砂質土を斑状に含む。しまりあり・粘性なし。炭化物少し含む。
4　暗黄褐色砂に暗黄褐色砂質土を斑状に多く含む。しまり・粘性なし。
5　暗褐色砂質土。しまり弱・粘性なし。
6　褐色砂質土。しまりあり・粘性なし。炭化物ごくわずかに含む。
7　暗褐色砂質土。しまりあり・粘性なし。
8　黄褐色砂質土。しまり・粘性なし。
9　暗黄褐色砂質土。しまり・粘性なし。炭化物わずかに含む。
10　黄褐色砂質土。しまり・粘性なし。
11　褐色砂質土に黄褐色砂質土を斑状に含む。しまり・粘性なし。
12　褐色砂質土。しまり・粘性なし。
13　暗黄褐色砂質土。しまり・粘性なし。
14　明黄褐色砂と暗黄褐色砂質土が混じり合う。しまり・粘性なし。
15　褐色砂質土に暗灰褐色砂質土を斑状に含む。しまり・粘性なし。
16　明黄褐色砂に暗黄褐色砂質土を斑状に多く含む。しまり・粘性なし。
17　明黄褐色砂に暗黄褐色砂質土を斑状に含む。しまり・粘性なし。
18　黄褐色砂質土と暗黄褐色砂質土が混じり合う。暗黒褐色土を粒状に多く含む。しまり・粘性なし。
19　黄褐色砂質土と暗黄褐色砂質土が混じり合う。しまり・粘性なし。
20　暗灰褐色砂質土に赤褐色砂質土（鉄分）が粒状に混じる。しまり・粘性なし。
21　暗黄褐色砂質土。暗黒褐色土を粒状に多く含む。しまり・粘性なし。
22　青灰色砂質土と暗青灰色砂質土が層状に重なり合う（グライ層）。しまり・粘性なし。
23　明黄褐色砂と暗黄褐色砂が混じり合う。しまり・粘性なし。

第11図　校庭下調査区　井戸平面図・断面図（S=1/100）



第12図　校庭下調査区　集石1平面図・立面図（S=1/20）

(3) 集石1（第12図・写真図版7）

①概要

校庭下調査区西部、V－2層上面で集石を検出した。南北1.8m、東西2mの範囲に角レキ～亜円レキの石が集中している。遺跡が砂丘上に立地していることを考えれば、自然に集石する可能性は考えにくく、意図的に集石された遺構であると考えられる。集石に焼けた痕跡はなく、周辺から焼土も出土していないことから炉として使用された可能性は少ない。また、集石の直下に土坑などの遺構は検出できなかったため、墓などの埋葬施設の可能性も低い。後述するが、旧体育館下調査区で検出した集石2の中央部からは、棒状石製品が出土している。棒状石製品について石棒の可能性も考えられている(註1)。集石1からは石棒状石製品が出土しておらず、性格不明であるが、集石2と同規模・同構造の遺構であることを考えれば、石棒を使用するような何らかの祭祀が行われた遺構とも想定できるが、生活上必要な石素材を集石した可能性も考えられ、遺構の性格を明確にすることは難しい。

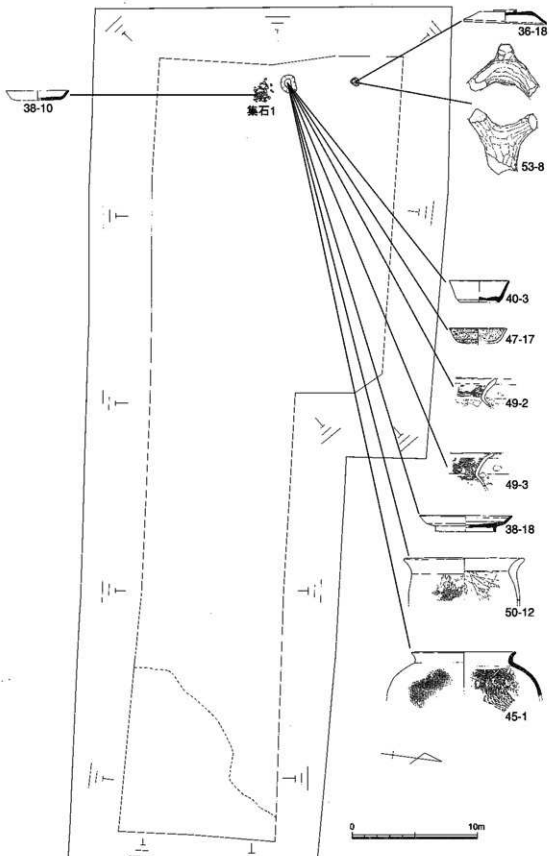
②出土遺物

出土した遺物は、細破片が多く、図化した遺物は、須恵器の皿1点のみである。遺構中から遺構の性格を示唆するような遺物は出土していない。

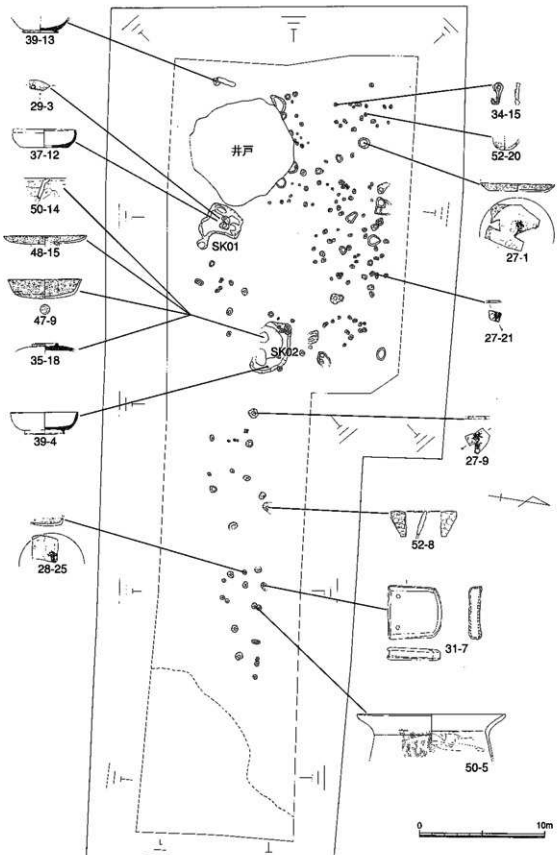
（石原）

【註】

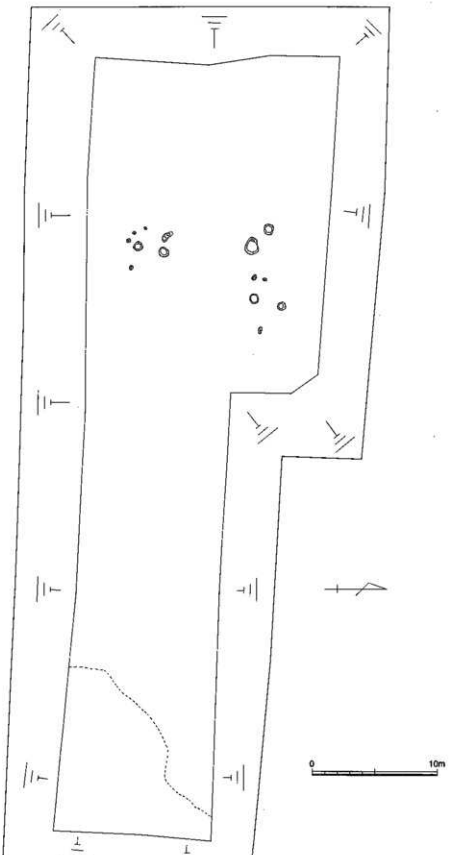
註1　本書　第4章　第11節



第13図　校庭下調査区　Ⅴ－2層上面検出状況平面図（S＝1/300）



第14図　校庭下調査区　Ⅴ－3層上面検出状況平面図（S＝1/300）



第15図　校庭下調査区　Ⅵ層上面検出状況平面図（S＝1/300）

第2節　旧体育館下調査区

(1) 概要

堆積土の色調・しまりの状況からV層を3層に分層した。さらに調査の途中でV－3層を上層と下層に分層が可能であることが判明したので、2層に細分類した。また、校庭下調査区と同様に各層の上面を遺構面であると認識して精査した。その結果を以下に記す。

V－1層上面

校庭下調査区で確認したV－1層上面と同様に灰褐色土がベース土であり、所々黒色土が確認できる面である。遺物は小破片が多量に出土しているが、遺構は確認できなかった。遺構面は、北側から南側へ向けて緩やかに傾斜している。

V－2層上面（第17図）

校庭下調査区で確認したV－2層上面と同様に暗褐色土がベース土であり、暗灰褐色土が斑状に確認できる。また、V－2層中は、黒褐色土が交互に重なっている。ピットは確認できなかったが、集石（集石2と呼称）1基を検出した。集石について後述する。

V－3層（上層）上面（第18図）

校庭下調査区で確認したV－3層上面と同様に褐色土がベース土であり、暗褐色土と混じり合っている。遺構としては、ピット43基を検出した。性格は、建物の柱穴である可能性を考え検討をおこなったが、建物の並びは確認できなかった。ピット出土遺物としては、校庭下調査区でみられたような墨書土器などはみられないが、鉄斧が出土するピットや、須恵器・製塩土器が集中して出土するピットもみられた。

V－3層（下層）上面（第19図）

校庭下調査区では、確認できなかった遺構面である。暗黄褐色土であり、炭化物が確認できる面である。遺構としては、ピットを36基、また青灰色粘質土の薄く貼り付いたSX01遺構を検出している。ピットについては建物の柱穴である可能性を考え検討をおこなったが、建物の並びは確認できなかった。SX01遺構については、後述する。

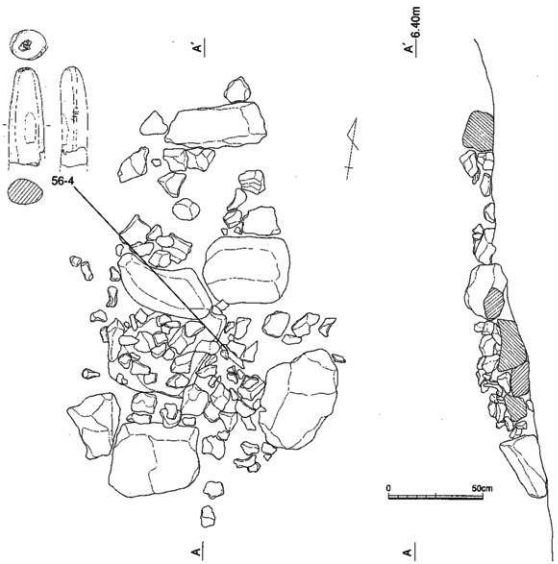
VI層上面（第20図）

校庭下調査区で確認したVI層上面と同様に黄褐色土の無機質土がベース土である。遺構としては、ピットを37基検出した。ピットについては建物の柱穴である可能性を考え検討をおこなったが、建物の並びは確認できなかった。遺構からの出土ではないが、ほぼ完形の羽口が出土しており、近接して鍛冶遺構が存在した可能性が考えられる。

(2) SX01（第19図・写真図版11）

V－3層（下層）上面検出時に調査区の中央部において青灰色の硬くしまった粘質土を検出した。検出した範囲は南北6m、東西4.3mで最大15cmの厚さであるが、均一ではなく大部分は、削平されたようで、凹凸が激しい。青灰色粘質土の上面からは、須恵器の坏と蓋がセット関係で出土しており、上面から押し潰された状況で出土している。（写真図版11）また、一括取り上げであるが、銅製品の切羽や、鉄鏃、環状の鉄製品など金属関係の遺物も出土している。

また、旧体育館下調査区の各層位に散在しているが、椀形鍛冶滓は、校庭下が1点の出土であったのに対して7点と多量に出土していること、また完形の羽口が出土すること、鉄斧、鉇具、ミニチュア鋤先、紡錘車など特殊遺物の完形品が出土していることなどを考えれば、本調査区の周辺に鍛冶関連の工房が近接していることが考えられる。SX01の上面は、かなり削平されているため、不明瞭と言わざるを得ないが、周辺からの出土遺物から考えれば、鍛冶関連の工房である可能性も残される。



第16図　旧体育館下調査区　集石2平面図・立面図（S＝1/20）

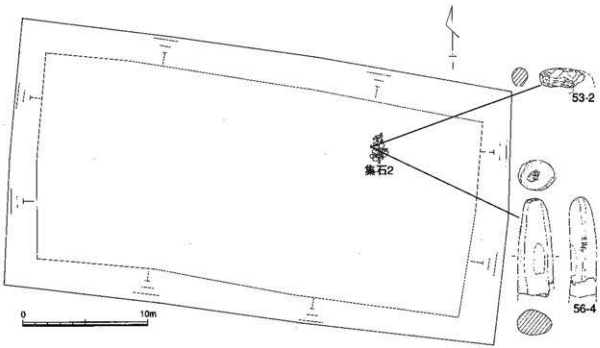
(3) 集石2（第16図、写真図版８）

旧体育館下調査区北東部、Ⅴ－２層上面で集石を検出した。校庭下調査区集石１と同様の遺構面で検出している。規模は、南北2.5m、東西1.5mの範囲に角レキ～亜円レキの石が集中しており、意図的に集石された遺構であると考えられる。石に焼けた痕跡はなく、周辺から焼土も出土していないことから、炉として使用された可能性は低い。また、集石の直下に土坑などの遺構はなく、墓などの埋葬施設の可能性も低い。校庭下調査区で検出した集石１と同様の構造であり、性格も似通ったものである。本遺構の中央部からは、棒状石製品が出土しており、石棒の可能性も指摘されている[註1]。棒状石製品は、直立しておらず倒れた状態で出土しているが、集石遺構の中央部付近から出土していることを考えれば、石棒を中心に置いた何らかの祭祀跡とも考えられる。また、遺跡周辺は砂丘地帯であり、周辺から角レキが自然に採集できない状況であるため、たたき石など生活上必要な石素材を集石した可能性も考えられ、遺構の性格を明確にすることは難しい。

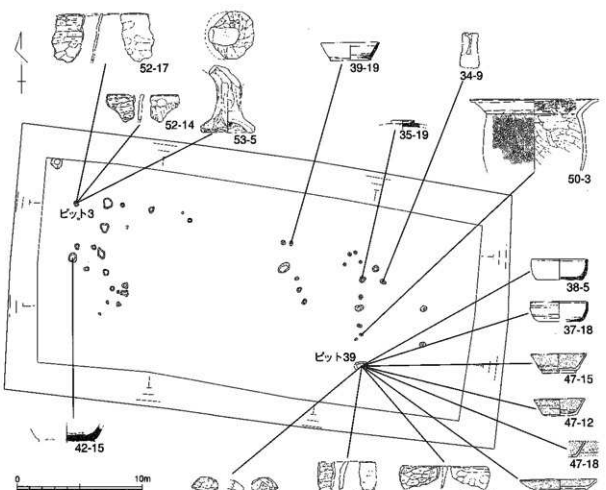
（石原）

【註】

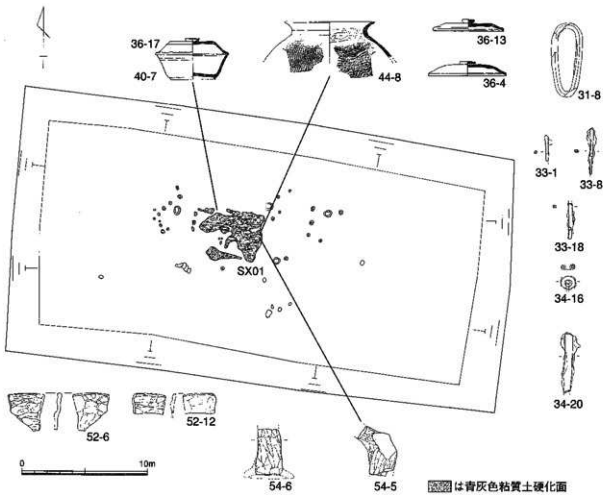
註１　本書　第４章　第11節



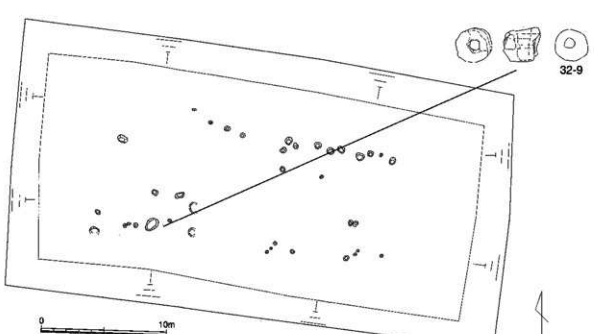
第17図　旧体育館下調査区　Ⅴ－2層上面検出状況平面図（S＝1/300）



第18図　旧体育館下調査区　Ⅴ－3層（上層）上面検出状況平面図（S＝1/300）



第19図　旧体育館下調査区　Ⅴ－3層（下層）上面検出状況平面図（S＝1/300）（図中の遺物は全てSX01出土遺物）



第20図　旧体育館下調査区　Ⅵ層上面検出状況平面図（S＝1/300）

第6章

まとめ

第6章　まとめ

第1節　土器の特徴と年代

1．はじめに

今回の調査では1,500㎡の調査区内から大量の土器が出土した。これらはおもに7～9世紀のもので質・量ともに豊富かつ器種・形態のバラエティーに富み、包含層出土品でありながら非常に良好な資料であることが分かった。

本節は編年研究が進む須恵器の坏蓋・坏身を整理・分類検討し[注1]、本調査区周辺の活動時期を探ることを第一の目的とし、なおかつ今後も進む編年研究・及び遺跡間の比較検討に活用しうる資料となることを目指したものである。

以下、2.で本遺跡における整理・分類作業工程とその判断基準を明らかにしたうえで、器種ごとに形態の特徴を述べ、3.でその傾向と消長の検討を行い、4.で須恵器と土師器の相互間の影響を概観し、5.のまとめで、遺跡の年代観にふれることとする。

2．整理・分類作業工程

島根県における7～9世紀の須恵器編年は、山本清氏に始まり[注2]、1970年ごろの坪井清足・町田章両氏による出雲国庁出土土器の編年[注3]、柳浦俊一氏よる1980年に提示された編年（柳浦A編年）[注4]、2001年に提示された編年（柳浦B編年）[注5]、高広遺跡の須恵器編年などがあげられる。平石充氏は上記の編年の概要をまとめたうえで、高広編年に資料を補い、須恵器の坏蓋・坏身・皿の編年表を作成している。（文献1）

今回、実際の分類作業をするにあたって避けたかったのは、最終的にどのタイプに所属するか迷った時に、主観的に「えい」と振り分けることであった。そのため、まず最初に判断の基準となる器種別の形態モデルを作成し（第21図・第22図）、実測遺物全点を大まかに分類した。その後、切り離し技法や口縁端部の観察などの細部検討を行い、第23図を作成した。本稿では新たな分類番号はつけていない。

坏蓋に関して（第21図）

天井部形態と口縁部形態に注目して大まかなフォルムに分類した[注6]。

①天井部の形態～曲面か、平面か

基準　単に曲面か平面かではなく、「曲面を形作るものか」「平面形態であるものか」に留意して分けている[注7]。

「曲面を形作るもの」は、回転ヘラ削りやナデ調整、あるいは糸切りによる切り離しでできた稜角を落とす意図の調整がみられるもので、「平面形態であるもの」は糸切り技法の他、削りなどで平坦にするものや稜角を形作るものも含まれる。（ただしこの段階では、調整はあくまで底部形態の分類の判断基準にとどめて、調整技法そのものの分類はしない。）

②口縁部形態～かえりを有するか、下方に折り曲げるか、端部をつまみ下方に嘴状（いなご）に突出させるか

基準　折り曲げるか、突出させているかの判断基準は、口縁端部断面（第21図中矢印）に平行面をもつか、もたないかである。

これらで分類した形態にどのようなつまみがつくか第21図に図示した。つまみにはボタン状に貼り付ける宝珠つまみと、環状に貼り付ける輪状つまみ、宝珠つまみの頂部に強い凹面を作り、輪状つまみ状に形作るものがある。2つの輪状つまみを呼び分けるため、本稿では便宜的に後者を擬輪状つまみと呼ぶこととする。

以上の作業を元に作成した第23図には縦軸にサイズ・横軸に天井部切り離し技法及び口縁部形態を掲えている。

サイズ別に分類するにあたって、最大径の寸法を元に、小型・中型・大型とした[注8]。

以下はそれぞれの特徴について述べる。

小型（最大径13.0cm未満）

①回転ヘラケズリを施す曲面の天井部を持ち、かえりを有するタイプ（高広編年ⅡB期相当）宝珠つまみがつく

②平坦な天井部（回転ナデ）を持ち、口縁端部をつまみ下方に突出させるタイプ（高広編年ⅣB期相当か）宝珠つまみがつく

中型（最大径13.0cm以上16.0cm未満）

①回転ヘラケズリを施す曲面の天井部を持ち、かえりを有するタイプ（高広編年ⅡB期相当）宝珠つまみ・輪状つまみ・擬輪状つまみがつく

②平坦な天井部（回転ヘラケズリで整形しているものを含む）と口縁端部を下方に折り曲げるタイプ（高広編年ⅢB期・ⅣB期相当か）宝珠つまみがつく

③平坦な天井部（回転ヘラケズリで整形しているものを含む）と口縁端部をつまんで下方に突出させるタイプ（高広編年ⅣB期相当か）宝珠つまみがつく

大型（最大径16.0cm以上）

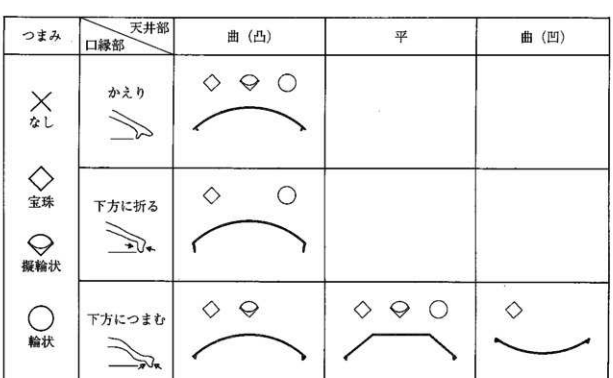
①回転ヘラケズリを施す曲面の天井部を持ち、かえりを有するタイプ（高広編年ⅢA期相当）輪状つまみがつく

②回転ヘラケズリを施す曲面の天井部を持つタイプ、輪状つまみ内部に静止糸切り痕を残す（高広編年ⅢB期相当）

③回転ヘラケズリを施す曲面の天井部をもち、口縁部を下方に折り曲げるタイプ、輪状つまみ内部をナデ消す（高広編年ⅣA期相当）

④回転ヘラケズリを施す曲面の天井部をもち、口縁端部をつまみ下方に突出させるタイプ、宝珠つまみがつく

⑤平坦な天井部（回転ヘラケズリで整形しているものと回転糸切り痕をナデ消すもの、残すものが混在する）に口縁端部をつまみ下方に突出させるタイプ



第21図　坏蓋の形態模式図

坏身・皿に関して（第22図）

坏身と皿は一括して考えた。

底部形態と体部形態に注目して大まかなフォルムに分類した。

①底部形態～曲面か平面か（判断基準は坏蓋に準ずる）

②体部形態～曲面的か、直線的か、曲面的なものは内湾傾向か外反するものか

基準　体部形態の判断に口縁部を含むか、ということであるが、口縁部と体部に明確な境をもたない場合はこれを含み、強い屈曲点をもち口縁部と体部に一体感のない場合は口縁部を排除して体部のみの形態で判断した。

次に、前述した坏蓋の口縁部形態変化が坏身に影響すると考え、口縁部形態の検討を行った。その際、主に文献1の須恵器編年表をもとに坏蓋と坏身のセット関係を観察し、それぞれの口縁部形態を分析した。その結果、

①外傾するもの

②上方にのびるもの

③端部内縁に段を有するもの

④外側に折るもの

⑤玉縁状を呈するもの（含 端部外縁に沈線）

⑥体部と明瞭な境をもたず一体感のあるもの

以上の6項目に分類することができた。

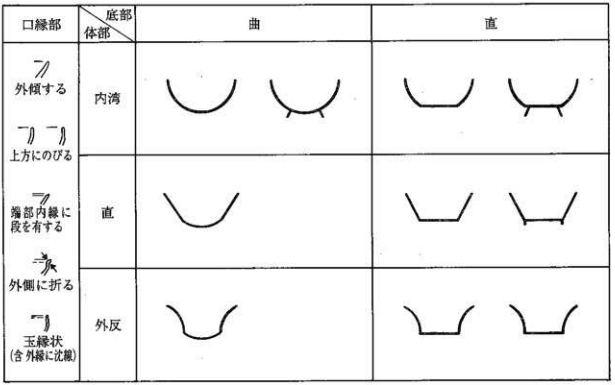
基準　①～③は、蓋の口縁部形態の影響を受けているものと考える。したがって、②は体部との境に屈曲点を持たせたり、口縁部分に限って工具を使用してナデ調整をしたりするなど明らかに蓋の口縁部を意識しているとみられるものを指し、⑥の上方にのびるタイプと異なる。④と⑤の違いは口縁部断面（第22図中矢印で図示）に平行面をもつかもたないかである。

以上の工程を経て、坏身・皿は6種類に分けることとした。（第23図参照）

①平坦な底部と直線的に外傾する体部を持つタイプ　（第39図6・8・18・21・22など）

②曲面を意識した底部と体部、外傾する口縁部を持つタイプ　（第39図1・2・3など）

③平坦な底部と曲面的な体部、上方にのびる口縁部を持つタイプ　（第39図4，第37図4・16・17・19・20など）



第22図　坏身の形態模式図

④平坦な底部をもち、口縁部にアクセント（端部を折る、玉縁状の端部、端部に沈線）を持つタイプ（第37図1・2・3・8・13・15など）
⑤平坦な底部を持ち、口縁部と体部に境を持たないタイプ（第37図11，第38図4・5・6など）
⑥平坦な底部を持ち、口縁部と体部に境を持たず、なおかつ口縁部が内湾するタイプ
（第38図1・2など）

第23図では、分類した形態を縦軸に、横軸に切り離し技法を据えた。回転ヘラケズリ→静止糸切り→回転糸切り（のちナデ消し）→回転糸切り（切り離し）の順に並べ、それぞれの技法が横軸で揃うように留意した。

3．須恵器の特徴と年代観（第23図）

坏蓋の傾向と消長

高広編年ⅡB期に相当する時期は小型と中型で、その後大型化し、しばらくの間大型が主流を占める。ⅣB～Ⅴ期以降に再び小型の蓋が出現する。

天井部形態は糸切り技法の出現後もしばらく古形態を継承する曲面を意識してケズリなどで整形している。その後しだいに曲面ではなく、平坦な天井部の流行がみられるようになる。

つまみ形状は小型のものは一貫して宝珠つまみ、中型はⅡB期では宝珠つまみ、輪状つまみ、擬輪状つまみとさまざまであるが、坏蓋の大型化が進み、小型が断絶する一時期、中型が小型の役割を担うころから宝珠つまみに移行する。大型はⅣA期までは規格的な輪状つまみであったが、ⅣB期以降、宝珠つまみ、輪状つまみ、擬宝珠つまみが混在する。

坏身の傾向と消長

高広編年ⅢA期に相当する時期は曲面を意識した底部に高台付きの坏が主流であるが、糸切り技法が出現するとほぼ同時に曲面の底部は消失する。

口縁部形態は、坏蓋のかえりが存続する時期まで外方に大きく広がるフォルムをとるが、坏蓋のかえりとともにこの器種も消失する（ⅢA期、静止糸切り技法）。このころ口縁部を下方に折り曲げるタイプの坏蓋が出現し、かえりを持つ坏蓋と平行して存在した（文献1）。対応して前述のタイプの口縁部を、上方に伸ばすものが出現した。口縁部が上方にのびるタイプははじめ高台付きであったが、のちに無高台になり、高台は、ⅢB期に出現した平坦な底部に直線的に外傾する体部を持つタイプに限定されるようになる。それまでの高台は中央寄りにつき、ハの字状にひらくしっかりした高台が主流であったが、直線的なラインを持つ坏身に移行してから底面の外周沿いにつく低平なものとなる。

ⅢB期以降、坏身は曲線的なラインを持つ無高台のタイプと、直線的なラインを持つ高台付きのタイプに分かれ、高台付坏が形態としては画一的なのに対して無高台坏身の形態のバラエティーが増加する。

口縁端部を折り曲げるタイプはその後端部形態が玉縁状に移行し、やがて退化して口縁部外縁に沈線を施すものとなる。

口縁部と体部に境を持たないタイプは、その後次第に小型化し、口径と底径が近似するようになる。

ⅣA期からⅣB期の一時期、口縁部と体部に境を持たないもののうち、口縁部が内湾するタイプが存在する。これは実用的見地から、口をつけて使用するものではないと考える。

4．土師器の特徴と年代観

本遺跡の特徴のひとつに大量の丹塗り土師器の皿及び坏身の出土がある。土師器の中で復元個体数[注10]としては甕類を上回る。

土師器の皿・坏身は須恵器のそれと相互に影響を及ぼしあっているという[注11]。そこで鹿蔵山出土丹塗り土師器の形態の大枠を、第22図をもとに示し検討を試みた。

①曲面を形作る底部に内湾する体部を有するタイプ（第47図3～5など）無高台
底面調整：ヘラミガキ、ヘラケズリ等
②曲面を形作る底部に直線的な体部を有するタイプ（第47図2・8など）無高台
底面調整：ヘラミガキ、ヘラケズリ等

③平面形態である底部に直線的な体部を有するタイプ（第47図11～16など）無高台・高台付き
底面調整：指オサエ、ヘラナデ等
①は底面を全面丹塗りする。②は丹塗りするものと露胎するものが混じる。③は坏身の場合底面は露胎する。皿の場合高台の有無にかかわらず丹塗りするものと露胎するものが混じる。
①および②は須恵器にはなく土師器のみにみられる形態である。②は須恵器では高台付きに限られる。

須恵器との相違点・共通点と傾向

曲面という安定感のない底部をもつ坏身に高台がつかない点が須恵器と異なる。一部の意匠的とも思える凹凸は、須恵坏身の一時期にみられる凹凸を思わせる。

須恵器が土師器と影響しあうとして、底部形態も須恵器同様、曲面→平面の流れで追えるならば、概観するに、古い形態の特徴は、大型でヘラケズリやヘラミガキで整形する曲面の底部を持ち、全面を丹塗りする。時代が下るとともに小型化し、指オサエやヘラナデで整形する平面の底部をもち、底面は露胎するものに変化すると押さえられる。

高台も中央寄りにつくしっかりしたものから、坏身底部が平面化するとともに、底面の外周沿いに付く低平なものと変化していくのも須恵器と同じ様相を持つ。

5．まとめ

以上主に須恵器の坏蓋・坏身を元に述べてきたが、ここで本調査区の年代観を述べる前に、ヘラ切り技法の須恵器坏蓋・坏身について触れておきたい。

本遺跡では糸切り技法の他にヘラ切り技法のものが多くみられた。ヘラ切り技法は蛇喰遺跡（文献３）に多く出土しているのが知られ、供給地に湯峠窯（松江市忌部町）が挙げられている。蛇喰遺跡では「消費地で搬入された土器から年代設定を行うのはやや問題があるが」[註10]８世紀後半～９世紀の遺跡であるとされている。[註11]

これらを踏まえて、本調査区の活動時期を出土資料から検討した結果、ヘラ切り技法の豊富な資料が存在すること、なかでも旧体育館下調査区SX01内からヘラ切りの底部を持つ高台付坏（第40図７）が蓋と供伴して出土していること（写真図版11）や、灯明皿・転用硯・丹溜め容器などといった、本遺跡の性格付けをする主要遺物にヘラ切りがみられること、さらに坏蓋坏身ともに高広編年ⅣB期の資料が豊富であることなどから、蛇喰遺跡と同様に「消費地」であることを視野に入れつつ、８世紀後半～９世紀にその主要年代を求めることとする。

（露梨）

【註】

註１　本遺跡の分類は主に文献２の高広編年を参考に行った。
なお本文中にもある高広編年の暦年代観については文献１内で
ⅢA…国庁編年２形式に相当する（690年代～710年代）
ⅢB…ⅢA・ⅣAとの関係から、８世紀前半。
ⅣA・ⅣB…国庁編年４形式に相当する。ⅣAが８世紀中～後半、ⅣB８世紀末～９世紀初頭。
Ⅴ……９世紀中～後半に相当する。
と報告書の定義を示したうえで、「ただし現在ではⅢB・ⅣA期間の時間差を少なく見て（つまり静止・回転糸切りが多

くは同時併存するとみる）ⅣA期を八世紀前半～中葉、ⅣB期を八世紀後半から九世紀初頭、Ⅴを九世紀前半以降とみる見方も強い」とし、暦年代観についてはあくまでも目安として提示したいと述べている。

註2　山本清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念文集』（のち『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会1971に収録）

註3　坪井清足・町田章　1970「Ⅵ遺物」『出雲国庁跡発掘調査概報』松江市教育委員会

註4　柳浦俊一　1980「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古　三』1986「出雲地方の須恵器生産」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会

註5　柳浦俊一　2001「島根県東部（出雲）の切り離し技法と長頸壺類都接合技法」『古代の土器研究　六　律令的土器様式の西・東　六須恵器の製作技法とその転換』

註6　口縁部形態は柳浦A編年でその変化を縦軸で追えると示されていることと（同じく縦軸で変化が追えるとされているつまみの形態よりも明確にその消長を追えると判断した）全体のフォルムをつかむのに不可欠であると考えた。

註7　これは天井部形態が切り離し技法の転換に伴い変化していくとの仮定に基づく。古墳時代の丸みを帯びた器形を、糸切り技法の出現という画期を迎えて後、どの程度まで意識して継承していったか、ということも知ることができると考えた。

註8　同タイプの中でサイズに巾があり一括するのには躊躇され、形態別・サイズ別に全て並べた場合、それぞれの消長の巾が小さいことから間延びして全体がつかみづらくなった。坏蓋の形態の変化とともに坏身との関係を示す図表を目指した場合、鹿蔵山遺跡に関していえば、横軸（同時期）で、存在した蓋のバリエーションが坏身に比べて非常に少ないことから、坏蓋のセット関係は形態別というよりむしろ、口縁部形態と径の要素が重要と考えられた。つまり、口縁部形態及び径が適応する坏身とのセット関係を検討すべきだと考え、図に反映させた。

註9　内田律雄氏の御教示である、皿・坏身・鉢はその口径：器高（高台付きの場合体部高）の比率によって客観的に器種分類ができるという考えによる。

註10　正確な数は把握していないが、口縁部の破片から一見して比較できる差がある。

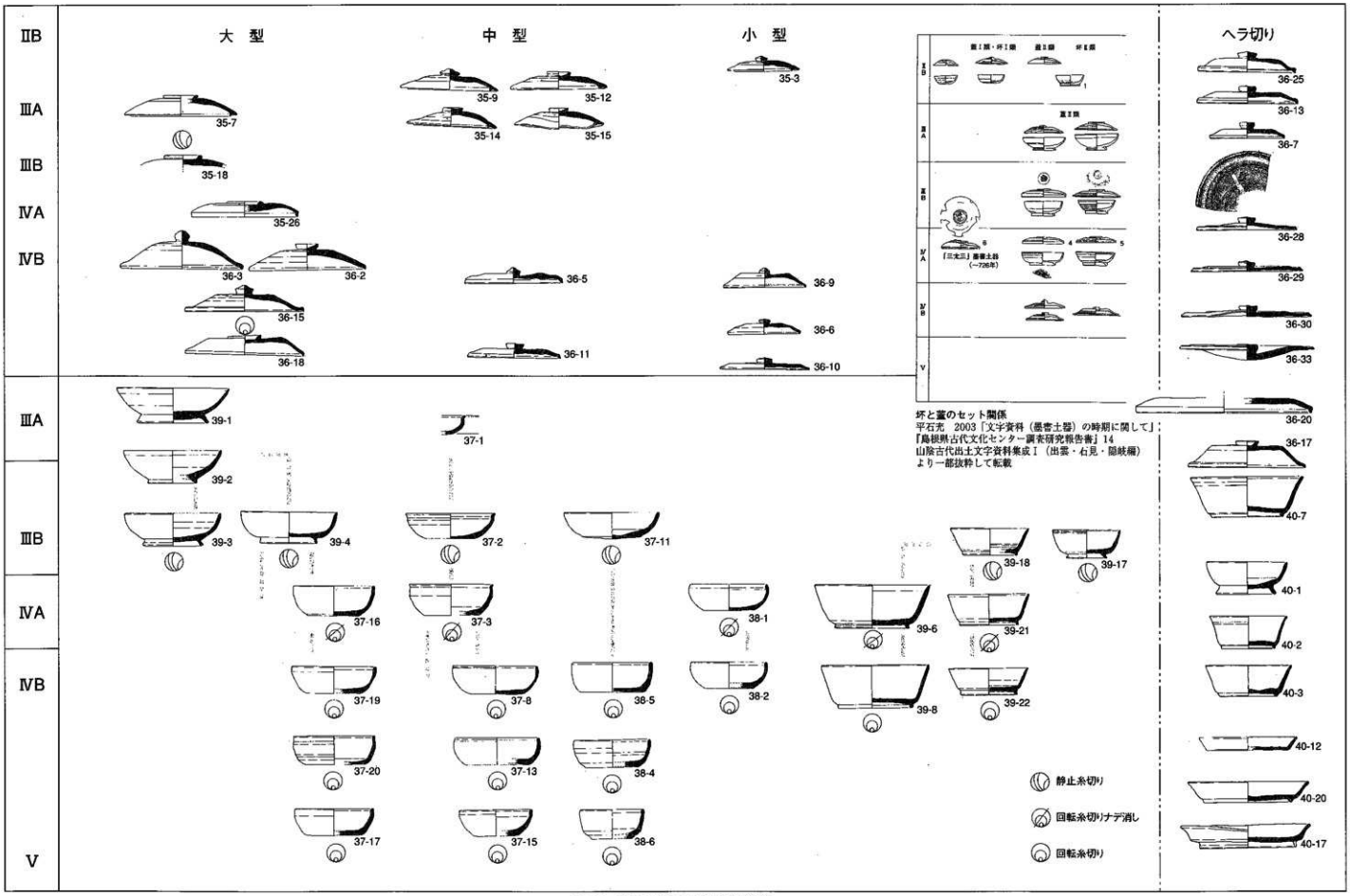
註11　内田律雄氏御教示による

註12　片岡詩子「第5章3.まとめ　1土器の特徴と年代」（文献4）

註13　木舟遺跡について
同時期の須恵器窯で知られるものに木舟遺跡がある。平田市教育委員会の原氏の御厚意で遺物を実見する機会を得たが、ヘラ切りの底部をもつものはなく、本遺跡に供給していた印象はうけなかった。

【参考文献】

1．平石充　2003「第一章第二節付　文字資料（墨書土器）の時期に関して」『島根県古代文化センター調査研究報告書第14山陰古代出土文字資料集成Ⅰ（出雲・石見・隠岐編）』
2．島根県教育委員会　1984『高広遺跡発掘調査報告書』
3．島根県八束郡玉湯町教育委員会　1999『蛇喰遺跡』



第23図　鹿蔵山遺跡 出土須恵器編年表

第2節　遺構について

(1) 集石について

校庭下調査区の集石1や旧体育館下調査区の集石2の性格について考察する。同様に集石遺構が検出された遺跡としては、石川県羽咋市の寺家遺跡が挙げられる。寺家遺跡からは、時期が13世紀前半から14世紀前半と時期は違うものの、直径275cm、高さ約90cmの石塚が1基検出されている[註1]。この石塚について報告書では、寺家遺跡から北西約900mに位置する気多神社（大己貴神を祭神とする神社）現本殿の背後に社叢があり（禁足地）、その中に直径5m前後、高さ数十cmの石積みの塚が1基所在しており、寺家遺跡で検出した石塚も気多神社で行われた積石塚を祭る祭祀と共通の儀式が行われていたと考えられている。

寺家遺跡では、既に7世紀代において、金環や勾玉が出土することから、祭祀が行われていた可能性があるほか、奈良三彩、腰帯金具、墨書土器の出土や、遺跡の立地が海から近く砂丘丘陵上に立地しているなど本遺跡と同様の性格をもつと考えられる。

本遺跡から北800mに出雲大社が所在すること、気多神社の祭神が大己貴神（出雲大社の主祭神　大国主命の別名）であることを考えれば、本遺跡についても集石に対する何らかの祭祀が考えられようか。

(2) 井戸について

校庭下調査区で降下取水式の井戸を1基確認している。底面で確認された井戸枠は、二重の井戸枠で残存状態が良好である。井戸枠内から明らかな祭祀遺物は出土しておらず、井戸の性格を出土遺物から明らかにすることは困難である。官衙もしくは、祭祀的様相を指摘できる可能性があるのは、構築材の井戸内枠材に、漆塗りの櫃が転用されていることである。同様に転用した例としては、京都府瓦谷遺跡、大阪府野々上遺跡の2遺跡から、杉材、横桟形式の櫃を井戸内枠に転用した例が確認されている。時期は、前者が奈良時代、後者が、8世紀中頃とされている[註2]。当地域において、櫃を転用して井戸内枠とした例は、現在までのところ確認されておらず、どのような目的で櫃を使用したのか明らかではないが、釘を全て抜いた上で、櫃を埋置していることを考えれば、井戸水に対する一種の神聖的な意味合いがあったと考えることができようか。

(3) 柱穴について

検出したピットは、合計で278基検出しているが、柱根が残存するピットや抜き取り痕跡が残されるピットは検出されていない。また、掘立柱建物の可能性を想定し、並びの確認をしたが、等間隔に並ぶピットは確認できなかった。

発掘調査地点は、南北約750m間で高低差が約2mあり、緩斜面になっていることから居住空間としての機能はなかったと考えられる。

また、やや大きな土坑も確認されているが、柱穴などが確認されておらず、土坑についても住居跡ではないと考えている。

（石原）

【註】

註1　石川県立埋蔵文化財センター　1986『寺家遺跡発掘調査報告書』Ⅰ
石川県立埋蔵文化財センター　1988『寺家遺跡発掘調査報告書』Ⅱ

註2　鵜山まり　1998「櫃－その系譜と展開－」『古事』天理大学考古学研究室紀要第2冊　天理大学考古学研究室

第3節　遺跡の性格について

(1) 出土遺物からみた官衙遺跡の可能性

本遺跡の性格を考察するうえで、官衙遺跡である可能性がまず挙げられる。

ここで、官衙に関係すると考えられる遺物について再度確認しておきたい。

①墨書・線刻などで記された文字資料が出土する。出土量は、発掘調査総面積が1,500㎡で、墨書土器193点、線刻25点、朱墨２点、刺突紋１点が出土しており、文字資料の出土密度は、6.7㎡の１点と非常に密な出土状況である。墨書のうち文字が確認できる土器としては、「林」「林原」「大」「大成」「杜」「高志」「堂」などが確認できる。

②少量ではあるが、硯が出土している。硯は、３点出土しており、円面硯の脚部や転用硯である。

③官人の位を示す装飾品である銅製の腰帯金具が７点、また刀装具１点が出土している。腰帯金具のうち蛇尾は金銅製である。

④奈良三彩や緑釉陶器などの施釉陶器が出土している。一般的には官衙遺跡でも出土する遺物である。本遺跡の奈良三彩の器種は多口瓶・火舎であり、仏教関係の可能性も考えられる。

⑤井戸を１基検出し、二重の井戸枠のうち内枠には、漆塗の「櫃」を転用して使用されている。これは、縦桟形式と呼ばれる脚を有する櫃である。(注1)

出土例は、長岡京左京二条二坊六町がある。ここでは東西溝（SD1301）から白木の脚が出土している。縦桟形式としては、出土例が長岡京のみであること、また、正倉院に同形式の櫃が伝世していることからも、官衙的色彩が窺える。

上記のように特殊遺物が多種にわたって出土することから一般集落の可能性は少なく、官衙関連の施設が周辺に存在する可能性が高い。

(2) 出雲平野周辺の官衙関連遺跡

出雲平野における官衙関連遺跡を概観し、鹿蔵山遺跡の官衙遺跡の可能性を考えたい。

①後谷Ⅴ遺跡

簸川郡斐川町大字出西に所在する。古代の行政区画では、出雲郡にあたる。礎石建物や掘立柱建物などを６棟検出し、そのいずれもが総柱の構造で大量の炭化米を伴うことから倉庫群の可能性が指摘されている。出土遺物は、奈良時代から平安時代にかけての須恵器、土師質土器、白磁、青磁のほか須恵器に「□□倉」と記された墨書土器が出土している。『出雲国風土記』に記された出雲郡家の正倉跡とみる説が有力になっている。(注2)

②青木遺跡

出雲市東林木町に所在する。古代の行政区画では、出雲郡の伊奴郷・美談郷の郷境付近にあたる。青木遺跡では、600点を超える墨書土器、約50点の木簡などの文字資料が出土している。また、神社施設の可能性をもつ建物跡や石敷き井戸跡などの祭祀遺構、神像・絵馬など信仰関連の特殊遺物が出土している。出土した墨書土器には、「伊」「伊努」と郷名を示唆する資料や、「美社」「祝」「神財」など神祇祭祀にかかわる墨書土器も出土している。

青木遺跡は、郡衙推定地とは、出雲平野をはさんだ対極に位置しており、郡レベルの出先機関が近隣におかれたとみる見方が有力である。(注3)

③古志本郷遺跡

出雲市古志町に所在する。古代の行政区画では、神門郡にあたる。平成10年・平成11年度の調査（F・G区）において、総柱建物跡７棟を含む掘立柱建物跡20棟を検出しており、神門郡家の可能性が指摘されている。

出土遺物では、「稲」の線刻された土師器１点、「若」の墨書された須恵器が出土している。平成７年・平成８年度の調査（C区）においては、須恵器坏の底面に「足万路」と記された墨書土器、また土師器の底面に「御厨」と墨書土器が出土している。

その他、銅製の腰帯金具である蛇尾１点、円面硯、転用硯が出土している。

遺跡の消長としては、8世紀の前半に神門郡家中枢である郡庁建物を含む大型の建物群があらわれる。8世紀後葉には、人為的に廃絶し、官衙的性格の強い遺構群が出現する。建物の規模、計画的に土地を区画し建物を配置した様子や硯などの特殊遺物が多く出土することからみて神門郡家に関わる遺跡であると報告されている(注1)。

④三田谷Ⅰ遺跡

出雲市上塩冶町に所在する。古代の行政区画では、神門郡にあたる。小型総柱建物群やそれに先行する四面庇付き掘立柱建物跡16棟が検出されている他、出土遺物としては、墨書土器が40点、木簡10点、緑釉陶器、封緘木簡状木製品、木簡状木製品、円面硯、転用硯、銅製腰帯金具（巡方）、石製腰帯具（丸鞆）、和銅開珎、糸車、紡錘車、鉄釘、鉄鏃、溶解炉、鉄鉢形土器、托、斎串、刀形、製塩土器など一般に官衙関係遺跡の出土品として特徴づけられる特殊遺物が出土している。

墨書土器には、上流部に湧水地点のあるSD06から「麻奈井」と墨書されたものや、「大止乃」「三田」「□宅」「神門」など、公的・拠点的施設の存在を窺わせる資料が出土している。遺跡の性格については、出土遺物の文字資料の内容から、神門郡の東部の郡家別院・出先機関とみられる(注2)。

以上見てきたように、出雲平野の官衙関連の遺跡として、共通する点は、遺構としては、総柱の掘建柱建物が検出されること。また、出土遺物としては墨書土器・木簡・硯などの文字に関係する資料が出土する、腰帯金具など官人に関連する遺物が出土する、また、遺跡によっては、祭祀関連の遺物も出土する。などの特徴が窺える。

鹿蔵山遺跡からは、総柱の掘立柱建物は現段階で確認されていないが、214点と多量の墨書土器・線刻土器が出土すること、硯が出土すること、金銅製の蛇尾を含む腰帯金具が出土すること、他の周辺遺跡では確認されていないが、厩内で確認されている井戸の内枠を容器の「甕」を転用して使用していることなどを考えれば、官衙関連の遺構が周辺に存在する可能性は高いと言えよう。また、出雲平野のみならず出雲地方で出土例のなかった奈良三彩が出土したことにも注視する必要があろう。奈良三彩の器種は、多口瓶及び火舎と考えられる破片12点である。橋崎彰一氏は、「厩内の有力寺院における儀式では、三彩・二彩の多口瓶（四天王寺・薬師寺・南滋賀廃寺など）、火舎（鳥坂寺・南滋賀廃寺など）がセットで使用されていた」と考えられており(注3)、本遺跡の出土器種と合致している。本遺跡の性格を考えるうえで、宗教的色彩についても検討を行う必要性がある。

(3) 出土遺物からみた宗教遺跡の可能性

宗教的な色彩の可能性のある遺物について検討したい。

ここで、宗教的色彩に関係すると考えられる遺物について再度確認する。

①「堂」・「社」などの宗教的な施設を示唆する墨書土器が出土する。

②奈良三彩の多口瓶・火舎が出土する。多口瓶は、出土事例が、奈良県薬師寺、滋賀県南滋賀廃寺、京都市北野廃寺など寺院関連の遺跡で出土する事例が多い。

③緑釉陶器のなかでも椀は、奈良県興福寺一乗院に出土事例がある。

④須恵器・土師器の灯明皿が出土している。須恵器は、定型の灯明皿７点が出土しており、土師器は、坏を転用して灯明皿としているものが７点、手づくね土器のうち１点も口縁部内面に煤が付着しているものがあり、灯明皿として機能したと考えられる土器である。

⑤須恵器のなかで、鉄鉢形土器が出土している。

灯明皿型土器や鉄鉢形土器が出土するものの、寺院跡で出土するような瓦は、出土しておらず、整った伽藍配置の遺構も確認できないことから、林健亮氏のいう「仏教関係遺跡」に該当する可能性がある。仏教関係遺跡は、大規模な寺院造営の動きが少なくなる８世紀中頃から９世紀にかけて増加する可能性が指摘されてお

り、本遺跡についても8世紀中頃からの僧侶の活動があったと考えたい。[注7]

また、本遺跡出土墨書土器のなかに「社」と書かれたものがあること、出雲大社との距離が約800mと比較的近くに立地していること、前述の石川県寺家遺跡のように砂丘上に立地し、遺物構成も似通った遺跡が神社と関連性を指摘されているなど[注8]関連性が示唆できるが、出雲大社境内遺跡から出土した遺物群と鹿蔵山遺跡の遺物群との比較検討では、類似性のある遺物は出土していない。同時期の遺物出土量が少ないことや、出雲大社のように「聖地」として成立している場所と鹿蔵山遺跡とでは、遺跡の性格が異なる可能性も考えられ、現段階で鹿蔵山遺跡と出雲大社を検出遺構・出土遺物から直接結び付けることは難しい。

(4) 出雲国風土記からみた杵築郷

本遺跡は、8世紀段階の行政区画としては、出雲郡杵築郷に所在している。『出雲国風土記』にみえる杵築郷の記載は以下のとおりである。「杵築郷。郡家の西北二十八里六〇歩なり。八束水臣津野命の國引き給ひし後、所造天下大神の宮造へまつらむとして、諸の皇神等宮處に參り集ひて杵築きたまひき。故、寸付と云ふ。神龜三年に、字を杵築と改む。」とある。[注9]

加藤義成氏の『出雲国風土記』に関する研究において、通釈として、「杵築郷の郷庁は、出雲郡家から西北15.074kmのところにある。」とされ、解説に「郷庁は御埼山への路程より更に380m遠く、少し遠すぎるようであるが、大体今の大社近くであったと考えられる。」として、官衙施設が出雲大社周辺に存在したことを指摘している。[注10]

参考までに距離について言及すれば、出雲郡家の正倉跡と推定される斐川町後谷遺跡から本遺跡までは、直線距離で約13.5kmである。出雲郡家から杵築郷家までの路程を郡家から北進し、さらに北山沿いを西に歩いた距離を計測したと考えれば、鹿蔵山遺跡周辺に杵築郷家のような末端官衙施設も想定できるが、確定できるだけの遺構は検出されていない。

なお、郷家については、国衙・郡衙とならび、郷ごとに設置された独自の官衙の存在として位置づけることに対して、議論のあるところであるが、関和彦氏によれば、郷家の認定用件として、円面硯、転用硯の出土、「館」・「家」・「郷長」などの墨書土器・木簡の出土を挙げており、[注11]本遺跡においても、少量ではあるが、円面硯の脚部、転用硯、「家」の墨書土器が出土していることから、郷家の可能性を考える必要があろう。また山中敏史氏によれば、「末端官衙遺跡には、その性格付けが未確定なものが多く、郡衙より下位には位置づけられない官衙施設も含まれうる。」としており、奈良三彩を官衙施設出土遺物とみるなら、郡衙より下位には位置づけられない官衙施設として認識されよう。[注12]

これまでに奈良時代の杵築郷に該当する大社町内の遺跡で、官衙関連と考える遺構・遺物が確認された遺跡は鹿蔵山遺跡の他には出土例がない。同時期の遺構としていて挙げれば、出雲大社の拝殿南調査区で検出した流路（SD02）が挙げられる。流路埋土から8世紀前半と考えられる須恵器が出土していることから、この遺構が、8世紀前半まで機能していたと考えられ、その水際と流路内に置かれた状態で出土している。松尾充晶氏は「集落内での家族集団単位ごとによる一連の祭祀行為の最終段階に投棄された状態を示す」としている。[注13][注14]

この他、修理免本郷遺跡は、官衙関連の遺物・遺構は確認されていないが、出雲大社南東800m、薬師谷開口部の微高地縁辺に位置しており、少量ではあるが、奈良・平安時代の須恵器・土師器が出土しており、地名に「本郷」という字名が残されていることからも、今後官衙に関連する遺構が確認される可能性があるが、現在までのところ、杵築郷家と確定できる場所はない。

(5) 遺跡の性格

遺跡の性格については、遺構からの性格付けが困難であるため、遺物の性格から周辺の環境を復元せざるを得ない。

まず、第1に考えられるのが、官衙施設の存在である。可能性としては、杵築郷の郷家などの末端官衙が存在した可能性である。また、出雲地方において初の出土例となった奈良三彩多口瓶・火舎が出土していることを考えると、末端官衙のみの性格とは言い難く、位置的に出雲大社と遺跡所在地までが800mと近いことから、出雲大社と関連のある官人の滞在施設、維持管理に関係する施設が存在する可能性も考えられる。[註15]

第2に考えられるのは、『出雲国風土記』に記載はないが、寺院などの宗教施設が周辺に所在した可能性である。出雲市の三田谷Ⅰ遺跡について、林健亮氏は、「多数の鉄鉢形土器を伴うことから仏教的施設も併存した」と考えており、[註16]三田谷Ⅰ遺跡と鹿蔵山遺跡との出土遺物の類似性から考えて、三田谷Ⅰ遺跡と同様に官衙施設に付随して仏教的施設が併存していた可能性がある。

いずれにしても、今回発掘調査を実施した調査区は、掘立柱建物などの施設が検出されないことから、官衙的施設もしくは、仏教的施設の中枢（中心）部分ではなく、周辺で消費された器財が廃棄されるような縁辺部と考えられる。

本遺跡の性格を明確にするためには、本調査区周辺の発掘調査など新資料の発見を待たなければならないだろう。

今後の周辺調査に期待したいところである。

（石原）

【註】

註1　綿山まり　1998「櫃－その系譜と展開－」『古事』天理大学考古学研究室紀要　第2冊天理大学考古学研究室

註2　斐川町教育委員会　1996『後谷Ⅴ遺跡』斐川町文化財調査報告15

註3　松尾充晶　2004「奈良・平安初期の神社遺構－島根県青木遺跡－」『季刊考古学』第87号雄山閣

註4　島根県教育委員会　2003『古志本郷遺跡Ⅴ　出雲国神門郡家関連遺跡の調査』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ

註5　島根県教育委員会　2000『三田谷Ⅰ遺跡Vol3』・島根県教育庁古代文化センター2003『山陰古代出土文字資料集成』Ⅰ（出雲・石見・隠岐）

註6　楢崎彰一　1998「日本における施釉陶器の成立と展開」『日本の三彩と緑釉－天平に咲いた華－』愛知県陶磁資料館

註7　林健亮　2000「灯明皿型土器から見た仏教関係遺跡」『出雲古代史研究』第10号出雲古代史研究会

註8　石川県立埋蔵文化財センター　1986『寺家遺跡発掘調査報告書』Ⅰ
石川県立埋蔵文化財センター　1988『寺家遺跡発掘調査報告書』Ⅱ

註9　加藤義成校注　1965『出雲国風土記』松江今井書店

註10　加藤義成　1981　改訂3版『修訂　出雲国風土記参究』松江今井書店

註11　関和彦　1989「古代村落「官衙」研究への提言」『共立女子第二中学校高等学校研究論集』12号　共立女子第二中学校高等学校

註12　山中敏史　2004　「Ⅹ－1官衙関連遺跡と末端官衙」『古代の官衙遺跡Ⅱ遺物・遺跡編』奈良文化財研究所

註13　大社町教育委員会　2004『出雲大社境内遺跡』

註14　注12文献と同じ

註15　國學院大學教授　椙山林継氏の御教示による

註16　注7文献と同じ

第7章

鹿蔵山遺跡出土奈良三彩について

第7章　鹿蔵山遺跡出土の奈良三彩について

高橋照彦（大阪大学大学院文学研究科）

大社町・鹿蔵山遺跡出土の三彩陶器は、日本で奈良時代頃に作られた鉛釉陶器、いわゆる奈良三彩である。破片にはなっているが、同一個体とみられる。器の種類は、多口瓶あるいは多嘴瓶と呼ばれるもので、肩部に四個ほどの小さな注口が付く長頸の壺に相当する。確認できる部位は、注口部ならびに胴部や底部である。胎土は精良で、その色調は白色を呈している。緑釉・白釉（透明釉）・褐釉の三色を用いた三彩釉が施されており、釉の塗り分け方としては、緑の斜格子を形作り、大きな空隙部に白釉を埋め、小さな空隙部に褐釉を加えている。

奈良三彩は、当時の日本で生産された最高級の焼物であり、平城京あるいはその周辺の中央官営工房で[1]厳鎖的に生産されたとみられるもので、全国的にも出土遺跡は限られている。出雲地方では初めての出土例であり、今回の発掘調査における大きな成果の1つである。奈良三彩では緑釉と透明釉を掛け分けた、いわゆる二彩の例が比較的多い中で、三色を用いる三彩は例が必ずしも多くはなく、その点でも本出土例は貴重な遺品である。

また、出土奈良三彩の器種としては、全国的にみて、小壺を初めとするミニチュア製品が大半を占め、本例のような大型製品の出土はそう多くはない。多口瓶の類例としては、奈良市西ノ京の薬師寺の他、東京都調布市上石原遺跡[2]、滋賀県大津市南滋賀廃寺[3]、京都市北野廃寺[4]、同じく京都市の梅ケ畑祭祀遺跡[5]、奈良市佐保山遺跡[6]などが知られている。注口を持たない大型長頸瓶としては、正倉院宝物中の1点[7]が最も著名である。

本例は、既往の出土瓶類と比較すると、小破片とはなっているものの、釉調が良好であり、保存状況もよく、釉の剥落や土中での釉調変化もほとんど認められない点は特筆すべきであろう。必ずしも発色が良くなく、二彩でもある正倉院宝物の長頸瓶と比べても勝るとも劣らない、彩り鮮やかな優品である。

本三彩は、包含層から破片となって、発掘区域の各所で出土している。また、この発掘地区では、井戸以外に特にめぼしい遺構がみられないようである。これらの状況から判断して、遺跡の立地する砂丘斜面上方などで本来使われていたものが、破損などのためにこの遺跡付近で廃棄されたのであろう。

その点をふまえれば、本遺跡出土の奈良三彩の歴史的な位置付けは、周辺地域の調査を待たねばならない。ただ、奈良三彩は、一般論として言えば、日常容器ではなく、宗教祭器としての機能を持つ奈良時代の高級陶器であり、宗教・祭祀的な機能を果たす場とそれを保有しうる人物がこの遺跡の周辺に存在したことを推測して間違いない。

多口瓶は、詳細不明の遺跡から出土したものも少なくないが、これまでの出土例からみると、寺院関係の遺跡からの出土品が多い。例えば、梅ケ畑祭祀遺跡の場合、仏鉢形の三彩なども出土しているので、仏教的な色彩が強い祭祀遺跡である。多口部を持たない長頸瓶ながら、正倉院宝物の例も、もともとは東大寺の仏具とみられる。多口瓶類は、おそらく花瓶などの仏具として用いられることが多かったのであろう。

その点で興味深いのは、同じ鹿蔵山遺跡からの出土品に「堂」と墨書された土器が含まれる点である。その解釈は現資料からだけでは確定しがたいが、周辺に仏堂などが存在したこともあながち否定できず、多口瓶の出土とも関連付けられる可能性はある。

ただ、遺跡の立地点は、言うまでもなく出雲大社に非常に近接した地域であり、仏教への単純な結びつけは避けねばなるまい。もちろん、奈良時代に遡って神仏習合が存在することは言うまでもないが、出雲大社の場合、仏教との関係は希薄であり、それを確実に辿ることができるのは鎌倉初期以降とされている[9]。神仏習合の

側面の希薄さは史料の残存状況による可能性も否定できないため、奈良時代に遡って仏教との関係が皆無であったかは、むしろ考古学側に課せられた今後の検討課題であろう。

その一方で、神祇信仰の中心となり、仏教との関係も薄い伊勢神宮の関連遺跡で言えば、三重県の伊勢・斎宮跡からは三彩の小壺や蓋付短頸壺などが出土している点を指摘できる。多口瓶は確認できないようだが、三彩陶器は出土している。奈良三彩の機能を考える上で、大型器種とミニチュア品など器種ごとの性格差の識別が必要であるが、三彩陶器全般に対しても神祇祭祀との関連は否定できないのかもしれない。奈良三彩の性格付けの評価を与える上で、逆に今後、この遺跡周辺の成果は注目されることになるはずである。

また、本遺跡と出土遺物や遺跡立地の上で共通する性格の遺跡として、石川県羽咋市の寺家遺跡が挙げられる。寺家遺跡からは、小壺ながら三彩陶器が出土しており、腰帯金具やその他の特殊遺物なども確認できる点で、鹿蔵山遺跡と共通するところが少なくない。また、寺家遺跡は立地的に海岸に近い砂丘上に位置し、気多神社に関連する遺跡であるなど、出雲大社に近接する鹿蔵山遺跡とかなり類似度が高い。

この寺家遺跡の場合、「司館」と墨書された土器が出土しており、官司の館と推測される遺構も見つかっている。一方、鹿蔵山遺跡からも「家」「三家」「宮」銘の墨書土器などが出土しており、出雲大社にかかわる官司などの有力者の「家」、あるいは館に相当するような施設がこの遺跡の付近にあった可能性は高い。金銅製の腰帯金具や井戸に転用された漆塗りの櫃などの出土は、有力人物の存在を裏付ける補強材料となるだろう。

以上みてきたように、仏堂があったかどうかは不明と言わざるをえないものの、官司などの有力者の「家」の周辺で、この三彩を用いる何らかの祭祀的な行為が行われていたことは想定しておいて大過ないものと言えよう。

なお、鹿蔵山遺跡出土の古代施釉陶器としては、奈良三彩の他にも、緑釉陶器などが出土している。9世紀中頃とみられる京都（平安京近郊）産緑釉陶器の口縁部破片や、長岡京期にも遡りうる個体も含まれている。それらも、全国的には出土量の少ないものであるため、平安時代以降にわたり、この遺跡の周辺が出雲でも特別な位置を占めていたことを明示している。

出雲大社に近接するこの遺跡において奈良三彩多口瓶などが出土したことは、この付近に大社そのもの以外にも、きわめて重要な施設が存在したことを明白に物語るものである。今後、これらの出土品は出雲の古代史を紐解く1つの鍵になっていくものと思われる。周辺地域の調査の進展に期待は尽きない。

【註】

1．奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』1987年。
2．紀野自由「東京都調布市上石原遺跡出土の二彩多口瓶」『考古学雑誌』79－3、1994年。
3．柴田實「大津京趾（上）　南滋賀の遺蹟とその遺物」『滋賀縣史蹟調査報告』第9冊、1935年。
4．京都市埋蔵文化財研究所『北野廃寺』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第7冊）1983年。
5．高橋潔「梅ヶ畑祭祀遺跡（97UZ1）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成9年度、京都市埋蔵文化財研究所、1998年。
6．伊藤勇輔・前園実知雄「奈良市佐保山遺跡群の試掘調査」『奈良県遺跡調査概報』1978年度、奈良県立橿原考古学研究所、1979年。
7．宮内庁正倉院事務所『正倉院の陶器』日本経済新聞社、1971年。
8．久保田収「出雲大社と神仏分離」『出雲学論攷』、1977年。平井直房「出雲大社周辺の神仏関係」『宗教と社会　小口偉一教授古稀記念論集』、1981年。
9．石川県立埋蔵文化財センター『寺家遺跡発掘調査報告』Ⅱ、1988年、ほか。

第8章

鹿蔵山遺跡出土木製品の樹種

第8章　鹿蔵山遺跡出土木製品の樹種

渡辺　正巳（文化財調査コンサルタント）・古野　毅（島根大学総合理工学部）

はじめに

本報告では、鹿蔵山遺跡にて出土した奈良時代前半に作成されたと考えられる木製品の樹種鑑定結果について報告する。

鹿蔵山遺跡は島根県中央部、簸川郡大社町地内に立地する遺跡である。

試料について

樹種鑑定を行った試料の一覧を第2表に示す。第2表には、同時に鑑定結果も示してある。

永久プレパラートは渡辺（2000）に従い作成した。また作成した永久プレパラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント㈱にて保管管理をしている。

作製した永久プレパラートを、光学顕微鏡下で40倍～600倍の倍率で観察し記載を行った。記載にあたって同一分類群は一括して記載し、代表的な試料の3断面の顕微鏡写真を付けた。また用語などは基本的に島地ほか(1985)に従った。

樹種の鑑定結果と記載

第2表に鑑定結果を示し、各分類群毎に記載を行った。

(1) 樹種名：スギ*Cryptomeria japonica* D. Don

試料No. 4 （W03092902）：木版M

No. 5 （W03093001）：木版D

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅は広い。樹脂細胞は主に晩材部に分布している。また、分野壁孔はスギ型で2～3個存在することなどから、スギと同定した。

(2) 樹種名：ヒノキ属*Chamaecyparis* sp.

試料No. 2（W03092904）：杭1

No. 3（W03092901）：木版B

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はややゆるやかで、晩材の幅は広い。樹脂細胞は晩材部にのみ分布している。分野壁孔は明瞭なヒノキ型で2～4個存在することなどから、ヒノキ属と同定した。

(3) 樹種名：モクレン属*Magnolia* sp.

試料No. 1（W03092903）：井戸材底面

記載：径50～100μmで楕円形の道管が単独あるいは2～6個不規則に複合して、散在状に分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔で、道管側壁の壁孔は対列状～階段状である。また、道管内にチロースが認められる。繊維状仮道管（有縁壁孔が認められる）に隔壁が存在している。放射組織は1ないし2（まれに3）細胞幅の異性で、高さは300～500μmに達する。軸方向柔細胞は年輪の最外縁に1、2細胞幅のターミナル柔組織が顕著である。以上の組織上の特徴から、モクレン属と同定した。

引用文献

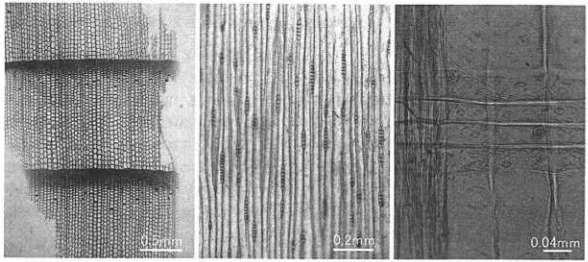
島地　謙・佐伯　浩・原田　浩・塩倉高義・石田茂雄・重松飄生・須藤彰司（1985）木材の構造．276p．文永堂，東京．

渡辺正巳（2000）長原遺跡東北地区東調査地出土木質遺物の樹種鑑定．長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ－1997年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書－，247－249，財団法人大阪市文化財協会．

第2表　樹種鑑定結果一覧表

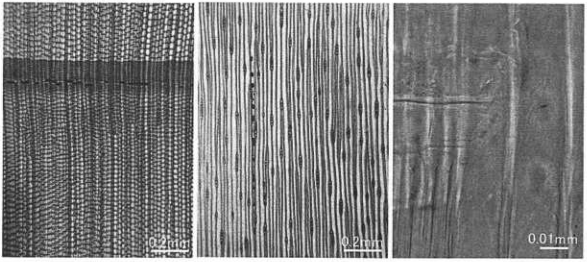
試料番号	整理番号	樹　種　名	遺構（取上番号）	別　種	備　考
1	W03092903	モクレン属	SX01	井戸材底面	奈良時代前半
2	W03092904	ヒノキ	SX01	杭1	〃
3	W09092901	ヒノキ	SX01	木板B	〃
4	W03092902	スギ	SX01	木板M	〃
5	W03093001	スギ	SX01	木板D	〃

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don
試料No. 4（W03092902）：木版M



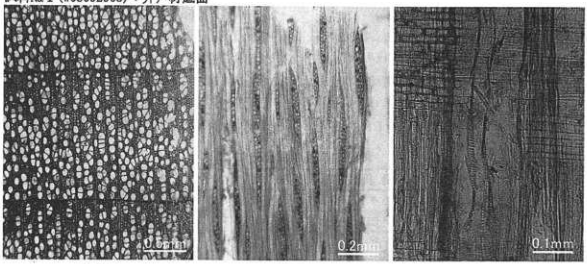
横断面　　接線断面　　放射断面

ヒノキ属 *Chamaecyparis* sp.
試料No. 2（W03092904）：杭 1



横断面　　接線断面　　放射断面

モクレン属 *Magnolia* sp.
試料No. 1（W03092903）：井戸材底面



横断面　　接線断面　　放射断面

写真3　出土木質遺物の顕微鏡写真

第9章

鹿蔵山遺跡出土青銅製品蛇尾の材質について

第9章　鹿蔵山遺跡出土青銅製品　蛇尾の材質について

㈱京都科学　今西寿光

はじめに

島根県簸川郡大社町 鹿蔵山遺跡出土金属製品の保存処理と同時に蛇尾1点の材質調査の依頼を受けた。分析は財団法人 元興寺文化財研究所に依頼した。

1．調査対象

蛇尾1点

2．調査内容

蛇尾の材質を調査するため蛍光X線分析（以下、XRF）による元素分析を行なった。分析は表裏2箇所で行ない、それぞれを蛇尾表面①、②とした。（画像1、2）

3．使用機器および測定条件

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ㈱　SEA5230）を用いた。この装置は試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出し、元素を同定することができる。

測定条件はモリブデン管球を使用、大気圧条件下、コリメータ1.8mm、管電圧45kV、管電流16μAで分析を行なった。

4．結果

XRF分析では蛇尾表面①，②から主成分として銅（Cu）、金（Au）、水銀（Hg）、鉄（Fe）、微量成分として銀（Ag）、ヒ素（As）、カルシウム（Ca）を検出した（図1，2）。

以上より、蛇尾は銅の表面に鍍金を施した資料であることが判明した。しかし現状では表面状態の精査の実施にいたっていないためアマルガムによる鍍金か、あるいは水銀をもちいて金箔を貼ったものであるかを推定するための材料は得られていない。

銀は金に微量含まれているものと考えられる。ヒ素は銅の不純物、鉄とカルシウムは土壌に由来するものと考えられる。

写真4（蛇尾表面①）

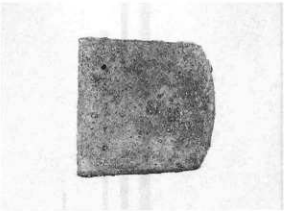


写真5（蛇尾表面②）

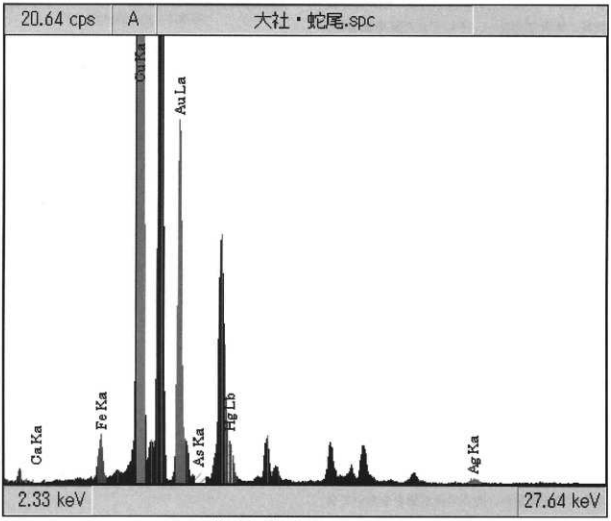
[測定条件]

測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	203
資料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	16
コメント	鹿蔵山遺跡

[試料像]

視野：[XY] 6.60　4.95（mm）

[スペクトル]



第24図　蛇尾①のXRFスペクトル

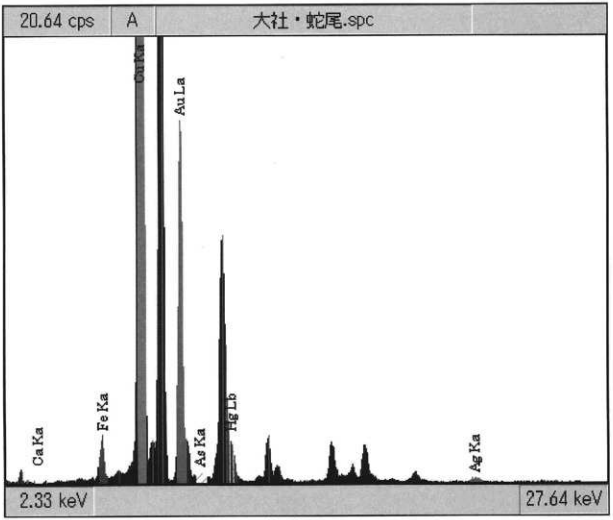
[測定条件]

測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	206
資料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	16
コメント	鹿蔵山遺跡

[試料像]

視野：[XY] 6.60　4.95（mm）

[スペクトル]



第25図　蛇尾②のXRFスペクトル

遺物観察表

第３表　奈良三彩観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法量（cm）	残存率（復元模倣部位）	胎土・焼成・色調	備　考
26	1	12－1 口絵１	奈良三彩	多口瓶	校庭下	瓶の肩部に付属する注口部一箇所および底部のみ残存。底部には、推定2.5cmの高台が付く	注口部外面に全面、内面上部に施釉。底部外面全面に施釉なし。底部底面ヘラケズリ。	復元器高：35.5 復元口径：12.4 復元底部：10.4	1/2未満	胎土：白色で精良 焼成：良好 色調：施釉は、緑釉・白釉・褐釉の三色を塗り分けた三彩。底の子状に線の斜物子をつくり、大きな空隙的に褐釉を施えている。	
26	2	12－2 口絵１	奈良三彩	火舎	体育館下	口縁部分。体部からまっすぐに立ち上がり、上面に幅1cm程度の平坦面がめぐる。	内・外面とも全面に施釉。	－	1/2未満	胎土：白色で精良 焼成：良好 色調：施釉は、施釉は、緑釉・白釉・褐釉の三色を塗り分けた三彩。	
26	3	12－3 口絵１	奈良三彩	多口瓶	校庭下	口縁部分。多口瓶の注口部、口縁部であると考えられる。	内・外面とも全面に施釉。	－	1/2未満	胎土：白色で精良　焼成：良好　色調：施釉は、施釉は、緑釉・白釉・褐釉の三色を塗り分けた三彩。	第26図－１と同一個体の可能性あり。

第４表　奈良三彩（非掲載）観察表

写真図版	No	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様・調整	法量（cm）	残存率	胎土・焼成・色調	備　考
12	1	奈良三彩	多口瓶	校庭下	注口部の接続部分	注口部；内・外面に施釉。 体部内面に施釉なし。	－	1/2未満	胎土：白色で精良 焼成：良好 色調：施釉の三色を塗り分けた三彩。	第26図－１と同一個体の可能性あり。
12	2	奈良三彩	多口瓶ヵ	体育館下	体部ヵ	外面に施釉、内面に施釉なし。 内面：回転ナデ。	器厚0.6	1/2未満	胎土：白色で精良 焼成：良好 色調：緑釉・灰釉が塗り分けた三彩。	第26図－１と同一個体の可能性あり。
12	3	奈良三彩	多口瓶ヵ	校庭下	体部ヵ	外面に施釉、内面に施釉なし。 内面：回転ナデ。	器厚0.5	1/2未満	胎土：白色で精良 焼成：良好 色調：緑釉・灰釉が確認できる。	第26図－１と同一個体の可能性あり。
12	4	奈良三彩	多口瓶	校庭下	注口部の接続部分	注口部；内・外面に施釉。 体部内面に施釉なし。	－	1/2未満	胎土：白色で精良 焼成：良好 色調：施釉の三色を塗り分けた三彩。	第26図－１と同一個体の可能性あり。
12	5	奈良三彩	多口瓶ヵ	校庭下	体部ヵ	外面に施釉、内面に施釉なし。 内面：回転ナデ。	器厚0.6	1/2未満	胎土：白色で精良 焼成：良好 色調：施釉の三色を塗り分けた三彩。	第26図－１と同一個体の可能性あり。
12	6	奈良三彩	多口瓶ヵ	体育館下	体部ヵ	内・外面に施釉。	器厚0.6	1/2未満	胎土：白色で精良 焼成：良好 色調：緑釉・灰釉が確認できる。	第26図－１と同一個体の可能性あり。
12	7	奈良三彩	多口瓶ヵ	校庭下	体部ヵ	外面に施釉、内面に施釉なし。 内面：回転ナデ。	器厚0.6	1/2未満	胎土：白色で精良 焼成：良好 色調：緑釉・灰釉が確認できる。	第26図－１と同一個体の可能性あり。
12	8	奈良三彩	多口瓶ヵ	校庭下	体部ヵ	外面に施釉、内面に施釉なし。 内面：回転ナデ。	器厚0.6	1/2未満	胎土：白色で精良 焼成：良好 色調：緑釉・灰釉が確認できる。	第26図－１と同一個体の可能性あり。

第5表　緑釉陶器観察表

写真図版	No.	種別	器種	出土地	形態の特徴	文様・調整	法量（cm）	残存率	胎土・焼成・色調	備　考
口絵2上	1	緑釉陶器	椀ヵ	校庭下	底部から体部まで残存。	外面：回転ヘラ削り 内面：回転ナデ	－	1/2未満	胎土：浅黄色、精良 焼成：良好 内・外面に明黄褐色の施釉あり	体部が緩やかに立ち上がることから椀であろうか
口絵2上	2	緑釉陶器	不明	体育館下	体部のみ	外面：回転ヘラ削り 内面：回転ナデ	－	1/2未満	胎土：浅黄色、精良 焼成：良好 内・外面ににぶい黄橙色の施釉あり	
口絵2上	3	緑釉陶器	不明	校庭下	体部のみ	外面：磨耗により不明 内面：回転ナデ	－	1/2未満	胎土：白色、精良 焼成：良好 内・外面に明緑灰色の施釉あり	
口絵2上	4	緑釉陶器	不明	校庭下	体部のみ	磨耗により不明	－	1/2未満	胎土：灰白色、精良 焼成：良好 外面に明緑灰色、一部濃緑色の施釉あり、内面施釉なし	
口絵2上	5	緑釉陶器	不明	体育館下	口縁部のみ、口縁部外反する	内・外面：回転ナデ	－	1/2未満	胎土：灰白色、精良 焼成：良好 内・外面に明緑灰色、一部濃緑色の施釉あり。	9世紀後半
口絵2上	6	緑釉陶器	椀	校庭下井戸	口縁部のみ、口縁部まっすぐ立ち上がる。	内・外面：回転ナデ	－	1/2未満	胎土：灰白色、精良 焼成：良好 内・外面に明黄褐色、一部明緑色の施釉あり。	無台椀、興福寺一乗院跡に出土例あり
口絵2上	7	緑釉陶器	椀	校庭下	高台部分から体部まで残存。高台部分貼付け	内・外面：回転ナデ	－	1/2未満	胎土：灰白色、精良 焼成：良好 内・外面に明黄褐色の施釉あり。	高台付椀、興福寺一乗院跡に出土例あり
口絵2上	8	緑釉陶器	水瓶ヵ	校庭下	体部のみ	内・外面：回転ナデ	－	1/2未満	胎土：灰白色、精良 焼成：良好 内・外面ににぶい橙色の施釉あり。	
口絵2上	9	緑釉陶器	水瓶ヵ	校庭下	体部のみ	内・外面：回転ナデ	－	1/2未満	胎土：灰白色、精良 焼成：良好 内・外面に浅黄橙色の施釉あり。	
口絵2上	10	緑釉陶器	水瓶ヵ	校庭下	体部のみ	内・外面：回転ナデ	－	1/2未満	胎土：灰白色、精良 焼成：良好 内・外面に浅黄橙色の施釉あり。	
口絵2上	11	緑釉陶器	水瓶	校庭下	体部のみ	内・外面：回転ナデ 外面に2本の沈線あり	－	1/2未満	胎土：灰白色、精良 焼成：良好 内・外面ににぶい橙色の施釉あり。	

第6表　文字資料遺物（実測図掲載）観察表

図版	No	写真図版	種類	種別	器種	墨書内容	位置	特徴	赤色塗彩 内底面	赤色塗彩 内側面	赤色塗彩 外側面	赤色塗彩 外底面	出土地	層位（V－）	遺構	備考
27	1	口絵3上	墨書	土師器	坏／皿	林□〔原カ〕	外底面		○	○	○	×	校庭下	3	ピット26	
27	2	口絵3上	墨書	土師器	坏／皿	□〔林ヵ〕	外底面		○	○	○	×	校庭下		井戸	
27	3	口絵3上	墨書	土師器	坏	「林」	外底面		○	○	○	×	校庭下	2		
27	4	口絵3上	墨書	土師器	坏	□〔林ヵ〕	外底面		○	○	○	×	校庭下		井戸	
27	5	口絵3上	墨書	土師器	坏	□〔林ヵ〕	外底面		○	○	○	×	体育館下	3		
27	6	口絵3上	墨書	土師器	坏	□〔林ヵ〕	外底面		○	○	○	×	体育館下	2		
27	7	口絵3上	墨書	土師器	坏	□〔林ヵ〕	外底面		○	○	○	×	体育館下	2		
27	8	口絵3上	墨書	土師器	坏	□□〔林原ヵ〕	外底面		○	○	○	▲	校庭下		井戸	
27	9	口絵3上	墨書	土師器	－	林□〔原カ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	3	ピット1	
27	10	口絵3上	墨書	土師器	坏／皿	□〔林ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	2		
27	11	口絵3上	墨書	土師器	－	□〔林ヵ〕	外底面		○	－	－	○	校庭下	3	第4トレンチ	
27	12	口絵3上	墨書	土師器	－	□〔林ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	2		
27	13	口絵3上	墨書	土師器	－	「林」	外底面		○	－	－	▲	校庭下	1		
27	14	口絵3上	墨書	土師器	－	□〔林ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	3		
27	15	口絵3上	墨書	土師器	－	□〔林ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	2		
27	16	口絵3上	墨書	土師器	坏	□〔林ヵ〕	外底面		○	－	○	×	校庭下？	－		
27	17	口絵3上	墨書	土師器	坏／皿	□〔林ヵ〕	外底面	回転糸切り	○	－	－	○	校庭下	2		
27	18	口絵3上	墨書	土師器	－	□〔林ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下		井戸枠底面	
27	19	口絵3上	墨書	土師器	－	□□〔林原ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	2		
27	20	口絵3上	墨書	土師器	－	林□〔原ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	2		
27	21	口絵3上	墨書	土師器	－	林□	外底面		○	－	－	×	校庭下	3	ピット38	
27	22	口絵3上	墨書	土師器	－	林□	外底面		○	－	－	×	校庭下	3		
27	23	口絵3上	墨書	土師器	杯	□〔林ヵ〕	外底面		○	－	－	×	体育館下	2		
27	24	口絵3上	墨書	土師器	坏	□〔林ヵ〕	外底面		○	－	－	×	体育館下	2		
27	25	口絵3上	墨書	土師器	－	□〔林ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	3		
27	26	口絵3上	墨書	土師器	－	□〔林ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	3		
27	27	口絵3上	墨書	土師器	－	□原〔林ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	3	第4トレンチ	
27	28	口絵3上	墨書	土師器	－	□〔原ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	2		
27	29	口絵3上	墨書	土師器	－	□□〔林原ヵ〕	外底面		○	－	－	▲	校庭下	3層		

○…全面　×…なし　▲……一部分　－…欠損

第7表　文字資料遺物（実測図掲載）観察表

図版	No.	写真図版	種類	種別	器種	墨書内容	位置	特徴	赤色塗彩 内底面	赤色塗彩 内側面	赤色塗彩 外側面	赤色塗彩 外底面	出土地	層位 (V－)	遺構	備考
27	30	口絵3上	墨書	土師器	－	□〔原ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下		井戸堀土	
27	31	口絵3上	墨書	土師器	－	□〔林ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下		井戸堀土	
27	32	口絵3上	墨書	土師器	－	□〔林ヵ〕	外底面		○	－	－	▲	校庭下		井戸堀土	
27	33	口絵3下	墨書	土師器	坏/皿	□〔林ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	－	井戸	
27	34	口絵3下	墨書	須恵器	坏	「林」	外底面	高台付	×	×	×	×	校庭下	1		
27	35	口絵3下	墨書	須恵器	坏	林□〔原ヵ〕	外底面	回転糸切り	×	×	×	×	校庭下	2		
27	36	口絵3下	墨書	須恵器	坏	□〔林ヵ〕	外底面		×	×	×	×	校庭下	2		
27	37	口絵3下	墨書	須恵器	坏/皿	□〔林ヵ〕	外底面		×	×	×	×	校庭下	2		
28	1	口絵3下	墨書	土師器	坏	「大成」	外底面	高台付	○	○	○	○	体育館下	3		
28	2	口絵3下	墨書	土師器	坏	「大」	外底面		○	○	○	○	校庭下	3		
28	3	口絵3下	墨書	土師器	坏	「大」	外底面		○	○	○	×	体育館下	3		
28	4	口絵3下	墨書	土師器	坏	「大」	外底面		○	○	○	×	体育館下	2		
28	5	口絵3下	墨書	土師器	坏	「大」	外底面		○	○	○	×	校庭下	2		
28	6	口絵3下	墨書	土師器	坏/皿	「大」	外底面		○	○	○	×	校庭下	3		
28	7	口絵3下	墨書	土師器	坏	□〔大ヵ〕	外底面		○	○	○	○	体育館下	3		
28	8	口絵3下	墨書	土師器	坏/皿	□□〔大成ヵ〕	外底面		○	－	－	○	校庭下	2		
28	9	口絵3下	墨書	土師器	坏	□〔成ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	3	第4トレンチ	
28	10	口絵3下	墨書	土師器	坏/皿	太□	外側面		－	○	○	－	校庭下	1		
28	11	口絵3下	墨書	土師器	坏/皿	「大」	外底面		○	－	－	○	体育館下	2		
28	12	口絵3下	墨書	土師器	－	□〔大ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	2		
28	13	口絵3下	墨書	土師器	－	「大」	外底面		○	－	－	×	校庭下	2		
28	14	15	墨書	土師器	坏	□□〔土木ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	－		
28	15	15	墨書	土師器	－	□〔爪ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下		井戸堀土	
28	16	15	墨書	土師器	－	板□	外底面		○	－	－	○	校庭下	3		
28	17	15	墨書	須恵器	坏	□〔方ヵ〕	外底面	回転糸切り	×	×	×	×	体育館下	3		
28	18	14	墨書	土師器	坏	□〔智ヵ〕	外底面		○	－	－	×	体育館下	3		
28	19	13	墨書	土師器	坏	「高志」	外底面		○	－	－	×	校庭下		井戸堀土	
28	20	13	墨書	土師器	坏	□志〔高ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	－	井戸	
28	21	13	墨書	土師器	坏	志	外底面		○	－	－	×	校庭下		井戸堀土	

○…全面　×…なし　▲……部分　……欠損

第8表　文字資料遺物（実測図掲載）観察表

図版	No.	写真図版	種類	種別	器種	墨書内容	位置	特徴	赤色塗彩				出土地	層位（V－）	遺構	備考
									内底面	内側面	外側面	外底面				
28	22	13	墨書	土師器	坏	□忠	外底面		○	－	－	×	校庭下	－	井戸	
28	23	13	墨書	土師器	坏／皿	□〔高ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	3		
28	24	13	墨書	土師器	坏	「堂」	外底面		○	－	－	×	校庭下	1		
28	25	13	墨書	土師器	坏	堂	外底面		○	－	－	×	校庭下	－	ピット3	
28	26	13	墨書	土師器	坏	堂	外底面		○	○	○	×	校庭下	3		
28	27	13	墨書	土師器	－	□〔堂ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	3		
28	28	14	墨書	土師器	－	□〔宮ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	2		
28	29	14	墨書	土師器	－	□〔社ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下			
28	30	14	墨書	土師器	－	□〔社ヵ〕	外側面		○	－	－	×	校庭下	3		
28	31	14	墨書	土師器	－	三□〔家ヵ〕	外底面		○	－	－	○	校庭下	2		
28	32	14	墨書	土師器	坏／皿	□〔家ヵ〕	外底面		○	－	－	○	校庭下	－	井戸	
28	33	14	墨書	須恵器	坏	□〔家ヵ〕	外底面	高台付	×	×	×	×	体育館下	4		
28	34	14	墨書	土師器	坏	□〔部ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下		井戸枠底面	
29	1	16	墨書	土師器	坏	□	外底面		○	－	－	×	校庭下	3		
29	2	16	墨書	土師器	－	□	外側面		○	－	－	×	校庭下	3		
29	3	16	墨書	土師器	－	□	外底面		○	－	－	×	校庭下	－		
29	4	16	墨書	土師器	坏／皿	□	外側面		－	×	×	—	校庭下	1		
29	5	16	墨書	土師器	－	□	外底面	高台付	○	－	○	×	校庭下	2		
29	6	16	墨書	土師器	－	□	外底面		○	－	－	×	校庭下	－	井戸	
29	7	16	墨書	土師器	坏	□	外底面		○	○	○	×	校庭下	3		
29	8	16	墨書	土師器	坏	□	外底面		○	○	○	×	体育館下	3		
29	9	16	墨書	土師器	－	□〔壬ヵ〕	外底面		○	－	－	×	体育館下	3		
29	10	16	墨書	土師器	坏	□	外底面		○	○	○	○	校庭下	2		
29	11	16	墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		○	－	－	×	校庭下	1		
29	12	16	墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		○	－	－	×	校庭下	－		
29	13	16	墨書	土師器	坏／皿	□〔廾ヵ〕	外底面		○	－	－	×	校庭下	2		
29	14	16	墨書	土師器	坏	□〔廾ヵ〕	外底面	高台付	○	○	○	▲	体育館下	2		
29	15	16	墨書	土師器	坏	□	外底面	高台付	○	○	○	▲	校庭下	3		
29	16	16	墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		○	○	○	×	体育館下	3		

○…全面　×…なし　▲…一部分　－…欠損

第９表　文字資料遺物（実測図掲載）観察表

図版	No	写真図版	種 類	種 別	器 種	墨書内容	位 置	特 徴	赤色塗彩				出土地	層位 (V－)	遺 構	備 考
									内底面	内側面	外側面	外底面				
29	17	16	墨書	土師器	坏/皿	□	外底面		○	－	－	×	校庭下	1		
29	18	16	墨書	土師器	坏	□	外底面		○	－	－	×	体育館下	3		
29	19	16	墨書	土師器	坏	□	外底面		○	－	－	×	校庭下	4		(記号？線先ならし？)
29	20	16	墨書	土師器	坏/皿	□	外底面		○	－	－	×	校庭下	2		
29	21	16	墨書	土師器	坏/皿	□	外底面		○	－	－	▲	校庭下	3		
29	22	16	墨書	土師器	坏	□	外底面		○	－	－	○	体育館下	3		
29	23	16	墨書	土師器	坏/皿	□□	外底面		○	○	○	×	校庭下	3		
29	24	16	墨書	須恵器	坏	□	外底面		×	×	×	×	校庭下	3		
29	25	16	墨書	土師器	坏	□	外底面	高台付	○	○	○	×	体育館下	3		
29	26	16	墨書	土師器	－	□	外底面		○	－	－	○	校庭下	2		
29	27	16	墨書	土師器	坏	□	外底面		○	○	○	×	校庭下	1		
29	28	16	墨書	須恵器	坏	□	外底面	回転糸切り	×	×	×	×	校庭下	3		
29	29	16	墨書	土師器	坏/皿	□	外底面	高台付	○	○	○	×	校庭下	2		
29	30	16	墨書	土師器	坏/皿	□	外側面		－	○	○	—	校庭下	1		
29	31	16	墨書	土師器	坏	□□ (□爪ヵ)	外側面		－	○	○	－	校庭下	3		
29	32	16	墨書	土師器	坏	□ (記号) (○ヵ)	外側面		－	○	○	—	校庭下	2		
29	33	16	墨書	土師器	坏	□	外側面		○	○	○	×	校庭下	1		
30	1	15	線刻	土師器	坏	「大」	外側面		－	○	○	—	校庭下	3		
30	2	15	線刻	土師器	坏	□ [大ヵ]	外側面		×	－	－	×	校庭下	－	井戸	
30	3	15	線刻	土師器	坏/皿	(記号)	内底面		－	×	○	—	校庭下	3		
30	4	15	刺突文	土師器	杯	スタンプ文	内面		－	○	×	—	校庭下	3		
30	5	15	線刻	土師器	坏	(記号)	外底面	高台付	×	×	×	×	校庭下	1		
30	6	15	線刻	土師器	杯	(記号)	外底面		○	○	○	○	校庭下	3		
30	7	15	線刻	土師器	坏	(記号)	内底面		○	○	○	○	体育館下	3		
30	8	15	線刻	土師器	坏	(記号)	外底面		○	○	○	×	校庭下	－	井戸	
30	9	15	朱墨	土師器	坏	(記号)	外底面	高台付	○	○	○	▲	校庭下	2		
30	10	15	朱墨	土師器	坏	(記号)	外底面	高台付	○	○	○	▲	校庭下	3		
—	—	写真のみ	線刻	土師器	坏/皿	□ [禾ヵ]	外底面						校庭下	－		

○…全面　×…なし　▲…一部分　—…欠損

第10表　文字資料遺物（実測図非掲載）観察表

種　類	種　別	器　種	墨書内容	位　置	特　徴	出土地	層位	遺　構	備　考
墨書	土師器	坏	□	外底面		校庭下	3		
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下	3		
墨書	土師器	−	□	内側面		校庭下	1		
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下	−	ピット5	
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下	3	第4トレンチ	
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下	3		
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下	3	ピット26	
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下	2		
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下	2		
墨書	土師器	−	□〔林ヵ〕	外底面		校庭下	2		
墨書	土師器	−	□	内側面		校庭下	2		
墨書	土師器	坏／皿	□	内側面		校庭下	1		
墨書	土師器	坏／皿	□	内底面		校庭下	1		
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下	1		
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下	−	井戸	
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下	−	井戸	
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下	−	井戸	
墨書	土師器	−	□	外・内底面		校庭下	−	井戸	
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下	2		
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下	2		
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下	1		
墨書	土師器	坏	□〔林ヵ〕	外底面		校庭下		井戸堆土	
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下		井戸枠底面	
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下		井戸枠底面	
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下		井戸枠底面	
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下		井戸堆土	
墨書	土師器	−	□	外底面		校庭下	−	井戸	

第11表　文字資料遺物（実測図非掲載）観察表

種　類	種　別	器　種	墨書内容	位　置	特　徴	出土地	層位	遺　構	備　考
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	－	井戸	
線刻	土師器	－	(記号)	外底面		校庭下	2		
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下	3		
墨書	土師器	－	□	外・内底面		校庭下	3		
墨書	土師器	－	□	内底面		校庭下	2		
墨書	土師器	－	□	外底面	回転糸切り	校庭下	1		
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下		井戸埋土	
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下		井戸埋土	
墨書	土師器	坏	□	外底面		校庭下		井戸埋土	
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下		井戸埋土	
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下	2		
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下	2		
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下	3		
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下	－	ピット3	
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下	－	ピット3	
墨書	土師器	－	□	?		校庭下	1		
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下	1		
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下	1		
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下	3		
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下	1		
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下	3		
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下		井戸埋土	
墨書	土師器	坏	□	外底面		校庭下	3		
墨書	土師器	－	□	外底面		校庭下	1～3		
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	3		
墨書	土師器	－	□	外底面		体育館下	2		
墨書	土師器	坏／皿	□	外側面		体育館下	2		

第12表　文字資料遺物（実測図非掲載）観察表

種　類	種　別	器　種	墨書内容	位　置	特　徴	出土地	層位	遺　構	備　考
墨書	土師器	坏	□	外底面		体育館下	3		
墨書	土師器	−	□	外底面		体育館下	2		
墨書	土師器	−	□	外底面		体育館下	2		
墨書	土師器	坏	□	外底面		体育館下	1		
墨書	土師器	−	□	外底面		体育館下	2		
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	−	井戸	
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	3		
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下			
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	3		
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	1		
線刻	土師器	坏	(記号)	外側面		校庭下	2		
墨書	土師器	坏	□	外側面		校庭下	1		
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	−		
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	2		
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	3		
墨書	土師器	坏	□	外底面		校庭下	−	井戸	
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	−	井戸	
墨書	土師器	坏	□	外底面		校庭下	−	井戸	
墨書	土師器	坏	□	外底面		校庭下	−	井戸	
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	−	井戸	
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	−	井戸	
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	3		
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	−	井戸	
線刻	土師器	坏／皿	(記号)	内底面？		校庭下	2		
線刻	土師器	坏／皿	(記号)	内底面		校庭下	2		
線刻	土師器	坏	(記号)	外底面		校庭下	2		
線刻	土師器	坏	(記号)	内側面		校庭下	2		

第13表　文字資料遺物（実測図非掲載）観察表

種　類	種　別	器　種	墨書内容	位　置	特　徴	出土地	層位	遺　構	備　考
線刻	土師器	坏	(記号)	内底面	高台付	校庭下	2		
線刻	土師器	坏／皿	(記号)	内底面		校庭下	2		
線刻	土師器	坏／皿	(記号)	内底面		校庭下	2		
線刻	土師器	坏／皿	(記号)	内底面		校庭下	2		
線刻	土師器	坏／皿	(記号)	内底面？		校庭下	3		
墨書	土師器	？	□	内面		体育館下	1		
墨書	土師器	坏／皿	□	内面		体育館下	2		
線刻	土師器	坏／皿	(記号)	内面		体育館下	2		
線刻	土師器	坏／皿	(記号)	外底面？		体育館下	3		
線刻	土師器	－	(記号)	－		体育館下	1		
線刻	土師器	坏	(記号)	内底面		体育館下	2		
線刻	土師器	坏	(記号)	内側面		体育館下	2		
墨書	土師器	杯	□〔杯ヵ〕	外底面		体育館下	2		
墨書	土師器	杯	□	外底面		体育館下	2		
墨書	土師器	杯	□	外底面		体育館下	2		
墨書	土師器	杯	□	外底面		体育館下	2		
墨書	土師器	杯	□	外底面		体育館下	2		
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	1		
墨書	土師器	杯	□	内面		校庭下	1		
墨書	土師器	杯	□	外底面		校庭下	2		
墨書	土師器	坏／皿	□	外底面		校庭下	2		
墨書	土師器	杯	□	外底面		校庭下	2		
墨書	土師器	杯	□	外底面		校庭下	2		
線刻	土師器	杯	(記号)	内面		校庭下	－		
墨書	土師器	坏	□	外底面		校庭下	－		
墨書	土師器	坏	(記号)	外底面	高台付	体育館下	3		

第14表　銅製品観察表

図版	No	写真図版	種　別	種　類	出土地	取上げNo	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存率 (%)	備　　考
31	1	17	銅製品	丸鋲	体育館下	154	2.45	3.8	0.8	14.19	95	表　：上面：丁寧な仕上げ、光沢をもつ 側面：全周に斜位の研磨痕のこる 裏　：内面調整なし 脚鋲：3ヶ所（全て端欠）　透孔0.4×2.7（cm）
31	2	17	銅製品	丸鋲	校庭下井戸	232	2.5	3.7	0.6	11.87	95	表　：上面：丁寧な仕上げ、光沢をもつ 側面：全周に斜位の研磨痕のこる 裏　：内面調整なし 脚鋲：3ヶ所（全て端部欠）　透孔0.4×2.6（cm）
31	3	17	銅製品	巡方	体育館下	152	2.6	4.88	0.5	6.34	95	表　：上面：一定方向の浅い研磨痕がのこる　一部擦打痕残る 側面：全周に斜位の研磨痕のこる　漆塗痕残る 裏　：内面調整なし 脚鋲：4ヶ所（3ヶ所端部欠）　透孔0.4×2.6（cm）
31	4	18	銅製品	裏金具	校庭下	115	2.3	2.8	0.2	5.07	90	表　：上面：一定方向の浅い研磨痕がのこる 側縁：横位の研磨痕が全周にのこる 裏　：内面調整なし　2ヶ所に穿孔
31	5	18	銅製品	隅り金具	校庭下 ピット	100	2.1	2.8	0.3	8.85	100	表　：上面：丁寧な仕上げ、光沢をもつ 側面：全周に斜位の研磨痕のこる 裏　：丁寧な仕上げ 脚鋲：2ヶ所（1ヶ所にC状の裏金具）　残存　鋲根本周辺に擦打痕残る
31	6	18	銅製品	コハゼ	体育館下	157	2.25	2	0.5	6.41	90	表　：上面：丁寧な仕上げ、光沢をもつ 側縁：ギャザーを寄せて成形（型に沿わして成形か） 裏　：3ヶ所に凹みあり　　残存　鋲根本周辺に擦打痕残る　脚鋲が欠損した跡か
31	7	19	銅製品	蛇尾	校庭下	132	2.85	2.9	6.5	14.41	100	一部赤色顔料、表・裏面とも丁寧な仕上げ、光沢をもつ。全面全色に光る。表・裏両面に2ヶ所の穿孔
31	8	19	銅製品	切羽？	体育館下 SX01	153	3.95	1.65	0.3	3.24	100	表面のみに稜をもつ。裏面は稜を持たず平滑。上部に鍛接痕が残る
31	9	19	銅製品	不明銅製品	校庭下	270	2.8	1.6	0.2	1.94	80	上端-下端は、欠損により不明。上端部付近に段を有しており、表面に横位の擦痕が残る。
32	1	19	銅製品	銅粒	校庭下	151	0.4	0.4	0.4	0.12	100	球状。全面に緑青付着。
32	2	19	銅製品	銅粒	校庭下	151	0.8	0.4	0.4	0.39	100	球状の銅粒2点が隣着。全面に緑青付着。
32	3	19	銅製品	銅板？	校庭下	90	2	1	0.5	5.33	100	表・裏・側面とも平滑。上端に浅いくぼみ

第15表　鉄・銅・鍛冶関連遺物観察表

図版	No	写真図版	種　類	器　種	出土地	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存率 (%)	備　考
32	4	20	鍛冶関連	銅溶解炉	校庭下	4	2.7	1.7	18.42	－（破片）	上端部は、被熱によりガラス化しており、色調は紫紅色。内面には緑青が残る。
32	5	20	鍛冶関連	銅溶解炉	校庭下	4.8	4.8	1.7	27.55	－（破片）	上端部は、被熱によりガラス化しており、色調は紫紅色。胎土は、5mm程度の堆い石が多量に含まれる。
32	6	20	鍛冶関連	銅溶解炉	校庭下	3.7	4.7	2.1	37.51	－（破片）	上面は、被熱によりガラス化しており、色調は紫紅色。胎土中に緑青の付着した銅粒を包含する。
32	7	20	鍛冶関連	銅溶解炉	校庭下	4	5.6	2.4	45.92	－（破片）	上面は、被熱によりガラス化しており、色調は紫紅色。
32	8	20	鍛冶関連	銅滓	校庭下	3.9	3.1	1.2	17.64	－（破片）	全体的に緑青が付着。上面は平滑であり、側面に木炭痕が残る。
32	9	20	鍛冶関連	羽口	体育館下	7.8	7.1	3.2	297.13	80	先端溶解部が黒色。外面に成形時の指頭圧痕が残る。内径2.1cm
32	10	20	鍛冶関連	羽口	校庭下	4.9	4.2	1.7	31.52	－（破片）	一部が灰色化。外面に成形時の指頭圧痕が残る。内面は、断面方形をしておりスノコ状工具に巻きつけて成形されたと考えられる。
32	11	20	鍛冶関連	羽口	校庭下	6.6	4.8	2.8	59.36	－（破片）	先端溶解部が黒色。
32	12	20	鍛冶関連	羽口	体育館下	6.5	3.3	2.5	44.32	－（破片）	先端溶解部が黒色。推定内径2.1cm
32	13	20	鍛冶関連	羽口	体育館下	4.9	5.1	1.7	59.73	－（破片）	外面に成形時の指頭圧痕が残る。内面は、被熱により赤褐色。
32	14	20	鍛冶関連	椀形鍛冶滓	体育館下	4.5	4.6	1.5	26.88	－（破片）	平面、不整方形。上面には、3ヶ所木炭痕による凹凸がみられる。
32	15	20	鍛冶関連	椀形鍛冶滓	体育館下	6.6	7.5	2.1	122.28	95	平面、不整楕円形。下方へ4方向の滓の流動がみられる。
32	16	20	鍛冶関連	椀形鍛冶滓	体育館下	5.6	3.6	2.6	41.96	100	平面、不整楕円形。底面に1ヶ所の木炭痕が残る。
32	17	20	鍛冶関連	椀形鍛冶滓	体育館下	4.3	7.2	2.5	56.44	50	平面、不整楕円形。上面に1ヶ所の木炭痕が残る。下面に炉床土とみられる粘土と溶解物が付着する箇所あり。
32	18	20	鍛冶関連	椀形鍛冶滓	校庭下	6.3	9	2.5	153.1	50	平面、不整楕円形。下面に炉床土とみられる粘土と溶解物が付着する箇所あり。
32	19	20	鍛冶関連	椀形鍛冶滓	体育館下	5.7	9.2	2.7	138.73	50	平面、不整楕円形。上面・下面に1ヶ所の木炭痕が残る。下面に炉床土とみられる粘土と溶解物が付着する箇所あり。
32	20	20	鍛冶関連	椀形鍛冶滓	体育館下	7.2	10	4.6	361.54	50	平面、不整楕円形。上面に3ヶ所、下面に1ヶ所の木炭痕が残る。
32	21	20	鍛冶関連	椀形鍛冶滓	体育館下	7.7	11.6	3.1	254.97	90	平面、不整楕円形。上面に1ヶ所の工具痕がみられる。下面に1ヶ所の木炭痕が残る。

第16表　鉄製品観察表

図版	No	写真図版	種　類	器　種	出土地	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存率 (%)	備　　考
33	1	21	鉄製品	釘	体育館下	5.7	0.7	0.7	5.72	80	頭部・先端部欠。胴部：断面不整方形。
33	2	21	鉄製品	釘	体育館下	6	1.4	1	29.91	90	先端部欠。 頭部：端部折り曲げ。頭部幅2.0×1.2cm。胴部との境にくびれなし。 胴部：断面方形。
33	3	21	鉄製品	釘	体育館下	8.4	1.5	1	17.45	100	頭部：端部圧延、折り曲げ。頭部幅1.5×1.0cm。胴部との境にくびれなし。 胴部：断面不整長方形。
33	4	21	鉄製品	釘	体育館下	8.7	1.3	0.9	15.87	90	頭部・先端部欠。胴部：断面不整方形。
33	5	21	鉄製品	釘	体育館下	9.8	1.1	1.1	21.64	100	頭部：端部折り曲げ。頭部幅1.5×1.0cm。胴部との境にくびれなし。 胴部：断面方形。
33	6	21	鉄製品	釘	校庭下	10.7	1.5	1.1	25.9	100	頭部：端部圧延、折り曲げ。頭部幅1.5×1.0cm。胴部との境にわずかなくびれあり。 胴部：断面方形。
33	7	21	鉄製品	釘	体育館下	11.7	0.8	0.7	23.79	90	頭部：端部圧延、折り曲げ。頭部幅1.4×1.3cm。胴部との境にくびれなし。 胴部：断面方形。
33	8	21	鉄製品	鉄鏃	体育館下	10	0.7	0.5	20.15	50	鏃身部欠。頸部：茎部直線状、角関。茎部：断面方形
33	9	21	鉄製品	鉄鏃	校庭下	8.8	0.8	0.6	10.86	50	鏃身部、頸部欠。茎部：断面方形、茎部中央にわずかなくびれあり。
33	10	21	鉄製品	鉄鏃	校庭下	7.4	0.7	0.6	7.93	50	鏃身部、頸部欠。茎部：断面方形、茎部中央にわずかなくびれあり。
33	11	21	鉄製品	鉄鏃	体育館下	7.4	1.1	0.5	12.53	50	鏃身部欠。頸部：茎部直線状、角関。茎部：断面方形
33	12	21	鉄製品	鉄鏃	体育館下	7.4	1	0.5	8.47	50	鏃身部、頸部欠。茎部：断面平形　雄部にわずかな反りがみられる。
33	13	21	鉄製品	刀子	体育館下	4.7	1.1	0.5	5.84	—	先端部・柄部欠。残存刃幅3.6cm
33	14	21	鉄製品	刀子	体育館下	4.3	1.1	0.6	4.85	—	先端部・柄部欠。残存刃幅4.0cm
33	15	21	鉄製品	刀子	体育館下	4.3	1.8	0.7	8.22	—	先端部・柄部欠。残存刃幅4.5cm
33	16	21	鉄製品	刀子	校庭下	6.6	1.4	0.8	8.16	50	先端部欠。残存刃幅1.5cm　柄部：断面方形
33	17	21	鉄製品	刀子	体育館下	4.8	1.1	0.45	5.42	—	先端部・柄部欠。残存刃幅4.7cm
33	18	21	鉄製品	刀子	体育館下	7.7	1	0.5	7.56	90	先端部欠。残存刃幅5.5cm　柄部：断面方形
33	19	21	鉄製品	刀子	体育館下	7.3	1	0.5	9.32	50	先端部・柄部欠。残存刃幅7.2cm
33	20	21	鉄製品	刀子	体育館下	12.4	1.8	0.6	19.93	80	先端部欠。残存刃幅4.4cm　柄部：断面方形
33	21	21	鉄製品	刀子	体育館下	11.9	1.4	0.6	16.47	80	柄部欠。残存刃幅11.5cm　雄部に反りがみられる。
33	22	21	鉄製品	刀子	校庭下	12.4	1	0.6	9.64	90	刃幅9.5cm　柄部分：断面方形
33	23	21	鉄製品	刀子	校庭下	22.9	2.2	0.5	98.36	98	先端部わずかに欠。推定刃幅15.4cm　柄部：長さ8.7cm、断面方形。
34	1	22	鉄製品	鉄鏃	校庭下	5.5	2.9	1.1	23.74	50	頸部・茎部欠 鏃 身 部：外形方頭形、断面平造 鏃身関部：角関

第17表　鉄製品観察表

図版	No	写真図版	種　類	器　種	出土地	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存率 (%)	備　　考
34	2	22	鉄製品	鉄鏃	体育館下	5.4	3	1.1	34.03	50	頸部・茎部欠 鏃 身 部：外形方頭形、断面平造 鏃身関部：角関
34	3	22	鉄製品	火打ち金	校庭下	3.5	6.8	1.2	29.36	100	下端は、波状。使用痕か。
34	4	22	鉄製品	火打ち金	体育館下	4.3	6.3	7	30.18	100	上端付近に直径5mmの円形の穿孔がみられる。下端は、波状。使用痕か。
34	5	22	鉄製品	紡錘車	体育館下	5.1	5.4	0.9	37.79	100	中心に円形の軸孔が開く。軸孔形6mm。
34	6	22	鉄製品	鉄先	校庭下	3.2	5.6	0.9	20.15	80	長方形鉄板の両端を鍛打により180°折り曲げて装着部を形成。
34	7	22	鉄製品	鉄先	校庭下	3.6	5.5	1.7	25.69	80	長方形鉄板の両端を鍛打により180°折り曲げて装着部を形成。
34	8	22	鉄製品	ミニチュア鍬先	体育館下	8.5	6.2	0.9	38.36	80	U字形の鍬先。刃先の幅は耳部に比べて長い。（都出比呂志分類B類）模造品・雛型のものか。
34	9	22	鉄製品	斧	体育館下 ピット	7.6	4.4	0.9	100.08	100	刃部：刃幅4.9cm 袋部：断面方形。鍛打による折り返しにより成形。袋部の合わせ目は密着しない。刃部と袋部の関に段を有する。
34	10	22	鉄製品	鉸具	体育館下	5.1	7.6	10	44.83	90	端部を鍛打により90°折り曲げて成形。
34	11	22	鍛冶関連	鍛冶具（鋏）？	体育館下	6.2	3.1	23	83.35	－	断面2cmの方形。鍛冶具（鋏）の頭部付近か。
34	12	22	鉄製品	鏃？	体育館下	9.5	5.7	1.9	133.89	－	端部欠。断面長方形。先端部にむけて細くなる。
34	13	22	鉄製品	用途不明	体育館下	9	3.2	3.8	76.91	100	不明鉄製品。2つの鉄製品が錆着している。
34	14	22	鉄製品	鏃？	校庭下	8.5	5.1	0.9	26.35	－	鍛打により90°折り曲げて成形。
34	15	22	鉄製品	用途不明	校庭下 ピット	4.8	2.1	0.9	9.16	－	鍛打によりフック状およびリング状部分を成形。
34	16	22	鉄製品	環状製品	体育館下	2.9	3.3	1.2	13.46	－	端部欠。鍛打により成形。内径1.8cm
34	17	22	鉄製品	環状製品	校庭下	4.6	4	1.6	32.32	100	鍛打により成形か。
34	18	22	鉄製品	鎌	校庭下	9.1	3	0.5	19.35	－	刃部：直線的で先端が曲がる。刃幅8.8cm。柄部欠。
34	19	22	鉄製品	鎌	体育館下	6.4	3.7	0.6	18.51	－	刃部：大半は欠損か。残存部分で4.7cm。柄部分欠。
34	20	22	鉄製品	釘？	体育館下 SX01	13.2	3.9	3.4	104.7	－	頭部・先端部欠損。断面長方形。大型の釘もしくは鍛冶具（鋏）か。

第18表　須恵器（坏蓋）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率 （復元候補部位）	備　考
35	1	23	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：曲面 口縁部：かえりが下方にのびて接地	外面：回転ヘラ削り後ナデ、回転ナデ 内面：磨耗著しい	－	小片	
35	2	23	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：曲面	外面：回転ヘラ削り、回転ナデ 内面：一定方向ナデ、不定方向ナデ、回転ナデ	－	（天井部径残 1/2未満）	
35	3	23	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：曲面 口縁部：端部の丸いかえりが内傾してつく。反りをもつ 宝珠つまみ：頂部が突出する	外面：回転ヘラ削り、回転ナデ/自然釉 内面：指オサエ、回転ナデ	口　径：10.3 器　高：2.3 体部高：1.6	1/2以上	

第19表　須恵器（坏蓋）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元根拠部位）	備　考
35	4	23	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：曲面 口縁部：端部の丸いかえりが内傾してつく。	外面：回転ヘラ削り、回転ナデ 内面：指オサエ、ナデ回転ナデ	口　径：11.8	（天井部径残 1/2未満）	
35	5	23	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：曲面 口縁部：浅い山形のかえりが下方に突出して接地する 宝珠つまみ：頂部が突出	外面：ヘラ削り、回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：10.6 器　高：2.1 体部高：1.3	（口径残 1/2未満）	
35	6	23	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：曲面 口縁部：かえりが天井部に垂直につく 輪状つまみ：端部に面をもつ	外面：回転ヘラ削り後ナデ、回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：16.1 器　高：2.8 体部高：2.4	1/2以上	
35	7	23	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：曲面 口縁部：かえりが天井部に垂直につく	外面：ヘラ削り、回転ナ 内面：磨耗、回転ナデ	口　径：16.4 器　高：3.2 体部高：2.7	（口径残 1/2未満）	
35	8	23	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：曲面 口縁部：かえりが天井部に内傾してつく	外面：自然釉が厚くかかる 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：14.0 体部高：2.3	つまみを欠く	
35	9	23	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：曲面 口縁部：シャープな後を持つかえりが天井部に垂直につく 宝珠つまみ：頂部が突出する	外面：回転ヘラ削りのち回転ナデ、回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：14.5 器　高：3.1 体部高：2.1	1/2以上	
35	10	23	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：曲面 口縁部：かえりが天井部に内傾してつく 輪状つまみ：端部に面をもつ	外面：回転ヘラ削り、回転天ナデ 内面：指オサエ、ナデ、回転ナデ	口　径：13.9 器　高：2.1 体部高：1.8	（つまみ径残 1/2以上）	
35	11	23	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：曲面 口縁部：端部に溝をもつ浅いかえりが下方に突出して接地 輪状つまみ：端部に面をもたない	外面：回転ヘラ削り後ナデ、回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：14.0 器　高：2.3 体部高：1.8	（つまみ径残全）	
35	12	23	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：曲面 口縁部：端部が丸いかえりが下方に突出して接地 輪状つまみ：端部に面をもたない	外面：回転ヘラ削り、回転ナデ 内面：指オサエ後不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：14.2 器　高：2.6 体部高：1.9	1/2以上	
35	13	24	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：曲面 口縁部：シャープな窪を持つかえりが強く内傾してつく 貼り付け輪状つまみ：中央がわずかに突出する	外面：回転ヘラ削り、回転ナデ 内面：竹管文/不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：12.9 器　高：2.9 体部高：2.2	完形	
35	14	24	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：曲面 口縁部：シャープな後を持つかえりが天井部に内傾してつく 貼り付け輪状つまみ：中央が突出する	外面：竹管文/回転ヘラ削り後ナデ、回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：13.3 器　高：2.8 体部高：2.3	完形	
35	15	24	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：曲面 口縁部：後を持つかえりが内傾してつく。反りをもつ 貼り付け輪状つまみ：端部に面をもたない。	外面：回転ヘラ削り、一部後回転ナデ、回転ナデ/自然釉 内面：竹管文/指オサエ後不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：最大13.3 器　高：最大 3.3 体部高：最大 2.7	完形	重ね焼き痕
35	16	24	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：曲面 輪状つまみ：端部に面をもたない	外面：回転ヘラ削り 内面：竹管文/不定方向ナデ	つまみ径：3.6	（つまみ径残 1/2以上）	
35	17	24	須恵器	坏蓋	校庭下井戸	貼り付け輪状つまみ：端部に面をもたない。中央が突出	外面：竹管文/回転ヘラ削り、回転ナデ	つまみ径：4.0	（つまみ径残 1/2未満）	

第20表　須恵器（坏蓋）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元根拠部位）	備　考
35	18	25	須恵器	坏蓋	校庭下	輪状つまみ；端部に面をもつ	静止糸切り 外面：ヘラ削り後ナデ 内面：ナデ	つまみ径： 残5.7	（つまみ径残 1/2以上）	
35	19	25	須恵器	坏蓋	体育館下 ピット	輪状つまみ；端部に面をもたない	外面：回転ヘラ削り、回転ナデ 内面：粘土紐巻痕、ナデ	つまみ径：5.2	（つまみ径残全）	
35	20	25	須恵器	坏蓋	第2トレンチ	輪状つまみ；端部に面をもたない。	外面：回転ヘラ削り、回転ナデ 内面：磨耗著しい	つまみ径：5.2	（つまみ径残 1/2以上）	
35	21	25	須恵器	坏蓋	第2トレンチ	輪状つまみ；端部に面をもたない。なでて高さをつぶす	外面：回転ヘラ削り、回転ナデ	つまみ径：4.7	（つまみ径残 1/2以上）	
35	22	25	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：曲面 口縁部：下方に折り曲げて接地。外面に面をもつ 輪状つまみ；端部に面をもたない	外面：回転ヘラ削り、回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：14.5 器　高：2.8 体部高：2.3	1/2以上	
35	23	25	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：曲面 口縁部：下方に折り曲げて接地。外面に面をもつ 輪状つまみ；端部に面をもたない。なでて高さをつぶす	外面：回転ヘラ削り、後ナデ、回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：15.5 器　高：3.0 体部高：2.5	1/2以上	
35	24	25	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：曲面 口縁部：下方に折り曲げて接地する。外面に凹面をもつ 輪状つまみ；端部に面をもつ。なでて高さをつぶす	外面：回転ヘラ削り後ナデ、回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：14.8 器　高：3.1 体部高：2.7	1/2以上	
35	25	25	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：曲面 口縁部：下方に折り曲げ接地。端部反りをもつ 輪状つまみ；端部に面をもつ。なでて高さをつぶす。	外面：回転ヘラ削り、回転ナデ 内面：回転ナデ後静止ナデ、回転ナデ	口　径：15.2 器　高：2.9 体部高：2.6	（つまみ径残 1/2以上）	
35	26	25	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：曲面 口縁部：下方に折り曲げて接地。外面に凹面をもつ 輪状つまみ；端部に面をもつ。なでて高さをつぶす	外面：回転ヘラ削り、回転ナデ 内面：回転ナデ	口　径：15.6 器　高：2.3 体部高：3.1	（つまみ径残 1/2以上）	
36	1	25	須恵器	坏蓋	校庭下井戸	天井部：曲面 口縁部：下方に折り曲げて接地。外面に凹面をもつ	外面：回転ナデ後ナデ、回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：19.6 体部高：2.5	1/2以上	重ねやき痕
36	2	25	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：曲面 口縁部：下方に突出して接地。 貼り付け輪状つまみ：端部に面をもたない。中央が突出しない。	外面：回転ヘラ削り、回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：17.1 器　高：3.9 体部高：3.0	（つまみ径残 1/2以上）	
36	3	25	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：曲面 口縁部：下方に突出して接地。外面に面をもつ 宝珠つまみ：ほぼ球形	外面：回転ヘラ削り、後ナデ、回転ナデ 内面：不定方向のヘラナデ、回転ナデ	口　径：17.8 器　高：5.7 体部高：4.1	（口径残 1/2未満）	
36	4	25	須恵器	坏蓋	体育館下SX01	天井部：曲面 口縁部：下外方に突出して接地する。外面に面をもつ 貼り付け輪状つまみ：頂部が平坦	ヘラ切りのちナデ　外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：16.4 器　高：3.1 体部高：2.5	（口径残 1/2未満）	
36	5	25	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：平面 口縁部：下方に折り曲げて接地。外面に凹面をもつ 宝珠つまみ：頂部が突出	外面：回転ヘラ削り、後回転ナデ、回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：14.3 器　高：2.4 体部高：1.5	（つまみ径残全）	

第21表　須恵器（坏蓋）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元根拠部位）	備　考
36	6	25	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：平面 口縁部：下方に突出して接地。外面に面をもつ 宝珠つまみ：頂部が突出	外面：回転ヘラ削り？、回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：10.6 器　高：2.3 体部高：1.6	（つまみ径残全）	
36	7	25	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：平面 口縁部：下方に突出して接地。外面に面をもつ 宝珠つまみ：頂部が平坦	ヘラ切り後一定方向ナデ 外面：回転ナデ 内面：回転ナデ後ナデ、回転ナデ	口　径：11.0 器　高：2.4 体部高：1.4	（口径残 1/2未満）	
36	8	25	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：平面 口縁部：下方に突出して接地する。外面に面をもつ	外面：ヘラ削り、回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：6.0 体部高：1.3	（口径残 1/2未満）	
36	9	25	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：平面 口縁部：下方に突出して接地。外面に面をもつ　宝珠つまみ：頂部が突出	外面：回転ナデ、回転ヘラ削り 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：12.2 器　高：2.9 体部高：2.1		
36	10	25	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：平面 口縁部：下方に突出して接地。外面に面をもたない 宝珠つまみ：頂部はほぼ平坦	外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：13.2 器　高：1.8 体部高：0.9	（つまみ径残全）	
36	11	25	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：平面 口縁部：下方に折り曲げて接地。外面に凹面をもつ 宝珠つまみ：頂部が平坦	外面：回転ヘラ削り、回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：13.8 器　高：2.2 体部高：1.3	1/2以上	
36	12	25	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：平面 口縁部：下方に突出して接地する。端部に面をもつ 宝珠つまみ：頂部が平坦	ヘラ切り？後回転ナデ 外面：回転ナデ後撫止ナデ、回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：13.4 器　高：2.3 体部高：1.9	（つまみ径残全）	
36	13	25	須恵器	坏蓋	体育館下SX01	天井部：平面 口縁部：下方に折り曲げ接地。外面に凹面をもつ 宝珠つまみ：頂部が平坦	ヘラ切り後ナデ　外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：14.9 器　高：2.6 体部高：1.7	（口径残 1/2未満）	
36	14	25	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：平面 口縁部：下方に突出して接地する。外面に面をもつ 宝珠つまみ：頂部が平坦	外面：回転ナデ、一部不定方向ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：14.1 器　高：2.0 体部高：1.5	（口径残 1/2未満）	
36	15	25	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：平面 口縁部：下方に突出して接地。外面に面をもつ 宝珠つまみ：頂部が突出	外面：回転ヘラ削り、後ナデ、回転ナデ 内面：一定方向ナデ回転ナデ	口　径：17.5 器　高：3.8 体部高：2.5	（つまみ径残全）	
36	16	26	須恵器	坏蓋	校庭下井戸	天井部：平面 口縁部：下方に折り曲げ、端部を外側につまみ出して接地。端部薄い	外面：回転ヘラ削り、細転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：14.5 器　高：2.7 体部高：2.2	（つまみ径 残1/2未満）	
36	17	26	須恵器	坏蓋	体育館下SX01	天井部：平面 口縁部：下方に折り曲げ接地。外面に面をもつ 貼り付け輪状つまみ：端部に面をもつ、中央部が突出する	外面：回転ナデ、回転ヘラ削り 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：17.3 器　高：3.9 体部高：3.3	完形	坏蓋セットで出土
36	18	26	須恵器	坏蓋	校庭下 ピット	天井部：平面 口縁部：下方に突出して接地。外面に面をもつ 輪状つまみ：端部に面をもつ	回転糸きり後回転ナデ 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：　17.5 器　高：最大 3.0 体部高：最大 2.7	1/2以上	
36	19	26	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：平面 口縁部：下方に突出して接地。外面に面をもつ	外面：回転ヘラ削り、回転ナデ 内面：回転ナデ	口　径：24.0 体部高：2.8	（口径残 1/2未満）	

第22表　須恵器（坏蓋）観察表

図版	No.	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法量（cm）	残存率 （復元根拠部位）	備考
36	20	26	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：平面 口縁部：下方に突出して接地。外面に面をもつ	ヘラ切り後回転ナデ 外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	口　径：26.0 体部高：2.2	(口径残 1/2以上)	
36	21	26	須恵器	坏蓋	体育館下	宝珠つまみ：頂部が平坦	回転ナデ	－	(つまみ径残全)	
36	22	26	須恵器	坏蓋	校庭下	口縁部：下方に突出して接地。外面に面をもつ	外面：回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	－	口縁部小片	
36	23	25	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：平面 口縁部：下方に突出して接地する。外面に凹面をもつ	ヘラ切り後回転ナデ 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：14.6 体部高：1.8	つまみを欠く	
36	24	25	須恵器	坏蓋	校庭下井戸	天井部：曲面 口縁部：端部を折り曲げて下外方に広がり接地。外面に凹面をもつ 宝珠つまみ：頂部はほぼ平坦	ヘラ切り？後粗いナデ 外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	口　径：14.2 器　高：2.9 体部高：2.0	(口径残 1/2未満)	
36	25	25	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：平面 口縁部：下方に突出して接地。外面に面をもつ 宝珠つまみ：頂部が突出	ヘラ切り後ナデ 外面：回転ナデ 内面：一定方向ナデ	口　径：14.4 器　高：3.1 体部高：2.1	(口径残 1/2未満)	
36	26	25	須恵器	坏蓋	校庭下井戸	天井部：平面 口縁部：下方に突出して接地。外面に面をもたない 宝珠つまみ：頂部が平坦	ヘラ切り後ナデ 外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	口　径：14.6 器　高：2.4 体部高：1.5	(つまみ径残全)	
36	27	25	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：平面 口縁部：下方に突出して接地。外面に面をもつ 宝珠つまみ：頂部が平坦	ヘラ切り後ナデ 外面：回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：16.5 器　高：2.5 体部高：2.0	1/2以上	
36	28	25	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：曲面 口縁部：下方に突出して接地。外面に面をもつ 宝珠つまみ：頂部が平坦	ヘラ切り後ナデ 外面：ヘラ記号？/回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：14.7 器　高：2.0 体部高：1.1	(口径残 1/2未満)	
36	29	26	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：平面、扁平 口縁部：端部を折り曲げ外方にひろがり接地。 宝珠つまみ：頂部が突出	外面：回転ナデ 内面：粘土紐巻痕、回転ナデ	口　径：16.4 器　高：1.6 体部高：0.8	完形	
36	30	26	須恵器	坏蓋	校庭下	天井部：平面、扁平 口縁部：端部を折り曲げ外方にひろがり接地。 宝珠つまみ：頂部はほぼ平坦	外面：回転ナデ、後ナデ、一部平行線文状の圧痕 内面：回転ナデ、後ナデ	口　径：19.3 器　高：1.7 体部高：0.8	(口径残 1/2未満)	
36	31	26	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：平面 口縁部：端部を下方に短く折り曲げ接地する 宝珠つまみ：頂部が平坦	ヘラ切り？のち無調整 外面：回転ナデ 内面：不定方向のナデ、回転ナデ	口　径：18.4 器　高：1.6 体部高：1.0	1/2以上	
36	32	26	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：凹面 口縁部：下外方に折り曲げる 宝珠つまみ：頂部が平坦	外面：回転ナデ、後ナデ 内面：回転ナデ、後ナデ	口　径：17.2 器　高：1.9 体部高：1.3	1/2以上	
36	33	26	須恵器	坏蓋	体育館下	天井部：凹面 口縁部：下外方へ突出する。外面に面をもつ 宝珠つまみ：頂部が平坦	ヘラ切り後ナデ 外面：回転ナデ 内面：磨耗、回転ナデ	口　径：19.8 器　高：2.3 体部高：2.1	1/2以上	

第23表　須恵器（坏身）観察表

図版	No	写真図版	種別	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元根拠部位）	備　考
37	1	28	須恵器	坏身	体育館下	高台なし　底部：曲面　体部：内湾 口縁部：外側に折り曲げる	底面：回転ヘラ削り 外面：回転ヘラ削り、後回転ナデ 内面：回転ナデ	－	口縁部小片	
37	2	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面　体部：屈曲点をもち内湾　口縁部：端部を外方に折り曲げる	底面：静止糸切り 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：13.0 器　高：3.8 底　径：7.2	（口径残 1/2未満）	
37	3	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面　体部：屈曲点をもち内湾　口縁部：外方に折り曲げる	底面：回転糸切り、後ナデ 外面：ナデ上げ、回転ナデ内面：不定方向ナデ、回転ナデ　口縁部 内面：浅い沈線状のナデによるアクセントを持つ	口　径：12.0 器　高：4.7 底　径：4.0	（底径残 1/2未満）	
37	4	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面/体部：内湾、途中にくびれを有す　口縁部：上方にのびる、端部で外反、端部に銳、内傾する面をもつ	底面：回転糸切り、一部平行線文状の圧痕 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：12.6 器　高：3.8 底　径：9.2	（底径残 1/2未満）	
37	5	28	須恵器	坏身	校庭下	口縁部：上方にのびる、端部を外側に折り曲げる	内外面：回転ナデ	口　径：13.2	（口径残 1/2未満）	
37	6	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面/体部：内湾 口縁部：緩やかに外反	底面：回転糸切り 外面：ナデ上げ、回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：11.0 器　高：3.9 底　径：6.9	（底径残 1/2未満）	
37	7	28	須恵器	坏身	体育館下	高台なし　底部：平面　体部：緩やかに外傾 口縁部：屈曲して内傾、端部をかるく外方に折る	底面：回転糸切り 外面：回転ナデ 内面：回転ナデ/格子状のヘラ記号	口　径：12.8 器　高：4.3 底　径：9.2	（底径残 1/2以上）	
37	8	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面/体部：内湾 口縁部：わずかに内湾、端部を軽く外側に折る	底面：回転糸切り 外面：ナデ上げ、回転ナデ内面：一定方向ナデ、回転ナデ 口縁部外面：一条沈線	口　径：12.4 器　高：4.3 底　径：8.2	（底径残 1/2以上）	
37	9	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面/体部：内湾 口縁部：端部を外方に折り曲げる	底面：回転糸切り 外面：回転ナデ 内面：磨耗、回転ナデ 口縁部外面：沈線状	口　径：11.8 器　高：4.2 底　径：7.2	1/2以上	
37	10	28	須恵器	坏身	校庭下	底部を欠く　体部：内湾 口縁部：つまんでわずかに外傾させる	内外面：回転ナデ	口　径：13.9	（口径残 1/2未満）	
37	11	28	須恵器	坏身	体育館下	高台なし　底部：平面　体部：内湾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：静止糸切り 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：13.0 器　高：4.1 底　径：8.8	1/2以上	
37	12	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面/体部：内湾 口縁部：内傾、端部に内傾する面をもつ	底面：回転糸切り、後ナデ 外面：回転ナデ 内面：磨耗、回転ナデ	口　径：13.0 器　高：3.9 底　径：10.0	（底径残 1/2未満）	
37	13	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面/体部：内湾 口縁部：内湾、端部を軽く外側に折る	底面：回転糸切り 外面：回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ 口縁部外面：一条沈線	口　径：12.3 器　高：4.0 底　径：9.4	（底径残 1/2未満）	

第24表　須恵器（坏身）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元限界部位）	備　考
37	14	28	須恵器	坏身	体育館下	高台なし　底部：平面/体部：ゆるやかに外傾 口縁部：上方にのびる、端部をかるく外方に折る	底面：回転糸切り 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：11.1 器　高：4.1 底　径：7.6	完形	
37	15	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部/平面/体部：内湾 口縁部：上方にのびる、端部に内傾する面を持つ	底面：回転糸切り 外面：ナデ上げ、回転ナデ 内面：回転ナデ	口　径：10.6 器　高：3.9 底　径：6.0	（底径残 1/2未満）	
37	16	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面/体部：内湾 口縁部：上方にのびる、端部に内傾する面をもつ	底面：回転糸切り、後ナデ 外面：不定方向ナデ、回転ナデ 内面：磨耗（不定方向ナデ）、回転ナデ	口　径：11.8 器　高：4.5 底　径：7.6	（底径残 1/2以上）	
37	17	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面　体部：直線的に外傾、口縁部との境に屈曲点　口縁部：上方にのびる、端部に内傾する面をもつ	底面：回転糸切り 外面：ナデツケ、回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：11.4 器　高：4.0 底　径：8.4	（底径残 1/2未満）	
37	18	28	須恵器	坏身	体育館下 ピット	高台なし　底部：平面/体部：内湾 口縁部：上方にのびる、内傾する面をもつ、端部に稜をもたない	底面：回転糸切り 内外面：回転ナデ	口　径：11.9 体部高：4.3 底　径：8.2	（口径残 1/2未満）	
37	19	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面　体部：内湾、途中にくびれを有す　口縁部：上方にのびる、端部に内傾する面をもつ	底面：回転糸切り、後ナデ 外面：ナデツケ、回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：12.4 器　高：4.0 底　径：8.3	（底径残 1/2未満）	
37	20	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面/体部：内湾、途中にくびれを有す　口縁部：内傾する、端部で上方にのびる、端部に稜、内傾する面をもつ	底面：回転糸切り 外面：ナデツケ、回転ナデ内面：磨耗、回転ナデ口縁部 内面：浅い沈線状のナデによるアクセントをもつ	口　径：10.8 器　高：4.3 底　径：7.6	（底径残 1/2以上）	
38	1	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面/体部：内湾 口縁部：内傾する、端部に稜をもち内側が肥厚する	底面：回転糸切り、後ナデ 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：11.4 器　高：3.9 底　径：7.6	（底径残 1/2以上）	
38	2	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面/体部：内湾 口縁部：上方にのびる、端部薄く仕上げる	底面：回転糸切り 外面：不定方向ナデ、回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：11.7 器　高：4.2 底　径：8.0	（底径残 1/2未満）	
38	3	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面/体部：内湾 口縁部：内傾する、端部に内傾する面をもつ	底面：回転糸切り 外面：回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：11.0 器　高：3.9 底　径：7.2	（底径残 1/2以上）	
38	4	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面/体部：内湾 口縁部：上方にのびる、端部に稜・面を持たない、内傾する面をもつ	底面：回転糸切り 外面：ナデ上げ、回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：11.2 器　高：4.1 底　径：8.0	（底径残 1/2未満）	
38	5	28	須恵器	坏身	体育館下 ピット	高台なし　底部：平面/体部：内湾 口縁部：上方にのびる、内傾する面をもつ、端部に稜をもたない	底面：回転糸切り 内外面：回転ナデ	口　径：11.5 器　高：4.4 底　径：9.8	（底径残 1/2以上）	
38	6	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面/体部：内湾 口縁部：上方にのびる、端部内面が肥厚する	底面：回転糸切り 外面：ナデ上げ、回転ヘラ削り？後回転ナデ、回転ナデ/ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：9.2 器　高：4.4 底　径：8.0	（底径残 1/2未満）	

第25表　須恵器（坏身）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元状況部位）	備　考
38	7	27	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面	底面：回転糸切り 内外面：回転ナデ	底　径：6.3	（底径残 1/2以上）	
38	8	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面/体部：内湾 口縁部：外反	底面：回転糸切り 外面：回転ヘラ削り？のちナデ、指頭圧痕、回転ナデ 内面：磨耗、回転ナデ	口　径：16.0 器　高：2.1 底　径：12.0	（底径残 1/2未満）	
38	9	28	須恵器	Ⅲ	校庭下	高台なし　底部：平面　体部：緩やかな外反 口縁部：端部に面を持たない	底面：回転糸切り 外面：底面からナデ上げ、回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：13.8 器　高：2.2 底　径：10.0	（口径残 1/2未満）	
38	10	28	須恵器	Ⅲ	校庭下集石	高台なし 底部：平面　体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面を持たない	底面：回転糸切り 外面：底面からナデ上げ、回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：13.2 器　高：2.1 底　径：8.9	（1/4残 1/2未満）	
38	11	28	須恵器	坏身	校庭下井戸	高台なし　底部：平面/体部：外傾 口縁部：外反、端部に面・稜をもたない	底面：回転糸切り 外面：ナデ上げ、回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：13.0 器　高：2.6 底　径：9.8	（口径残 1/2未満）	
38	12	28	須恵器	Ⅲ	校庭下	高台なし　底部：平面　体部：直線的に外傾する 口縁部：わずかに外反、面・稜もたない	底面：回転糸切り 外面：ナデツケ、ナデ、回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：14.4 器　高：3.0 底　径：9.2	1/2以上	
38	13	28	須恵器	Ⅲ	体育館下	高台なし　底部：平面　体部：外反 口縁部：外方に広がる、端部に面・稜をもたない	底面：回転糸切り 外面：ナデツケ、回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：13.4 器　高：2.5 底　径：11.5	完形	
38	14	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし 底部：平面　体部：直線的に外傾 口縁部：端部薄く仕上げる	底面：回転糸切り 外面：ナデツケ、回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ 口縁部外側：浅い沈線状のナデによるアクセントを持つ	口　径：7.7 器　高：3.7 底　径：11.2	（底径残 1/2未満）	
38	15	29	須恵器	坏身	第2トレンチ	高台：中央よりにつく、ハの字にひらく、接地面は外傾する　底部：平面/体部：外傾　口縁部：外上方にひらく、端部に面・稜をもたない	底面：回転糸切りのちナデ 外面：回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ 口縁部外面：一条沈線	口　径：19.5 体部高：2.6 器　高：3.9 高台径：10.0	1/2以上	
38	16	29	須恵器	坏身	校庭下	高台：内寄りにつく、ハの字にひらく、端部に面をもたない　底部：平面　体部：直線的に外傾　口縁部：面・稜をもたない	底面：回転糸切り、後ナデ 外面：回転ナデ 内外面：回転ナデ	口　径：20.0 体部高：2.8 器　高：3.6 高台径：14.9	1/2以上	
38	17	29	須恵器	坏身	校庭下	高台：内寄りにつく、ハの字にひらく、接地面は水平/底部：平面　体部：直線的に外傾　口縁部：端部外面に面をもつ	底面：回転糸切り 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ 口縁部外面：工具による回転ナデ	口　径：17.2 体部高：3.0 器　高：3.8 高台径：12.1	1/2以上	
38	18	29	須恵器	坏身	校庭下 ピット	高台：中央寄りにつく、直立する、接地面は水平　底部：平面/体部：外傾 口縁部：面・稜をもたない	底面：回転糸切り 外面：回転ヘラ削り、回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：19.6 体部高：2.5 器　高：3.5 高台径：12.8	（高台径残 1/2未満）	

第26表　須恵器（坏身）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元板挿部位）	備　考
38	19	29	須恵器	坏身	校庭下	高台：内寄りにつく、接地面は水平、厚・端部形態不均一　体部：内湾　口縁部：外反	底面：回転糸切り、後ナデ 外面：回転ナデ 内面：磨耗、回転ナデ	口　径：17.8 体部高：2.5 器　高：3.7 高台径：12.0	（高台径残1/2以上）	
38	20	29	須恵器	坏身	校庭下	高台：外周沿いにつく、直立する、接地面はほぼ水平　底部：平面　体部：直線的に外傾　口縁部：面・稜もたない	底面：回転ヘラ削り 外面：回転ナデ 内面：磨耗著しい、回転ナデ	口　径：14.6 体部高：2.0 器　高：2.5 高台径：12.0	（高台径残1/2未満）	
38	21	29	須恵器	坏身	校庭下	高台：外周沿いにつく、接地面は水平　底部：平面　体部：直線的に外傾　口縁部：面・稜をもたない	底面：回転糸切り 外面：回転ナデ 内面：磨耗、回転ナデ	口　径：16.9 体部高：1.8 器　高：2.5 高台径：14.2	（高台径残1/2未満）	火だすき
39	1	27	須恵器	坏身	体育館下	高台：内寄りにつく、ハの字にひらく、接地面は外傾する／底部：曲面体部：ゆるやかに外傾　口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：回転糸切り、後ナデ 外面：自然釉（回転ナデ） 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：16.6 体部高：4.7 器　高：5.3 高台径：10.0	1/2以上	
39	2	27	須恵器	坏身	校庭下	高台：中央よりにつく、ハの字にひらく、端部に面をもたない　底部を欠く／体部：内湾　口縁部：面・稜をもたない	底面：不明 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：14.4 体部高：4.4 器　高：5.0 高台径：7.3	（高台径残1/2未満）	
39	3	27	須恵器	坏身	体育館下	高台：内寄りにつく、ハの字にひらく、接地面は外傾する　底部：平面　体部：内湾　口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：静止糸切り 外面：自然釉（回転ナデ？） 内面：磨耗で平滑、回転ナデ	口　径：14.0 体部高：4.1 器　高：4.9 高台径：9.0	（高台径残全）	
39	4	27	須恵器	坏身	校庭下	高台：内寄りにつく、ハの字にひらく、接地面は外傾気味　底部：平面　体部：内湾　口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：静止糸切り 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：14.2 体部高：3.8 器　高：4.7 高台径：8.6	1/2以上	
39	5	27	須恵器	坏身	体育館下	高台：中央寄りにつく、ハの字にひらく、接地面は外傾する　底部：平面　体部：内湾　口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：静止糸切り 外面：回転ヘラ削り？後回転ナデ、回転ナデ 内面：磨耗で平滑、回転ナデ	口　径：16.0 体部高：4.1 器　高：5.3 高台径：9.5	1/2以上	
39	6	28	須恵器	坏身	校庭下	高台：外周沿いにつく、ハの字にふんばる、接地面は面取をもち水平　底部：平面　体部：直線的に外傾　口縁部：面・稜をもたない	底面：回転糸切り、後ナデ 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：17.0 体部高：6.0 器　高：6.5 高台径：11.1	1/2以上	
39	7	27	須恵器	坏身	校庭下	高台：外周沿いにつく、ハの字にひらく、接地面は内傾　底部：平面　体部：直線的に外傾　口縁部：面・稜をもたない	底面：不明 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：15.0 体部高：5.8 器　高：6.4 高台径：10.2	（高台径残1/2未満）	
39	8	28	須恵器	坏身	校庭下	高台：外周沿いにつく、直立する、接地面は水平　底部：平面　体部：直線的に外傾　口縁部：面・稜もたない	底面：回転糸切り 外面：回転ナデ 内面：磨耗著しい、回転ナデ	口　径：16.0 体部高：6.0 器　高：6.4 高台径：11.2	（高台径残1/2以上）	

第27表　須恵器（坏身）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元数値部位）	備　考
39	9	27	須恵器	坏身	校庭下	高台：中央よりにつく、接地面は外傾する 底部：平面	底面：静止糸切り 外面：回転ナデ/ 内面：放射状ナデ、回転ナデ	高台径：9.0	（高台径残 1/2未満）	
39	10	27	須恵器	坏身	校庭下	高台：中央よりにつく、ハの字にひらく、接地面は外傾気味　底部：平面	底面：静止糸切り 面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ	高台径：9.0	（高台径残 1/2以上）	
39	11	27	須恵器	坏身	校庭下	高台：中央よりにつく、ハの字にふんばる、接地面は外傾気味底部：平面？　体部：内湾 口縁部：角度をつけておし広げる、端部上方にのびる	内外面：回転ナデ	口　径：14.2 部　高：3.8 器　高：4.8 高台径：9.3	（高台径残 1/2未満）	
39	12	27	須恵器	坏身	校庭下井戸	高台：内寄りにつく、ハの字にひらく、端部に面・稜をもたない　底部：平面　体部：内湾	底面：不明 外面：回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	高台径：7.4	（高台径残 1/2未満）	
39	13	27	須恵器	坏身	校庭下	高台：中央寄りにつく、ハの字に大きくひらく、端部に面をもたない　底部：平面	底面：回転ナデ 外面：回転ナデ/ 内面：ナデ	高台径：7.7	（高台径残 1/2以上）	
39	14	27	須恵器	坏身	校庭下	高台：中央寄りにつく、ハの字にひらく、接地面は外傾気味/底部：平面	底面：回転糸切り 外面：回転ヘラ削り、後回転ナデ 内面：磨耗、回転ナデ	高台径：8.8	（高台径残 1/2未満）	
39	15	28	須恵器	坏身	校庭下	高台：低い、外周沿いにつく、ハの字にひらく、四面をもつ接地面はほぼ水平　底部：平面 体部：直線的に外傾	底面：回転糸切り 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、沈線、回転ナデ	高台径：11.4	（高台径残 1/2未満）	
39	16	28	須恵器	坏身	校庭下井戸	高台：低く、外周沿いにつく、接地面は水平 底部：平面	底面：回転糸切り 外面：自然釉（回転ナデ？） 内面：放射線状にナデ、回転ナデ	高台径：10.8	（高台径残 1/2未満）	
39	17	27	須恵器	坏身	体育館下	高台：内寄りにつく、ハの字にひらく、端部に面をもたない/底部：平面　体部：ゆるやかに外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない、外面に沈線状のアクセントをもつ	底面：静止糸切り、後ナデ／ 内外面：回転ナデ	口　径：10.0 体部高：3.5 器　高：4.2 高台径：5.9	1/2以上	
39	18	28	須恵器	坏身	体育館下	高台：外周沿いにつく、ハの字にひらく、接地面は外傾する/底部：平面　体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：静止糸切り外面：回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：11.6 体部高：3.6 器　高：4.1 高台径：8.3	（口径残 1/2未満）	
39	19	28	須恵器	坏身	体育館ドピット	高台：外周沿いにつく、ハの字にひらく、接地面は外傾する 底部：平面　体部：直線的に外傾　口縁部：面・稜をもたない	底面：糸切り 内外面：回転ナデ	口　径：12.2 体部高：3.4 器　高：3.8 高台径：8.8	（高台径残 1/2未満）	
39	20	27	須恵器	坏身	校庭下	高台：外周沿いにつく、接地面は水平 底部：平面　体部：直線的に外傾　口縁部：面・稜をもたない	内外面：回転ナデ	口　径：11.8 体部高：4.4 器　高：4.8 高台径：9.3	（高台径残 1/2未満）	

第28表　須恵器（坏身）観察表

図版	No.	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元接合部位）	備　考
39	21	28	須恵器	坏身	校庭下	高台：外周沿いにつく、接地面は水平　底部：平面　体部：直線的に外傾　口縁部：端部かすかに稜	底面：回転糸切り、後ナデ、指頭圧痕 外面：回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：12.1 体部高：4.2 器　高：4.7 高台径：8.8	1/2以上	
39	22	－	須恵器	坏身	校庭下	高台：外周沿いにつく、接地面は水平　底部：平面 体部：直線的に外傾　口縁部：わずかに外反	底面：回転糸切り外周：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：11.8 体部高：3.5 器　高：4.0 高台径：8.4	1/2以上	
39	23	28	須恵器	坏身	校庭下井戸	高台：外周沿いにつき、ハの字にふんばる、接地面は外傾する　底部：平面　体部：直線的に外傾する　口縁部：稜・面をもたない	底面：回転糸切り、後ナデ 外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	口　径：11.9 体部高：3.4 器　高：4.2 高台径：10.5	1/2以上	
39	24	28	須恵器	坏身	校庭下	高台：外側沿いにつく、接地面は内傾　底部：平面　体部：直線的に外傾　口縁部：面・稜をもたない	底面：回転糸切り 内外面：回転ナデ	口　径：10.5 体部高：3.4 器　高：3.8 高台径：8.4	1/2以上	
40	1	27	須恵器	坏身	体育館下	高台：内寄りにつく、ハの字にひらく、端部に面・稜をもたない　底部：平面　体部：内湾　口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：ヘラ切り、後回転ナデ、一定方向ナデ 外面：回転ナデ 内面：磨耗で平滑、回転ナデ	口　径：12.4 体部高：4.0 器　高：4.9 高台径：8.5	1/2以上	
40	2	－	須恵器	高台付坏	校庭下	高台：外周沿いにつき、直立する、接地面は内傾　底部：平面　体部：直線的に外傾　口縁部：ゆるやかに外反、端部に面・稜をもたない	底面：ヘラ切り 外面：回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：11.4 体部高：4.4 器　高：4.9 高台径：7.9	1/2以上	
40	3	27	須恵器	坏身	校庭下	高台：外周沿いにつく　底部：平面 体部：直線的に外傾　口縁部：面・稜をもたない	底面：ヘラ切り、後ナデ 外面：回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：12.8 体部高：4.2 器　高：4.7 高台径：8.4	（高台径残1/2未満）	
40	4	27	須恵器	坏身	校庭下	高台：外周沿いにつく、接地面は内傾 底部：平面	底面：ヘラ切り、後ナデ 外面：回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	高台径：8.9	（高台径残1/2未満）	
40	5	27	須恵器	坏身	校庭下	高台：外周沿いにつく	底面：ヘラ切り、後ナデ 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	高台径：10.7	（高台径残全）	
40	6	27	須恵器	坏身	校庭下井戸	高台：低く外周沿いにつく、凹面をもつ接地面は水平　底部：平面	底面：ヘラ切り後ナデ 外面：回転ナデ 内面：磨耗、回転ナデ	高台径：13.1	（高台径残1/2未満）	
40	7	26	須恵器	坏身	体育館下SX01	高台：外周沿いにつく、接地面は内傾する 底部：平面 体部：直線的に外傾　口縁部：わずかに外反、端部に面・稜をもたない	底面：ヘラ切り、後回転ナデ 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：16.6 体部高：5.4 器　高：6.0 高台径：10.5	1/2以上	
40	8	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし　底部：平面体部：直線的に外傾 口縁部：薄く、端部に面をもたない、わずかに外反	底面：ヘラ切り、後ナデ、一部平行線文状の圧痕（縄目？） 外面：底面からナデ上げ、回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：12.3 器　高：4.5 底　径：9.0	1/2以上	

第29表　須恵器（坏身）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元据換部位）	備　考
40	9	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし 底部：平面　体部：直線的に外傾 口縁部：薄く、端部に面をもたない	底面：ヘラ切り、後ヘラ状工具による不定方向のナデツケ、一部平行線文状の圧痕 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：13.1 器　高：4.7 底　径：9.1	1/2以上	
40	10	28	須恵器	坏身	校庭下	高台なし 底部：平面（安定を欠く）体部：直線的に外傾する 口縁部：わずかに外方にひらく、面・稜もたない	底面：ヘラ切り、後回転ナデ 外面：回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：12.8 器　高：4.4 底　径：10.3	1/2以上	
40	11	28	須恵器	皿	校庭下	高台なし 底部：平面 体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面を持たない	底面：ヘラ切り？後回転ナデ、一部平行線文状の圧痕 外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、後不定方向ナデ	口　径：14.5 器　高：1.9 底　径：12.3	（口径残 1/2未満）	内外面火だすき
40	12	28	須恵器	皿	校庭下	高台なし 底部：平面 体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面を持たない	底面：ヘラ切り、後ナデ、一部平行線文状の圧痕 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：14.4 器　高：2.0 底　径：12.5	（口径残 1/2未満）	内外面火だすき
40	13	28	須恵器	皿	体育館下	高台なし 底部：平面 体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：ヘラ切りのちナデ 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ（磨耗で平滑）、回転ナデ	口　径：14.7 器　高：2.9 底　径：11.9	完形	内外面火だすき
40	14	29	須恵器	皿	校庭下井戸	高台：外周沿いにつく、接地面は内傾 底部：平面　体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面をもつ	底面：ヘラ切り、後回転ナデ、平行線文状の圧痕 内外面：回転ナデ	口　径：17.5 体部高：2.0 器　高：2.6 高台径：14.1	1/2以上	
40	15	29	須恵器	坏身	校庭下	高台：外周沿いにつく、直立する、接地面はほぼ水平　底部：平面　体部：直線的に外傾 口縁部：内面に一条沈線、端部に面をもつ	底面：ヘラ切り、後ナデ 外面：回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ、一条沈線	口　径：16.0 体部高：2.7 器　高：3.7 高台径：11.0	（口径残 1/2未満）	
40	16	29	須恵器	坏身	校庭下	高台：内寄りにつく、直立する、接地面は凹面をもち内傾する　底部：平面　体部：直線的に外傾　口縁部：面・稜をもたない	底面：ヘラ切り、後ナデ 外面：回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：18.0 体部高：2.3 器　高：3.0 高台径：12.9	1/2以上	
40	17	29	須恵器	坏身	校庭下	高台:内寄りにつく、直立する、接地面は水平、厚み不均一　底部：平面　体部：直線的に外傾　口縁部：外反、端部に面・稜をもたない	底面：ヘラ切り、後ナデ 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：19.1 体部高：2.7 器　高：3.5 高台径：14.4	1/2以上	
40	18	29	須恵器	坏身	校庭下	高台：外周沿いにつく、接地面は内傾 底部：平面	底面：ヘラ切り,後ナデ 外面：回転ナデ/ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	高台径：13.5	（高台径残 1/2未満）	火だすき
40	19	29	須恵器	坏身	校庭下井戸	高台：低く外周沿いにつく、接地面は内傾する 底部：平面　体部：直線的に外傾する 口縁部：緩やかに外方にひらく	底面：ヘラ切り、後ナデ、一部平行線文状の圧痕 外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	口　径：17.8 器　高：3.0 体部高：2.5	（高台径 1/2以上）	内外面： 火だすき
40	20	29	須恵器	坏身	体育館下	高台：内寄りにつく、内傾する、接地面も内傾 底部：平面　体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない、外面に肥厚	底面：ヘラ切り、後ヘラナデ 外面：回転ナデ 内面：一定方向ナデ、回転ナデ	口　径：17.8 体部高：2.9 器　高：3.1 高台径：13.0	1/2以上	

第30表　須恵器（高坏）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態・文様の特徴	調　整	法　量（cm）	残存率（復元根拠部位）	備　考
41	1	30	須恵器	高坏	校庭下	坏部：平坦で横にひらく	坏部内面：不定方向ナデ 坏部外面：回転ヘラ削り 脚部内面：回転ナデ	－	（脚部径残全）	
41	2	30	須恵器	高坏	校庭下	脚部：二方向に切れ目状の透孔／一条沈線	坏部内面：不定方向ナデ 坏部外面：回転ナデ 脚部内面：回転ナデ	－	（脚部径残全）	
41	3	30	須恵器	高坏	校庭下	残存部位に透孔一箇所	坏部内面：回転ナデ 坏部外面：厚く自然釉がかかり判然とせず 脚部内面：厚く自然釉がかかる	－	坏部小片	内面にすす付着、脚部内面、透孔内部に厚く自然釉がかかることから別の器種の可能性もある
41	4	30	須恵器	高坏	校庭下	坏部内面：凹面	坏部内面：磨耗 脚部内外面：回転ナデ	－	（脚部径残全）	
41	5	30	須恵器	高坏	校庭下	坏部内面：凹面	坏部内面：磨耗 脚部内外面：回転ナデ	－	（脚部径残全）	
41	6	30	須恵器	高坏	校庭下	脚部：二方向に切れ目状の透孔／一条沈線	坏部内面：不定方向ナデ 脚部内外面：回転ナデ	－	（脚部径残1／2以上）	
41	7	30	須恵器	高坏	体育館下	脚部：二方向に透孔二段（上段）切れ目状の透孔／一条沈線（下段）形状不明透孔／一条沈線	坏部内面：不定方向ナデ 脚部内外面：回転ナデ	－	（脚部径残全）	
41	8	30	須恵器	高坏	校庭下	坏部内面：平坦	坏部内面：一定方向ナデ 脚部内外面：回転ナデ	－	（脚部径残1／2以上）	
41	9	30	須恵器	高坏	校庭下	坏部内面：平坦	坏部内面：一定方向ナデ 脚部内外面：回転ナデ	－	（脚部径残1／2以上）	
41	10	30	須恵器	高坏	校庭下	脚部：端部を下方につまみ出す、透かし、沈線をもたない	脚部内外面：回転ナデ	－	（脚部径残1／2未満）	
41	11	30	須恵器	高坏	体育館下	脚部：端部を下方につまみ出す、透かし、沈線をもたない、一方向に斜位の切れ目状透孔	脚部内外面：回転ナデ	脚部径：10.2	（脚部径残1／2未満）	
41	12	30	須恵器	高坏	校庭下	脚部：端部に直立する面をもつ	脚部内外面：回転ナデ	脚部径：10.5	（脚部径残1／2未満）	
41	13	30	須恵器	高坏	校庭下井戸	坏部内面：竹管文	脚部内外面：回転ナデ	－	（脚部内径残1／2未満）	
41	14	30	須恵器	高坏	体育館下	坏部内面：竹管文 脚部：二方向に切れ目状透孔	坏部内面：磨耗著しく判然とせず 脚部内外面：回転ナデ	－	（脚部径残全）	
41	15	30	須恵器	高坏	校庭下	坏部内面：竹管文 脚部：二方向に切れ目状透孔	脚部内外面：回転ナデ	－	（脚部径残全）	
41	16	30	須恵器	高坏	校庭下	坏部外面：ヘラ記号 脚部：二方向に切れ目状透孔	脚部内外面：回転ナデ	－	（脚部径残全）	
41	17	30	須恵器	高坏	校庭下	坏部外面：ヘラ記号 脚部：二方向に斜位の切れ目状透孔	坏部内面：不定方向ナデ 脚部内外面：回転ナデ	脚部径：9.2	1／2以上	

第31表　須恵器（甑・壺類）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態・文様の特徴	調　整	法　量（cm）	残存率（復元模測部位）	備　考
41	18	31	須恵器	甑	校庭下	口縁部：くびれた頸部から屈曲して外上方にひらく	内外面：回転ナデ	口縁部径：9.0	（口径残1/2未満）	
41	19	31	須恵器	壺	体育館下	高台：低い、つよく外傾にひらく	内外面：回転ナデ　高台内部：ナデ	－	体部小片	
41	20	31	須恵器	甑	校庭下井戸	口縁部：くびれた頸部から屈曲して外上方にひらく	底部：糸切り 体部外面：（下半）回転ヘラ削り、後回転ナデ 体部内面：回転ナデ 頸部・口縁部内外面：回転ナデ	底　径：5.6	（頸部径残全）	
41	21	31	須恵器	甑または壺	第2トレンチ		底部：回転ヘラ削り 体部外面：（下半）回転ヘラ削り、回転ナデ 体部内面：回転ナデ	底　径：5.0	（底径残1/2以上）	
41	22	31	須恵器	壺	体育館下	肩部が張る	外面：回転ナデ、指頭圧痕、横ナデ 内面：回転ナデ	－	1/2以上	
41	23	31	須恵器	甑または壺	体育館下	肩部が張る	底部：回転ナデ 内外面：回転ナデ	底　径：6.0	（底部径残1/2未満）	
41	24	31	須恵器	甑	体育館下	口縁部：くびれた頸部から屈曲して外上方にひらく 体部外面：ヘラ記号	底部：回転糸切り 体部外面：回転ナデ、回転ヘラ削り 体部内面：回転ナデ	底　径：5.4	1/2以上	
42	1	34	須恵器	短頸壺蓋	体育館下	平坦な天井部をもち、折り曲げて下方にのびて接地する。口縁端部は面をもたない	内外面：回転ナデ（天井部外面に自然釉がかかる）	口　径：14.4	（口径残1/2未満）	
42	2	34	須恵器	短頸壺蓋	体育館下	宝珠つまみ、平坦な天井部をもち、折り曲げて下方にのびて接地する。口縁端部は面をもたない	外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：17.7	1/2以上	
42	3	34	須恵器	短頸壺	校庭下	口縁端部に丸みを帯びた面をもつ	内外面：回転ナデ	口　径：11.3	（口径残1/2未満）	
42	4	34	須恵器	短頸壺	体育館下	口縁端部に面・稜をもたない	内外面：回転ナデ	－	口縁部小片	
42	5	34	須恵器	短頸壺	校庭下	口縁端部に面・稜をもたない	内外面：回転ナデ	口　径：10.9	（口径残1/3未満）	
42	6	34	須恵器	壺	校庭下	頸部・口縁部：ゆるやかに外反、端部外縁に面をもつ	内外面：回転ナデ	口　径：10.5	（口径残1/2以上）	
42	7	34	須恵器	壺	校庭下井戸	頸部・口縁部：直線的に外傾してたちあがり、端部で外側に折れる、端部に面をもつ	内外面：回転ナデ	口　径：10.0	（頸部径残全）	
42	8	34	須恵器	壺	校庭下	頸部・口縁部：ゆるやかに外反、端部を上方につまみ、端部外縁に面をもつ	内外面：回転ナデ	口　径：10.2	（頸部径残1/2以上）	
42	9	34	須恵器	平瓶	体育館下		外面：上面に自然釉、回転ヘラ削り、回転ナデ 内面：回転ナデ、接続部に指オサエ	－	1/2未満	把手の端部を挽成後に欠損しているが、破面の凹凸を平滑にしている。使用痕であるのか、重正によるものか不明
42	10	34	須恵器	壺	校庭下井戸	高台：ハの字状にひらく、接地面はほぼ水平	内外面：回転ナデ 底部内面：指オサエ、回転ナデ	高台径：11.4	（体部径残1/2未満）	
42	11	34	須恵器	壺	体育館下1層	高台：直立する、接地面は水平	底面：回転糸切り 外面：回転ナデ、9条/1cmの回転クシ目	高台径：8.7	（高台径残1/2以上）	

第32表　須恵器（甑・壺類）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態・文様の特徴	調　整	法　量 (cm)	残存率 (復元模測部位)	備　考
42	12	34	須恵器	壺	校庭下井戸	高台：なし 底面：平坦	内面：連続した斜位のナデ 底部内面：連続した放射状のナデツケ 底面：不定方向のナデツケ	底　径：12.8	(底径残1/2以上)	胎土：黄灰色
42	13	34	須恵器	壺	校庭下	高台：わずかにハの字にひらく、接地面は外傾、凹面をもつ/底面に静止糸切り痕/肩を大きく張り出し、稜をもつ/頸部：基部径大きく、外反して上方にひらく	底面：静止糸切り	高台径：8.8 体部最大径：16.2	1/2以上	体部下半に別個体が溶着
42	14	34	須恵器	壺	校庭下	底面：外周を強くナデ高台状の凸面をつくり出す/肩部：丸い/頸部：基部径小さく短く直立する、端部に面をもつ	底面：静止糸切り	底　径：7.3 体部最大径：10.0 口　径：2.2 器　高：11.2	1/2以上	
42	15	34	須恵器	壺	体育館下	高台：ハの字にひらく	底面内部：連続した横位のケズリ	底　径：11.6	(底径1/2未満)	

第33表　須恵器（甕・横瓶）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量 (cm)	残存率 (復元模測部位)	備　考
43	1	31	須恵器	甕	体育館下	口縁部：直線的に外傾して立ちあがる、端部外縁に面をもつ	口縁部外面：波状文、3条沈線、破状文、2条沈線 口縁部内外面：回転ナデ 体部外面：平行文タタキ目 体部内面：同心円文タタキ目	口　径：40.0	(口径残1/2未満)	
43	2	31	須恵器	甕	体育館下	口縁部：直線的に外傾して立ちあがる、端部外縁に面をもつ	口縁部外面：波状文、一条沈線、波状文、一条沈線、波状文、一条沈線 口縁部内外面：回転ナデ	—	口縁部小片	
43	3	31	須恵器	甕	校庭下	口縁部：直線的に外傾して立ちあがる、端部外縁に面をもつ	口縁部外面：横位のハケ目後、1条沈線、波状文、1条沈線、波状文 口縁部内外面：回転ナデ（内面に指オサエ）	—	口縁部小片	
43	4	31	須恵器	甕	校庭下井戸	口縁部：直線的に外傾して立ち上がる、端部を欠く	口縁部外面：縦位の平行文タタキ目後、2条沈線、2列の波状文、2条沈線、一条沈線、波状文、2列の1条沈線 口縁部内外面：回転ナデ	—	口縁部小片	
44	5	32	須恵器	甕	校庭下	口縁部：直線的に外傾して立ちあがる、端部外縁に面をもつ	口縁部内外面：回転ナデ（外面に斜位の平行文タタキ目） 体部外面：平行文タタキ目 内面：同心円文タタキ目	口　径：23.0 体部最大径：48.0	(頸部径残1/2未満)	
44	1	32	須恵器	甕	校庭下	口縁部：短く外反する、端部に面・稜をもたない	口縁部内外面：回転ナデ	口　径：16.2	(口径残1/2未満)	
44	2	32	須恵器	甕	体育館下	口縁部：短く外反する、端部に丸みを帯びた面をもつ	口縁部内外面：回転ナデ（外面に斜位の平行文タタキ目） 体部内面：同心円文タタキ目	口　径：19.5	(口径残1/2未満)	
44	3	32	須恵器	甕	校庭下	口縁部：短く外傾する、端部に面・稜をもたない	口縁部内外面：回転ナデ 体部外面：平行文タタキ目 体部内面：同心円文タタキ目	口　径：23.2	(口径残1/2未満)	

第34表　須恵器（甕・横瓶）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元根拠部位）	備　考
44	4	32	須恵器	甕	校庭下井戸	口縁部：直線的に外傾して立ち上がる、端部に面をもつ	口縁部内外面：回転ナデ（外面：1条沈線、残存部に一箇所竹管文） 体部内面：同心円文タタキ目	口　径：19.4	（口径残1/2未満）	
44	5	32	須恵器	甕	校庭下	口縁部：短く外傾する、端部に面をもち外側に肥厚する	口縁部内外面：回転ナデ 体部外面：格子文タタキ目 体部内面：同心円文タタキ目	口　径：13.6	（口径残1/2未満）	
44	6	32	須恵器	甕	校庭下	口縁部：短く外傾する、端部に凹面をもつ	口縁部内外面：回転ナデ 体部外面：平行文タタキ目 体部内面：同心円文タタキ目	口　径：21.0	（頸部径残1/2未満）	
44	7	32	須恵器	甕	校庭下井戸	口縁部：短く外反する、器厚厚い、端部に面・稜をもたない	口縁部内外面：回転ナデ 体部外面：平行文タタキ目 体部内面：同心円文タタキ目	口　径：22.0	（頸部径残1/2未満）	
44	8	32	須恵器	甕	体育館下SX01	口縁部：短く外反する、器厚厚い、端部に面・稜をもたない	口縁部外面：回転ナデ内面：回転ナデ、横位のヘラナデ 体部外面：平行文タタキ目、回転カキ目 内面：同心円文タタキ目、横横位のヘラナデ	口　径：19.2	（頸部径残1/2以上）	
44	9	32	須恵器	横瓶	第2トレンチ	口縁部：短く外傾する、端部に面・稜をもたず外縁玉縁状	口縁部内外面：回転ナデ(外面端部付近に1条沈線) 体部外面：平行文タタキ目 内面：同心円文タタキ目	口　径：13.6	（頸部径残1/2未満）	
44	10	32	須恵器	横瓶	体育館下	口縁部：短く外傾する、端部に稜、外縁に面をもつ	口縁部内外面：回転ナデ 体部外面：平行文タタキ目、回転カキ目 内面：同心円文タタキ目	口　径：12.4	（頸部径残1/2未満）	
44	11	32	須恵器	横瓶	第2トレンチ	口縁部：短く外傾する、端部に面をもつ	口縁部内外面：回転ナデ 体部外面：平行文タタキ目 内面：同心円文タタキ目	口　径：17.4	（口径残1/2以上）	
45	1	33	須恵器	甕	校庭下	口縁部：短く外傾する、端部に面をもつ	口縁部内外面：同転ナデ 体部外面：格子文タタキ目 内面：同心円文タタキ目	口　径：21.6	（頸部径残1/2未満）	
45	2	33	須恵器	甕	校庭下SX01	口縁部：短く外傾する、端部に面をもつ	口縁部内外面：回転ナデ体部外面：平行文タタキ目内面：同心円文タタキ目	口　径：17.4	（口径残1/2以上）	
45	3	33	須恵器	甕	第2トレンチ	口縁部：短く外傾する、端部に面をもつ	口縁部内外面：回転ナデ 体部外面：自然釉 内面：同心円文タタキ目	口　径：17.8	（頸部径残1/2未満）	
45	4	33	須恵器	甕	体育館下	口縁部：短く外傾する、端部に面・稜をもたない	口縁部内外面：回転ナデ体部 外面：平行文タタキ目 内面：同心円文タタキ目	口　径：19.6	（口径残1/2未満）	
45	5	33	須恵器	甕	校庭下井戸		体部外面：平行文タタキ目 内面：同心円文タタキ目	－	体部のみ	

第35表　特殊な性格をもつ土器群観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法量 (cm)	残存率 (復元模築部位)	備考
46	1	36	須恵器	坏身 (月溜)	体育館下	高台：外周沿いにつく、接地面わずかに内傾 底部：平坦 体部：直線的に外傾する 口縁部：かるく外傾にひらく、端部に面・稜をもたない	底面：ヘラ切り、後ナデ 内外面：回転ナデ	口　径：15.5 体部高：3.9 器　高：4.3 高台径：9.9	(高台径残 1/2未満)	底部内面全面に朱が付着
46	2	36	須恵器	坏身 (墨痕?)	校庭下	高台：外周沿いにつく、接地面内傾 底部：平坦	底面：ヘラ切り、後ナデ 底部内面：不定方向ナデ	高台径：14.1	(高台径残 1/2以上)	底部内面一部に墨?付着
46	3	36	土師器	丹塗り皿 (漆塗りベラ)	校庭下	高台なし 底部：平坦	底面：指オサエ/丹なし 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ	—	小片	漆皮膜破片を漆塗りベラに転用したか
46	4	36	須恵器	硯	校庭下	扁平な六角形の断面	全面ヘラ削り	—	小片	円面硯の脚部か
46	5	36	須恵器	硯	校庭下	板状の材をくの字に曲げる	横ナデ	—	小片	硯の脚部か
46	6	36	須恵器	坏身 (墨痕?)	体育館下	高台なし	底面：ヘラ切り、後ナデ 内外面：回転ナデ	底　径：5.5	(底径残 1/2未満)	底部内面一部に墨?付着
46	7	36	須恵器	坏身 (硯?)	校庭下井戸	高台：外周沿いにつく、直立する、端部に面・稜をもたない	底面：糸切り 外面：回転ナデ 内面：磨耗で平滑	—	底部小片	二次焼成をうける、すす付着
46	8	37	須恵器	灯明皿	校庭下井戸	底部から浅くたちあがり、口縁部をつまんで外上方にひらく	底面：回転糸切り 外面：回転ナデ/1条沈線 内面：回転ナデ	口　径：9.4 器　高：2.5 底　径：6.5	(口径残 1/2未満)	
46	9	37	須恵器	灯明皿	校庭下井戸	底部から浅くたちあがり、口縁部を折り曲げ横方向にひらく	底面：不明 内外面：回転ナデ	—	底部小片	色調：暗赤褐色 胎土：密 焼成：良好
46	10	37	須恵器	灯明皿	校庭下	底部から浅くたちあがり、口縁部を折り曲げ横方向にひらく	底面：ヘラ切り 内外面：回転ナデ	—	底部小片	
46	11	37	須恵器	灯明皿	校庭下	底部から浅くたちあがり、口縁部を折り曲げ横方向にひらく	底面：ヘラ切り、後ナデ 内外面：回転ナデ	底　径：5.6	(底径残 1/2未満)	
46	12	37	須恵器	灯明皿	校庭下	底部から浅くたちあがり、口縁部を折り曲げ横方向にひらく	底面：ヘラ切り、後ナデ 内外面：回転ナデ	口　径：8.8 器　高：2.5 底　径：6.1	1/2以上	色調：暗赤褐色 胎土：密 焼成：良好
46	13	37	須恵器	灯明皿	校庭下	底部から浅くたちあがり、口縁部を折り曲げ横方向にひらく	底面：ヘラ切り?自然釉で剥然とせず 内外面：回転ナデ	口　径：9.0 器　高：2.3 底　径：6.7	(口径残 1/2未満)	
46	14	37	須恵器	灯明皿	校庭下	底部から浅くたちあがり、ゆるやかに屈曲して外上方にひらく	底面：回転糸切り 外面：ナデ上げ、指オサエ、回転ナデ/3条沈線 内面：回転ナデ	口　径：12.4 器　高：2.7 底　径：9.5	(口径残 1/2未満)	
46	15	37	土師器	灯明皿	校庭下	底部からゆるやかに立ち上がり、直線的に外傾する。口縁端部は面・稜ともになし	底面：不定方向ナデ、指オサエ 外面：回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：8.0 器　高：2.4 底　径：4.6	(口径残 1/2未満)	内面にスス付着
46	16	37	土師器	灯明皿	校庭下井戸	口縁端部：面・稜ともになし	底面：ヘラ状工具によるナデ 内外面：回転ナデ	口　径：8.2 器　高：2.6 底　径：6.5	(口径残 1/2未満)	内面にスス付着

第36表　特殊な性格をもつ土器群観察表

図版	No	写真図版	種別	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量 (cm)	残存率 (復元横断部位)	備　考
46	17	37	土師器	灯明皿	校庭下	底部から外傾して立ち上がり、ゆるやかに屈曲して外上方にひらく	底面：ナデ 内外面：回転ナデ	口　径：8.4 器　高：2.1 底　径：5.3	(口径残 1/2未満)	内面にスス付着
46	18		土師器	皿 (灯明皿)	校庭下	底部から上方にたちあがる	内外面：指オサエ	口　径：6.4 器　高：2.9 底　径：4.9	1/2以上	内面にスス付着
46	19	37	土師質	皿 (灯明皿)	校庭下	底部から外傾して立ち上がり、ゆるやかに屈曲して外上方にひらく	底面：指オサエ、ヘラ状工具による不定方向ナデ 外面：ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	口　径：8.4 器　高：2.4 底　径：6.2	1/2以上	内面にスス付着
46	20	37	土師質	皿 (灯明皿)	校庭下井戸	底部から直線的に外傾して立ち上がる	底面：指オサエ 外面：回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：9.6 器　高：4.5 底　径：7.1	1/2以上	内面にスス付着
46	21	37	土師質	皿 (灯明皿)	校庭下	底部から直線的に外傾して立ち上がる	内外面：回転ナデ	口　径：9.5 器　高：2.8 底　径：5.0	1/2以上	内面にスス付着
46	22	37	土師器	丹塗り皿 (灯明皿)	校庭下	底部から内湾して立ち上がる、口縁端部に面・稜をもたない	底面：不定方向ヘラナデ/丹塗り 外面：指オサエ、回転ナデ 内面：回転ナデ	口　径：11.4 器　高：3.3 底　径：9.0	1/2以上	内面にスス付着
46	23	38	須恵器	鉢?壺?	校庭下	口縁部で内側に強く屈曲し、端部で上方に折り上げる	内外面：回転ナデ	−	口縁部小片	
46	24	38	須恵器	鉢?壺?	体育館下	口縁部で内側に強く屈曲し、端部を上方につまみあげる	内外面：回転ナデ	−	口縁部小片	
46	25	38	須恵器	鉢?	校庭下	口縁部で内側に強く屈曲し、端部を上方につまみあげる	内外面：回転ナデ	−	口縁部小片	外面火だすき
46	26	38	須恵器	鉢?	校庭下井戸	口縁部で内側に強く屈曲する。端部に面をもつ	内外面：回転ナデ	−	口縁部小片	外面火だすき
46	27	38	須恵器	−	体育館下	断面M型の突帯をもつ	内外面：回転ナデ	−	小片	
46	28	38	須恵器	鉢	体育館下	口縁部：内湾する、端部に面・稜をもたない	内外面：回転ナデ	口　径：24.0	口縁部小片	
46	29	38	須恵器	−	校庭下井戸	ヘラ削りされた鋤面と穿孔あり	内外面：ヘラ削り	−	−	色調：赤褐色 焼成：良好
46	30	38	須恵器	托	体育館下	口縁部を欠く。内面中央の立ち上がり端部と高台端部に面をもつ	底面：回転糸切り、回転ナデ 内面：回転ナデ	−	底部小片	
46	31	38	須恵器	坏身	校庭下	高台：中央寄りにつく、ハの字状にひらき、端部を下方につまむ。端部外縁に面をもつ	底面：糸切り後ナデ/スタンプ文 内外面：回転ナデ	高台径：7.9	(高台径残1/2)	
46	32	38	須恵器	坏身	体育館下	高台なし 体部：内湾 口縁部：端部を外方に折る、一部を引き出し注口をつくる	底面：糸切り 外面：回転ナデ 内面：静止ナデ、回転ナデ	最大口径：13.2 器　高：4.8 底　径：7.9	1/2以上	
46	33	38	須恵器	坏身	校庭下	高台：中央よりにつく、後地面は外傾する 底部：平面	底面：糸切り/ 外面：回転ナデ/ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	高台径：9.0	(高台径残 1/2以上)	
46	34	38	須恵器	坏身	体育館下	高台：外周沿いにつく、ハの字にひらく、端部に面・稜をもたない 底部：平面 体部：直線的に外傾する 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：糸切り、後ナデ 外面：回転ナデ/ヘラ記号 内面：磨耗著しい、回転ナデ	口　径：11.6 体部高：4.1 器　高：4.4 高台径：8.1	(高台径残 1/2未満)	

第37表　土師器（坏身）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量 (cm)	残存率 (復元根拠部位)	備　考
47	1	40	土師器	丹坏身	校庭下	高台なし 底部：曲面　体部：外傾 口縁部：一旦押し広げて上方にのびる、端部に面・稜をもたない	底面：丹塗り/不定方向ヘラナデ、ヘラ削り 内外面：回転ナデ	口　径：15.8 器　高：4.6 底　径：13.9	(口径残 1/2未満)	
47	2	40	土師器	丹坏身	校庭下	高台なし 底部：曲面　体部：内湾 口縁部：外上方にのびる、端部に面・稜をもたない	底面：丹塗り/不定方向ヘラナデ、指オサエ 内 外面：回転ナデ	口　径：15.8 器　高：4.4 底　径：12.6	1/2以上	
47	3	40	土師器	丹坏身	校庭下	高台なし 底部：曲面　体部：内湾 口縁部：端部に内傾する面をもつ、端部横上方に折れる	底面：丹塗り/不定方向ヘラ削り、円形に狐目 状に並んだ指オサエ 内外面：回転ナデ	口　径：15.2 器　高：5.5 底　径：12.9	1/2以上	
47	4	40	土師器	丹坏身	校庭下	高台なし 底部：曲面　体部：内湾 口縁部：端部を横方向に折り曲げる	底面：丹塗り/不定方向のヘラナデ、指オサエ 外面：回転ナデ内面：不定方向ナデ	口　径：17.4 器　高：5.7 底　径：14.5	(口径残 1/2未満)	
47	5	40	土師器	丹坏身	校庭下	高台なし 底部：曲面　体部：内湾 口縁部：内傾する、端部に丸みを帯びた面をもつ	底面：丹塗り/ヘラナデか？ 外面：横位のヘラ削り、回転ナデ内面：不定方向のハケ目、横位のハケ目、回転ナデ	口径：16.7 器　高：6.2 底　径：13.6	1/2以上	
47	6	40	土師器	丹坏身	体育館下	高台なし 底部：平坦　体部：直線的に外傾 口縁部：玉縁状の端部	底面：丹塗り？露胎？/指オサエ 内外面：回転ナデ	口　径：12.4 器　高：4.1 底　径：9.1	1/2以上	
47	7	40	土師器	丹坏身	校庭下	高台なし 底部：曲面　体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：丹塗り/不定方向ヘラナデ、指オサエ 外面：回転ナデ内面：ナデ、回転ナデ	口　径：11.8 器　高：3.7 底　径：10.2	1/2以上	
47	8	40	土師器	丹坏身	体育館下	高台なし 底部：曲面　体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：露胎/不定方向ヘラ削り 外面：回転ナデ	口　径：12.4 器　高：4.3 底　径：9.3	1/2以上	
47	9	40	土師器	丹坏身	校庭下	高台なし 底部：曲面　体部：内湾気味に外傾 口縁部：外上方にのびる、端部に面・稜をもたない	底面：丹塗り/一定方向のヘラミガキ 内外面：横方向のヘラミガキ	口　径：15.5 器　高：4.0 底　径：12.3	1/2以上	
47	10	40	土師器	丹坏身	体育館下	高台なし 底部：平坦　体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：丹塗り/回転ヘラナデ 内外面：回転ナデ	口　径：12.2 器　高：3.9 底　径：8.3	1/2以上	
47	11	40	土師器	丹坏身	校庭下	高台なし/底部：平坦/体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：露胎/ヘラナデ、指オサエ 外面：回転ナ　内面：ナデ、回転ナデ	口　径：11.2 器　高：3.3 底　径：7.7	(口径残 1/2未満)	
47	12	40	土師器	丹坏身	体育館下 ピット39	高台なし/底部：平坦/体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：露胎/ヘラナデ？ヘラ削り？ 内外面：回転ナデ	口　径：7.1 器　高：3.7 底　径：7.1	(口径残 1/2未満)	
47	13	40	土師器	丹坏身	体育館下	高台なし 底部：平坦　体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：露胎/磨耗著しく調整が判然とせず 外面：回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：12.2 器　高：3.1 底　径：6.1	(口径残 1/2未満)	

第38表　土師器観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量 (cm)	残存率 (復元模興部位)	備　考
47	14	40	土師器	丹坏身	校庭下	高台なし/底部：平坦/体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：露胎/指オサエ、平行線文状の圧痕 外面：回転ナデ/内面：回転ナデ	口　径：12.2 器　高：2.9 底　径：6.7	(口径残 1/2未満)	
47	15	40	土師器	丹坏身	体育館下 ピット39	高台：外周沿いにつく、直立、端部に丸みを帯びた面 体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：露胎/回転ナデ 外面：回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：11.8 体部高：3.2 器　高：5.2 高台径：7.0	1/2以上	
47	16	40	土師器	丹坏身	体育館下	高台：外周沿いにつく、ハの字状にひらく、接地面 は水平体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：露胎/指オサエ後回転ナデ 外面：回転ナデ 内面：ナデ	口　径：10.8 体部高：3.2	(底径残 1/2以上)	
47	17	40	土師器	丹坏身	校庭下	高台なし 底部を欠く　体部：内湾 口縁部：端部に内傾する面をもつ、外上方にのびる	底面：丹塗り/不定方向のケズリ 内外面：回転ナデ	口　径：12.0 器　高：3.3 底　径：8.2	(口径残 1/2未満)	
47	18	40	土師器	丹坏身	体育館下 ピット39	底部を欠く 体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：露胎？/ヘラケズリ？ 内外面：回転ナデ	−	口縁部小片	
47	19	40	土師器	丹壺	体育館下	宝珠つまみ：頂部をなでて平坦にする、接続部がひ ろがる台形状	全面丹塗り、回転ナデ	−	つまみ部のみ	
47	20	40	土師器	丹坏身	第2トレンチ	高台：ハの字状にひらく、接地面は外傾する	底面：丹塗り 内外面：回転ナデ（内面ミガキ）	−	高台部小片	
47	21	40	土師器	丹坏身	第2トレンチ	高台：ハの字状にひらく、接地面は外傾する	底面：丹塗り内 外面：回転ナデ（内面ミガキ）	−	高台部小片	
47	22	40	土師器	丹坏身	校庭下	高台なし 底部：平坦　体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：丹塗り/不定方向ヘラナデ、指オサエ 内外面：回転ナデ	口　径：12.2 器　高：3.7 底　径：8.9	1/2以上	
47	23	40	土師器	丹坏身	体育館下	高台なし 底部：平坦　体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない、内面に肥厚する	底面：露胎/指オサエ 外面：回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：14.4 器　高：4.5 底　径：10.0	(口径残 1/2未満)	
47	24	40	土師器	丹坏身	体育館下	高台なし 底部：平坦　体部：内湾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：露胎/不定方向のヘラナデ 外面：回転ナデ/内面：ナデ、回転ナデ	口　径：12.3 器　高：3.1 底　径：8.2	(底径残 1/2以上)	
47	25	40	土師器	丹坏身	校庭下	高台なし 底部：平坦　体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：露胎/指オサエ、ナデ 内外面：回転ナデ	口　径：11.0 器　高：3.7 底　径：8.4	(口径残 1/2未満)	
47	26	40	土師器	丹坏身	校庭下	高台なし？ 底部：曲面　体部：直線的に外傾 口縁部：端部に沈線状の凹面あり	底面：露胎/不定方向のヘラナデ 内外面：回転ナデ	口　径：12.2	(口径残 1/2以上)	
48	1	41	土師器	丹皿	校庭下井戸	高台なし 底部：曲面　体部：直線的に外傾 口縁部：端部に丸みを帯びた面をもつ	底面：露胎/ケズリ後ナデ 内外面：回転ナデ	口　径：12.4 器　高：2.2 底　径：11.2	(口径残 1/2未満)	
48	2	41	土師器	丹皿	校庭下	高台なし 底部：平面　体部：内湾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：丹塗り/不定方向のヘラナデ、指オサ エ 外面：回転ナデ/内面：ナデ、回転ナデ	口　径：13.8 器　高：1.9 底　径：10.6	(口径残 1/2未満)	

第39表　土師器観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量 (cm)	残存率 (復元根拠部位)	備　考
48	3	41	土師器	丹塗	校庭下	高台なし 底部：平面　体部：外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：露胎/指オサエ 内外面：回転ナデ	口　径：14.0 器　高：2.1 底　径：10.4	(口径残 1/2未満)	
48	4	41	土師器	丹塗	体育館下	高台なし 底部：平面　体部：外傾 口縁部：外反、端部に面・稜をもたない	底面：丹塗り/一定方向ヘラナデ、横位のヘラ削り 外面：回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：14.4 器　高：2.1 底　径：12.5	(口径残 1/2未満)	
48	5	41	土師器	丹塗	校庭下	高台なし 底部：平面　体部：直線的に外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：露胎/指オサエ、ヘラナデ 内外面：回転ナデ	口　径：12.9 器　高：2.7 底　径：7.8	1/2以上	
48	6	41	土師器	丹塗	校庭下	高台：中央寄りにつく、ハの字状にひらく、端部に面・稜をもたず、かるく横方向に広げる 体部：外傾　口縁部：外反、端部が肥厚する	底面：露胎、高台外周のみに、ひと筆で朱 内外面：回転ナデ	口　径：16.2 体部高：2.1 高　台：1.3 高台径：10.0	(口径残 1/2未満)	
48	7	41	土師器	丹塗? 皿?	校庭下	高台：ハの字状にひらく、接地面は内傾、底部：平面	全面丹塗り、回転ナデ	高台径：15.2	(底径残 1/2未満)	胎土：やや粗、砂粒を多く含む、褐色
48	8	41	土師器	丹塗? 皿?	体育館下	高台：ハの字状にひらく、接地面は内傾、底部：平面	全面丹塗り、回転ナデ	高台径：13.1	(底径残 1/3未満)	胎土：やや粗、砂粒を多く含む、褐色
48	9	41	土師器	丹塗	体育館下	高台なし 底部：平坦　体部：外傾 口縁部：屈曲して外反、内面に凹面をもつ、端部に面・稜をもたない	底面：丹塗り 内外面：回転ナデ	−	口縁部小片	
48	10	41	土師器	丹塗	体育館下	高台なし 底部：平坦 体部：外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：露胎/指オサエ、一定方向ヘラナデ 外面：回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	口　径：13.2 器　高：2.0 底　径：9.7	1/2以上	
48	11	41	土師器	丹塗	体育館下	高台なし/底部：平坦/体部：外傾 口縁部：端部に稜をもつ、外側に肥厚する	底面：丹塗り/ヘラ削り 内外面：回転ナデ	口　径：18.6 器　高：2.1 底　径：15.5	(口径残 1/2未満)	
48	12	41	土師器	丹塗	校庭下	高台：外周沿いにつく、断面台形状 体部：外傾 口縁部：端部に丸みを帯びた面をもつ、外側に肥厚する	底面：露胎/ヘラナデ、指オサエ 内外面：回転ナデ	口　径：14.8 体部高：2.7 器　高：2.8 高台径：11.4	1/2以上	
48	13	41	土師器	丹塗	体育館下 ピット39	高台：外周沿いにつく、断面台形状 体部：外傾 口縁部：端部が肥厚、面・稜をもたない	底面：露胎/指オサエ 外面：回転ナデ 内面：不定方向ナデ、回転ナデ	口　径：16.2 体部高：2.1 器　高：2.5 高台形：11.4	1/2以上	
48	14	41	土師器	丹塗	体育館下	高台：外周沿いにつく、断面三角形状 体部：外傾 口縁部：端部に面・稜をもたない	底面：露胎/指オサエ 内外面：回転ナデ	口　径：16.7 体部高：2.7 器　高：3.0 高台径：12.6	(高台径残 1/2未満)	
48	15	41	土師器	丹塗	校庭下	高台：中央寄りにつく、低平 体部：浅い立ち上がり口縁部：端部に面・稜をもたない	底面を欠く 内外面：判然とせず	口　径：17.8 体部高：1.6	口縁部小片	

第40表　土師器観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量 (cm)	残存率 (復元根拠部位)	備　考
48	16	42	土師器	坏身	体育館下	高台なし 底部：面取 体部：外傾 口縁部：わずかに外反、端部に面・稜をもたない	底面：横位のヘら削り 外面：横位のヘラミガキ 内面：回転ナデ	口　径：14.0 器　高：4.3 底　径：11.3	(口径残 1/2未満)	赤く焼成
48	17	42	土師器	坏身	校庭下	高台なし 底部：面取/体部：内湾 口縁部：わずかに外反、端部上方につまみ、外縁に面をもつ	底面：ヘラナデ、ヘラミガキ（一部黒変色） 外面：回転ナデ 内面：回転ナデ/放射線状に斜位の暗文	口　径：18.1 器　高：5.6 底　径：16.0	(口径残 1/2未満)	赤く焼成
48	18	42	土師器	坏身	体育館下	高台なし 底部：面取、体部との境を持たない 体部：内湾 口縁部：端部に内傾する面をもつ	内外面、全面ミガキ、回転ナデ	口　径：17.8 器　高：4.4	1/2以上	赤く焼成
48	19	40	土師器	丹壺? 高坏?	体育館下	高台を欠く：中央窄りにつく 底部：曲面　体部：浅く外傾する 口縁部：端部に丸みを帯びた稜をもつ	内外面の風化が著しい、内面に放射線状の斜位の暗文、連続した弧を描く暗文	口　径：25.4 体部高：3.5	1/2以上	
48	20	43	土師質 土器	皿	校庭下	底部から直線的に外傾して立ち上がる	底面：回転糸切り 内外面：回転ナデ	底　径：6.0	(底径残 1/2未満)	
48	21	43	土師質 土器	皿	校庭下	底部から外傾して立ち上がる	底面：回転糸切り 内外面：回転ナデ	底　径：5.9	(底径残 1/2未満)	
48	22	43	土師質 土器	皿	校庭下	底部から直線的に外傾して立ち上がる	底面：回転糸切り 内外面：回転ナデ	底　径：6.6	(底径残 1/2未満)	
48	23	43	土師質 土器	柱状高台 付坏	校庭下	—	回転ナデ	—	小片	
48	24	43	土師質 土器	柱状高台 付坏	校庭下	坏部内面中央をヘラで削り抜き、円錐状の凹面を作る	底面：回転糸切り 内外面：回転ナデ	底　径：5.2	(底径残全)	
48	25	44	土師器	高坏	体育館下	脚面、円形に近い多角形	外面：縦位の削り、後ナデ	—	脚部小片	
48	26	44	土師器	高坏?	—	脚の途中で折り曲げて外側に広げる	内外面：横位のヘラナデ、ヘラ削り	高台径：5.6	(脚部径残 1/2以上)	
48	27	44	土師器	丹坏身?	校庭下	高台：蛇の目高台状、高台内面に丹か火だすきか判然としない赤褐色の痕あり	底面：回転ヘラ削り 高台：回転ナデ 内外面：回転ナデ	高台径：8.4	(高台径残 1/2未満)	
49	1	45	土師器	甕	校庭下井戸	単純口縁：端部に面・稜をもたない	口縁部内外面：回転ナデ 体部内面：横位のヘラ削り	口　径：32.6	(口径残 1/2未満)	
49	2	45	土師器	甕	校庭下	単純口縁：端部に面・稜をもたない、端部内面が玉縁状	口縁部外面：横ナデ 内面：横ナデ、5条/1cmの横位のハケ目	—	口縁部小片	
49	3	45	土師器	甕	校庭下	単純口縁：ゆるやかに屈曲して外反、端部をかるく上方に折る、端部に丸みを帯びた面	口縁部外面：横ナデ、指オサエ 内面：横ナデ、7条/1cmの横位のハケ目 体部外面：7条/1cmの縦位のハケ目	—	口縁部小片	
49	4	45	土師器	甕 (外塗り)	体育館下	単純口縁：短く外反、端部に面・稜をもたない	内外面丹塗り 口縁部外面：横ナデ 内面：横位のハケ目 体部内面：横位のケズリ	—	口縁部小片	

第41表　土師器（甕・低脚坏）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元根拠部位）	備　考
49	5	45	土師器	甕	校庭下	頸部外面に羽状文	外面：羽状文 内面：横位のヘラケズリ	－	頸部小片	
49	6	45	土師器	甕	校庭下井戸	単純口縁；端部に面・稜をもたない	口縁部外面：指オサエ 体部外面：縦位のハケ目 内面：横位のヘラケズリ	－	口縁部小片	
49	7	45	土師器	甕	第2トレンチ	単純口縁；端部をかるく横方向に折り曲げる	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：7条/1cmの縦位のハケ目 内面：横位のヘラケズリ	－	口縁部小片	
49	8	45	土師器	甕	体育館下	単純口縁；端部をかるく横方向に折り曲げる	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：横位のヘラケズリ	口　径：30.2	（頸部径残 1/2未満）	
49	9	45	土師器	甕	校庭下井戸	単純口縁；ゆるやかに外反、端部に面・稜をもたない	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：斜位のハケ目 内面：斜位のヘラケズリ	口　径：25.8	（口径残 1/2未満）	
49	10	45	土師器	甕	校庭下	単純口縁；ゆるやかに外反、端部に面・稜をもたない	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：縦位のハケ目 内面：横位のハケ目	口　径：30.0	（口径残 1/2未満）	
49	11	45	土師器	甕	校庭下	単純口縁；端部に面・稜をもたない	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：縦位のハケ目 内面：横位のハケ目	口　径：32.0	（口径残 1/2未満）	
49	12	45	土師器	甕	体育館下	単純口縁；端部に面・稜をもたない	口縁部内外面：横ナデ、指オサエ 体部外面：縦位のハケ目 内面：横位のヘラケズリ	口　径：9.8	（口径残 1/2未満）	
49	13	45	土師器	低脚坏	校庭下	ゆるやかに外反する脚、端部に面・稜をもたない	内外面：回転ナデ	脚部径：3.7	（脚部径残 1/2以上）	
49	14	45	土師器	甕	校庭下	単純口縁；端部に面・稜をもたない	口縁部内外面：横ナデ（内面：指オサエ） 体部外面：縦位のハケ目 内面：横位のハケ目	口　径：32.8	（口径残 1/2未満）	
49	15	45	土師器	甕	校庭下	単純口縁；端部に面・稜をもたない	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：ハケ目内面：横位のヘラケズリ	口　径：31.4	（口径残 1/2未満）	
49	16	45	土師器	甕	体育館下	単純口縁；端部に面・稜をもたない	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：縦位のハケ目 内面：横位のヘラケズリ	口　径：30.6	（口径残 1/2未満）	
49	17	45	土師器	甕	体育館下	単純口縁；ゆるやかに外反、端部に面・稜をもたない 体部；下半に重心をもつ	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：縦位のハケ目、横位のハケ目、斜位のハケ目 内面：横位のヘラケズリ	口　径：26.2 残存高：25.5 体部最大径：28.6	1/2以上	
50	1	46	土師器	甕	体育館下	単純口縁；端部をかるく横方向に折り曲げる 体部；ふくらみをほとんどもたず、器厚・径ともに口縁部に比して小さい	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：縦位のハケ目 内面：斜位のヘラケズリ	口　径：19.6 体部最大径：15.1	（口径残 1/2未満）	
50	2	46	土師器	甕	校庭下	単純口縁；端部を被方向に折り曲げる 体部；ふくらみをもたず、頂部から下方へのびる	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：不定方向のハケ目、後ナデ 内面：横位のヘラケズリ	口　径：28.0 体部最大径：20.9	（頸部径残 1/2未満）	

第42表　土師器（甕）観察表

図版	No	写真図版	様式	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元根拠部位）	備　考
50	3	46	土師器	甕	体育館下	単純口縁：端部を横方向に折り曲げる 体部：ふくらみをほとんどもたない	口縁部外面：横ナデ 内面：10条/1cmの横位のハケ目 体部外面：縦位のハケ目 内面：横位・斜位のヘラケズリ	口径：27.2 体部最大径：21.1	（頸部径残 1/2未満）	
50	4	46	土師器	甕	校庭下	単純口縁：上方に外傾、端部をかるく横方向に折り曲げる 体部：ふくらみをほとんどもたない	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：ハケ目 内面：横位のヘラケズリ	口　径：28.0	（口径残 1/2未満）	
50	5	46	土師器	甕	校庭下	単純口縁：端部に面・稜をもたない 体部：ふくらみをほとんどもたない	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：縦位のハケ目 内面：横位のヘラケズリ	口　径：31.2	（口径残 1/2未満）	
50	6	46	土師器	甕	校庭下	単純口縁：外反、端部に面・稜をもたない 体部：口径に比して器高が低い、頸部からのふくらみが小さい 底部：凹面	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：縦位のハケ目、横位のハケ目 内面：横位のヘラケズリ、縦位のヘラケズリ	口　径：33.2 体部最大径：29.8 残存高：20.8	（口径残 1/2以上）	
50	7	46	土師器	甕	校庭下	単純口縁：外反、端部に面・稜をもたない	口縁部内外面：横ナデ 体部内面：横位のヘラケズリ	口　径：32.6	（口径残 1/2未満）	
50	8	46	土師器	甕	体育館下	単純口縁：端部を横方向にかるく折り曲げる 体部：器壁を薄く削り、胴部から下方にのびる	口縁部内外面：横ナデ 体部内面：横位のヘラケズリ	口　径：26.0	（口径残 1/2未満）	
50	9	46	土師器	甕	体育館下	単純口縁：短く外傾する、端部に面・稜をもたない 体部：ふくらみをもたない、胴部から方にのびる	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：縦位のハケ目 内面：縦位のヘラケズリ	口　径：22.4	（口径残 1/2未満）	
50	10	46	土師器	甕	校庭下井戸	単純口縁：短く外傾 体部：ふくらみをほとんどもたない、内部下半を薄く削る	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：横ナデ 内面：横位のヘラケズリ、一部ナデ	口径：19.4 体部最大径：19.2	（口径残 1/2以上）	
50	11	46	土師器	甕	校庭下	単純口縁：分厚く、上方に外傾	口縁部外面：横ナデ 内面：横ナデ、5条/1cmの横位のハケ目 体部外面：縦位のハケ目 内面：横位のヘラケズリ	口　径：27.0	（口径残 1/2未満）	
50	12	46	土師器	甕	校庭下	単純口縁：分厚く、上方に短く外傾 体部：ふくらみをもたない、内部を薄く削る	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：5条/1cmの不定方向のハケ目 内面：斜位のヘラケズリ	口　径：25.0	（口径残 1/2未満）	
50	13	46	土師器	甕	体育館下	単純口縁：分厚く、横方向に外傾 体部：ふくらみをもたない、内部を薄く削る	口縁部内外面：横ナデ 体部外面：ナデ 内面：斜位のヘラケズリ	口　径：24.6	（口径残 1/2未満）	
50	14	46	土師器	甕	校庭下	単純口縁：短く外傾 体部：ふくらみをもたない	口縁部外面：ナデ 内面：斜位のナデ 体部外面：ヘラナデ？ 内面：横位のヘラケズリ	－	口縁部小片	
50	15	46	土師器	甕	校庭下	単純口縁：短く上方に外傾 体部：ふくらみをもたない	口縁部内外面：横ナデ 体部内面：横位のヘラケズリ	－	口縁部小片	

第43表　土製品（土錘）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	法　量	残存率（復元根拠部位）	備　考
51	1	46	土製品	土錘	校庭下	ずん胴	長さ：6.9　最大径：3.1　重量：3.0	完形	
51	2	46	土製品	土錘	体育館下	ずん胴	－	1/2未満	
51	3	46	土製品	土錘	校庭下	両端がすぼまる	残存長：4.6　最大径：1.4	1/2以上	
51	4	46	土製品	土錘	校庭下	両端がすぼまる	長さ：6.9　最大径：1.5	完形	
51	5	46	土製品	土錘	体育館下	両端がすぼまる	長さ：4.4　最大径：1.7	完形	

第44表　土師器（甑・かまど）観察表

図版	No	写真No	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元根拠部位）	備　考
51	6	47	土師器	甑	校庭下	端部に面をもつ、残存部に二箇所の円孔、把手痕あり	外面：縦位のハケ目 内面：横位のヘラケズリ	－	小片	
51	7	47	土師器	甑	体育館下	端部に面をもつ、残存部に二箇所の円孔	外面：ヘラケズリ、指オサエ 内面：ヘラケズリ	－	小片	
51	8	47	土師器	甑	校庭下井戸	端部に面をもつ、残存部に一箇所の円孔	内面：横位のヘラケズリ	－	小片	
51	9	47	土師器	甑	体育館下	端部に面をもたない、残存部に一箇所の円孔	外面：縦位のハケ目 内面：横位のヘラケズリ	－	小片	
51	10	47	土製品	かまど	体育館下	－	外面：ヘラケズリ、ナデ 内面：ヘラケズリ、指オサエ	－	小片	内面黒変色
51	11	47	土製品	かまど	校庭下	－	内外面：ヘラケズリ、ヘラナデ、ナデ	－	1/2未満	一部黒変色

第45表　土師器（製塩土器）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元根拠部位）	備　考
52	1	48	土師器	製塩土器	校庭下	口縁部が外上方にひらく	外面：ナデ 内面：横位のハケ目	－	口縁部小片	
52	2	48	土師器	製塩土器	校庭下井戸		外面：ナデ 内面：横位の指ナデ	－	口縁部小片	
52	3	48	土師器	製塩土器	校庭下	内面凹凸強い	外面：指オサエ 内面：横位の指ナデ	－	口縁部小片	
52	4	48	土師器	製塩土器	校庭下	くの字に屈曲、内面凹凸弱い	外面：指オサエ 内面：横位の指ナデ	－	口縁部小片	
52	5	48	土師器	製塩土器	校庭下	くの字に屈曲、内面凹凸弱い	外面：指ナデ 内面：横位の指ナデ	－	口縁部小片	
52	6	48	土師器	製塩土器	体育館下SX01	くの字に屈曲、内面凹凸弱い	外面：指ナデ 内面：横位の指ナデ	－	口縁部小片	
52	7	48	土師器	製塩土器	体育館下	内面凹凸弱い	外面：指ナデ 内面：横位の指ナデ口縁部：平行文状刻み目	－	口縁部小片	

第46表　土師器（製塩土器）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元根拠部位）	備　考
52	8	48	土師器	製塩土器	校庭下ピット	内面凹凸弱い	外面：指ナデ 内面：横位の指ナデ？	－	口縁部小片	
52	9	48	土師器	製塩土器	体育館下ピット39	口縁端部に平坦面、くの字に屈曲、内面凹凸強い	外面：横ナデ、横位のヘラナデ 内面：横位の指ナデ	－	口縁部小片	
52	10	48	土師器	製塩土器	校庭下	内面凹凸強い	外面：指オサエ 内面：横位の指ナデ	－	口縁部小片	
52	11	48	土師器	製塩土器	校庭下	内面凹凸弱い	外面：指ナデ 内面：横位の指ナデ	－	口縁部小片	
52	12	48	土師器	製塩土器	体育館下SX01	内面凹凸強い	外面：指オサエ 内面：横位の指ナデ、指オサエ	－	口縁部小片	
52	13	48	土師器	製塩土器	校庭下	内面凹凸弱い	外面：指ナデ 内面：ケズリ？	－	口縁部小片	
52	14	48	土師器	製塩土器	体育館下ピット3	内面凹凸弱い	外面：指ナデ 内面：横位の指ナデ	－	口縁部小片	
52	15	48	土師器	製塩土器	校庭下	くの字に屈曲？内面凹凸強い	外面：指オサエ 内面：横位の指ナデ	－	口縁部小片	
52	16	48	土師器	製塩土器	体育館下ピット39	内面凹凸弱い	外面：指オサエ 内面：横位の指ナデ	－	口縁部小片	
52	17	48	土師器	製塩土器	体育館下ピット3	器厚薄い、内面凹凸弱い	外面：指ナデ 内面：横位の指ナデ	－	口縁部小片	
52	18	48	土師器	製塩土器	校庭下	－	内面に布目痕	－	口縁部小片	
52	19	48	土師器	製塩土器	体育館下	内面凹凸弱い	内外面：指ナデ	－	底部小片	
52	20	48	土師器	製塩土器	校庭下ピット25	底部曲面	外面：指オサエ 内面：指オサエ、ナデ	－	底部小片	

第47表　土師器（土製支脚）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元根拠部位）	備　考
53	1	49	土製品	土製支脚	校庭下	－	ヘラケズリ、ナデ	－	小片	
53	2	49	土製品	土製支脚	体育館下集石2	－	ヘラケズリ、ナデ	－	小片	
53	3	49	土製品	土製支脚	体育館下	2方向突起、胴部穿孔無し	ナデ	胴部最大径：4.0	胴部のみ	岩橋分類ⅠA類
53	4	49	土製品	土製支脚	体育館下ピット39	底部に凹面	外面：指ナデ？ 内面：ヘラケズリ	－	低部小片	
53	5	49	土製品	土製支脚	体育館下ピット3	2方向突起か、胴部穿孔無し、底部に凹面	外面：ヘラケズリ 底部内面：ヘラケズリ、一部布目痕	底部最大径：10.6	1/2以上	岩橋分類ⅠA類、あるいはⅡA類

第48表　土師器（土製支脚）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元根拠部位）	備　考
53	6	49	土製品	土製支脚	校庭下	2方向突起、胴部穿孔無し、底部に凹面	外面：ナデ　一部スス付着	－	1/2以上	岩橋分類 IA類
53	7	49	土製品	土製支脚	体育館下	2方向突起、胴部穿孔無し、底部に浅い凹面	外面：指オサエ、指ナデ、クシ目	底部最大径：12.5	1/2以上	岩橋分類 IA類
53	8	49	土製品	土製支脚	校庭下 ピット1	3方向突起、背面突起は前面突起より低い位置に上方にむけてつく	ヘラケズリ	胴部最大径：7.0	1/2未満	岩橋分類 IIA類
54	1	49	土製品	土製支脚	校庭下	3方向突起、背面突起はヒレ状、底部に凹面	ナデ、一部に被熱痕	底部最大径：8.7	1/2以上	岩橋分類 IIC類
54	2	49	土製品	土製支脚	校庭下	3方向突起、背面突起はヒレ状、底部に凹面	ナデ、指オサエ、一部にスス	底部最大径：8.6	ほぼ完形	岩橋分類 IIC類
54	3	49	土製品	土製支脚	体育館下	3方向突起、背面突起は環状	ナデ	－	1/2以上	岩橋分類 IIB類
54	4	49	土製品	土製支脚	校庭下	2方向突起、胴部に貫通孔	ナデ	胴部最大径：6.4	1/2未満	岩橋分類 IB類
54	5	49	土製品	土製支脚	体育館下 SX01	2方向突起、胴部に非貫通孔	ヘラケズリ	－	1/2未満	岩橋分類 IC類
54	6	49	土製品	土製支脚	体育館下 SX01	胴部に非貫通孔、下半に底部貼り付け輪状つまみ	磨耗著しく調整が明然とせず	－	1/2未満	岩橋分類 IC類
54	7	49	土製品	土製支脚	体育館下	胴部に非貫通孔、底部に凹面	－	－	底部小片	岩橋分類 IC類
54	8	49	土製品	土製支脚	校庭下	底部凹面	外面：ケズリ 内面：横位のケズリ、剥突痕	底部最大径：12.0	底部のみ	

第49表　土師器（手づくね土器）観察表

図版	No	写真図版	種類	器種	出土地	形態の特徴	文様/調整	法　量（cm）	残存率（復元根拠部位）	胎土 焼成 色調	備　考
55	2	51	土師器	手づくね	校庭下東かく乱	安定感のない底部で口縁部がすぼまる椀形	外面：指オサエ 内面：縦位のナデ	口　径：3.0 器　高：2.8 最大径：4.1	1/2以上		小型
55	3	51	土師器	手づくね	校庭下東かく乱	ほぼ平坦な底部から直線的に外傾して立ち上がる坏形	外面：指オサエ 内面：横位のナデ	口　径：5.8 器　高：2.7 底　径：4.5	1/2以上		
55	4	51	土師器	手づくね	校庭下	ほぼ平坦な底部から直線的に外傾して立ち上がる皿型	内外面：剥然とせず	口　径：7.0 器　高：2.2 底　径：5.4	1/2以上		
55	5	51	土師器	手づくね	校庭下	ほぼ平坦な底部から内湾して立ち上がる坏形	外面：指オサエ 内面：横位のナデ	口　径：7.3 器　高：3.2 底　径：6.1	1/2以上		
55	6	51	土師器	手づくね	校庭下	口縁部小片	外面：横位のナデ 内面：横位のケズリ	－	口縁部小片		
55	7	51	土師器	手づくね	体育館下	安定感のない底部で口縁部が上方にひらく椀形	外面：指オサエ 内面：横位のナデ	口　径：11.1 器　高：5.7	1/2以上		
55	8	51	土師器	手づくね	－	安定感のない底部で口縁部が上方にひらく椀形	外面：横位のヘラナデ、指オサエ 内面：横位のヘラ削り、不定方向のヘラ削り	口　径：11.7 器　高：5.8	1/2以上		

第50表　弥生土器（甕）観察表

図版	No	写真図版	No	種類	器種	遺構	出土地	形態/文様	調　整	法　量（cm）	残存率	胎土　焼成　色調
55	1	51		弥生	甕	−	校庭下	口縁部：外縁に帯状の面をもつ、4条の凹線文	外面：横ナデ 内面：横ナデ、横位のヘラミガキ、横位のヘラ削り	口径：11.4	口縁部のみ	
−	−	50	1	弥生	甕	−	体育館下	口縁部：外縁に帯状の面をもつ、凹線文	外面：横ナデ 内面：横ナデ、横位のヘラ削り	−	口縁部小片	胎土：密、砂粒をわずかに含む 焼成：良　色調：にぶい黄橙色
−	−	60	2	弥生	甕	−	校庭下	口縁部：外縁に帯状の面をもつ、4条の凹線文	磨耗著しく判然とせず	−	口縁部小片	胎土：やや粗、砂粒を多く含む 焼成：良　色調：にぶい黄橙色
−	−	50	3	弥生	甕	−	校庭下	口縁部：外縁に帯状の面をもつ、3条の凹線文	外面：横ナデ 内面：横ナデ、横位のヘラ削り	−	口縁部小片	胎土：密、砂粒をわずかに含む 焼成：良　色調：にぶい黄橙色
−	−	50	4	弥生	甕	−	体育館下	口縁部：外縁に帯状の面をもつ、4条の凹線文	内外面：横ナデ	−	口縁部小片	胎土：やや粗、砂粒を多く含む 焼成：良　色調：にぶい黄橙色
−	−	50	5	弥生	甕	−	校庭下	口縁部：外縁に帯状の面をもつ、3条の凹線文	外面：横ナデ 内面：横ナデ、ヘラ削り	−	口縁部小片	胎土：やや粗、砂粒を大量に含む 焼成：良　色調：にぶい橙色
−	−	50	6	弥生	甕	−	校庭下	口縁部：外縁に帯状の面をもつ、2～3条の凹線文	磨耗著しく判然とせず	−	口縁部小片	胎土：やや粗、砂粒を多く含む 焼成：良　色調：にぶい黄橙色
−	−	50	7	弥生	甕	−	校庭下	口縁部：外縁に帯状の面をもつ、凹線文	磨耗著しく判然とせず	−	口縁部小片	胎土：やや粗、砂粒を多く含む 焼成：良　色調：にぶい橙色
−	−	50	8	弥生	甕	−	校庭下	口縁部：外縁に帯状の面をもつ、4条の凹線文	内外面：横ナデ	−	口縁部小片	胎土：やや粗、砂粒を多く含む 焼成：良　色調：にぶい黄橙色
−	−	50	9	弥生	甕	−	体育館下	口縁部：外縁に帯状の面をもつ、数条の凹線文あるも、磨耗著しく判然とせず	外面：横ナデ 内面：横ナデ、12条/1cmのハケ目	−	口縁部小片	胎土：密 焼成：良　色調：にぶい橙色
−	−	50	10	弥生	甕	−	校庭下	口縁部：外縁に帯状の面をもつ、5条の凹線文	外面：横ナデ 内面：磨耗著しく判然とせず	−	口縁部小片	胎土：やや粗、砂粒を多く含む 焼成：良　色調：灰黄色
−	−	50	11	弥生	甕	−	校庭下	口縁部：外縁に帯状の面をもつ、4条？の凹線文	外面：磨耗著しく判然とせず 内面：横ナデ	−	口縁部小片	胎土：やや粗、砂粒を多く含む 焼成：良　色調：灰黄色
−	−	50	12	弥生	甕	−	体育館下	肩部：二枚貝貝殻縁部による押圧列点文1列	外面：横ナデ 内面：横位のヘラ削り	−	肩部小片	胎土：密、砂粒をわずかに含む 焼成：良　色調：にぶい黄橙色
−	−	50	13	弥生	甕	−	体育館下	口縁部：拡張上端部に面をもたない、外面に3条の凹線文	外面：横ナデ 内面：横ナデ、横位のヘラ削り	−	口縁部小片	胎土：密、砂粒をわずかに含む 焼成：良　色調：にぶい黄橙色
−	−	50	14	弥生	甕	−	体育館下	口縁部：外縁に帯状の面をもつ、3条の凹線文	外面：横ナデ 内面：横ナデ、横位のヘラ削り	−	口縁部小片	胎土：密、砂粒をわずかに含む 焼成：良　色調：にぶい黄橙色
−	−	50	15	弥生	甕	−	校庭下	口縁部：外縁に帯状の面をもつ、3条？の凹線文	内外面：横ナデ	−	口縁部小片	胎土：密 焼成：良　色調：にぶい橙色
−	−	50	16	弥生	甕	−	体育館下	複合口縁：突出部に穿をもち、水平方向に突出する	外面：横ナデ 内面：横ナデ、ヘラ削り	−	口縁部小片	胎土：密 焼成：良　色調：灰黄褐色
−	−	50	17	弥生	甕	−	校庭下	平坦な底部	底部外面：磨耗著しく判然とせず 底部内面：縦位のヘラ削りか	−	底部のみ 1/2	胎土：やや粗、砂粒を多く含む 焼成：良　色調：にぶい橙色
−	−	50	18	弥生	甕	−	校庭下	平坦な底部	外面：判然とせず 内面：横ナデか	−	底部小片	胎土：やや粗、砂粒を多く含む 焼成：良　色調：灰黄褐色
−	−	50	19	弥生	甕	−	体育館下	口縁部：外反、端部に円面・二列の刺み目	内外面：横ナデ	−	口縁部小片	胎土：密 焼成：良　色調：灰白色

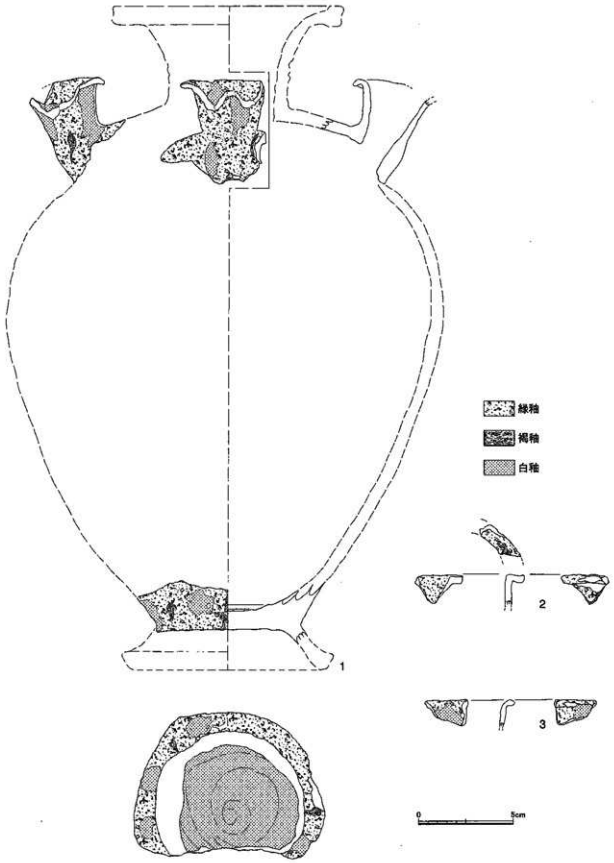
第51表　石製品観察表

図版	No	写真図版	No	種類	器種	出土地	形態の特徴	法　量 (cm)	重量 (g)	残存率	石　材	備　考
56	1	52		石製	礫石（有溝礫石）	校庭下	厚みのある石材/残材に三面の使用面を残し、そのうちの一面に一条の溝を持つ。溝断面は滑らかな円形	長：3.4　残存幅：5.8　厚：2.9	53.24	1/2程度	砂岩の一種か	礫石の欠損品を転用したものか
56	2	52		石製	礫石か？	校庭下	扁平な石材の縁辺を使用、三角形である。	最大長：4.0　最大幅：4.0 最大厚：0.7	14.8	完形	片岩	
56	3	52		石製	礫石	体育館下	断面方形、全面使用/両端を欠く	残存長：10.7　最大幅：4.2 最大厚：3.2　最小厚：1.2	177.26	2/3程度	不明	礫石
56	4	52		石製	棒状石製品	体育館下集石2	断面楕円形の棒状で反りをもつ、反り面内側に擦り面/先端に使用痕	残存長：21.0　最大幅：7.7 最大厚：5.5	1460.5	不明	砂岩か？	タタキ石・石棒の可能性あり
56	5	52		石製	丸玉	校庭下	仕上げ磨き以前の未完成品/穿孔の調整剥離痕、横位の研磨痕を残す/片面穿孔	最大径：1.6　最大厚：1.1 最大口径：0.4	4.29	完形	碧玉	
—	—	52	1	石製	不明	校庭下	扁平な石材/一箇所に未貫通の穿孔	最大径：2.4　最小径：2.2 最大孔径：0.6	8.06	完形	不明（不透明な乳白色）	
—	—	52	2	石製	剥片	体育館下	打点を欠く縦長剥片/腹面に一次剥離面を大きく残す、周側縁辺につぶれ状の細かい剥離	長：2.9　幅：1.1　厚：0.5	1.9	—	黒曜石	
—	—	53	3	石製	剥片	校庭下	打点・打面を残す横長剥片/背面・腹面に・次剥離面を大きく残す、一辺に片面のみの連続した細かい剥離	長：1.4　幅：2.7　厚：0.4	1.7	—	不明（不透明な黄褐色）	
—	—	53	4	石製	剥片	体育館下	打点・打面を残す剥片/腹面に一次剥離面を大きく残す、調整剥離なし	長：1.4　幅：1.4　厚：0.4	0.91	—	碧玉	
—	—	53	5	石製	不明	校庭下井戸枠内	自然面を残す、剥離面を観察できない	長：2.5　幅：2.0　厚：0.8	4.95	不明	メノウ？（透明感のある黄褐色）	
—	—	53	6	石製	剥片	校庭下	打点・打面を残す縦長剥片/背面・腹面に・次剥離面の大きく残す	長：3.7　幅：2.9　厚：0.8	5.34	—	メノウ？（不透明な赤褐色）	
—	—	53	7	石製	剥片	校庭下	自然面を残す、一部につぶれ状の細かい剥離	長：3.8　残存幅：1.7　厚：0.9	7.41	—	メノウ（不透明な赤褐色）	
—	—	53	8	石製	不明	校庭下	断面扁平な楕円形の棒状の石材/表皮平滑	残存長：3.1　残存幅：2.2　厚：0.8	9.35	不明	不明（不透明な黄灰色）	砥石か？
—	—	53	1	石製	磨り石	体育館下	中央にあくらみをもつ三角形、頂部に使用痕	長：7.8　幅：7.0　厚：5.7	403.49	完形	流紋岩か？絶紋岩か？	
—	—	53	2	石製	不明	校庭下	側面に平坦な平滑面3面、下面に1面	長：11.6　幅：11.6　厚：4.8	829.73	完形	不明	磨り石か？
—	—	53	3	石製	不明	校庭下	断面方形の棒状の石材/端部に平坦面、全面光沢のある平滑面	残存長：8.1　幅：3.0　厚：2.9	172.36	不明	不明	砥石か？？
—	—	53	4	石製	不明	校庭下	扁平な石材/縁辺の二辺を使用	長：4.4　幅：4.1　厚：1.6	44.77	完形	不明	磨り石か？
—	—	53	5	石製	不明	校庭下集石	扁平な石材/縁辺を使用、方形である	長：5.9　幅：6.2　厚：1.1	82.77	完形	砂岩？泥岩？	砥石か？
—	—	53	6	石製	不明	体育館下	棒状のお材/表面光沢のある平滑面	長：11.1　幅：4.9　厚：3.6	329.72	完形	不明	磨り石か？
—	—	53	7	石製	不明	校庭下	扁平な石材/縁辺を使用、方形である	長：5.9　幅：7.0　厚：1.3	113.1	完形	堆積岩	砥石か？
—	—	53	8	石製	たたき石？	体育館下	円礫、二箇所に使用痕	長：11.5　幅：9.4　厚：9.4	1399.45	完形	不明	
—	—	53	9	石製	不明	体育館下	側面に平滑な平坦面四面、下面に凹面	残存長：6.2　幅：7.7　厚：5.7	428.8	不明	不明	磨り石？たたき石？

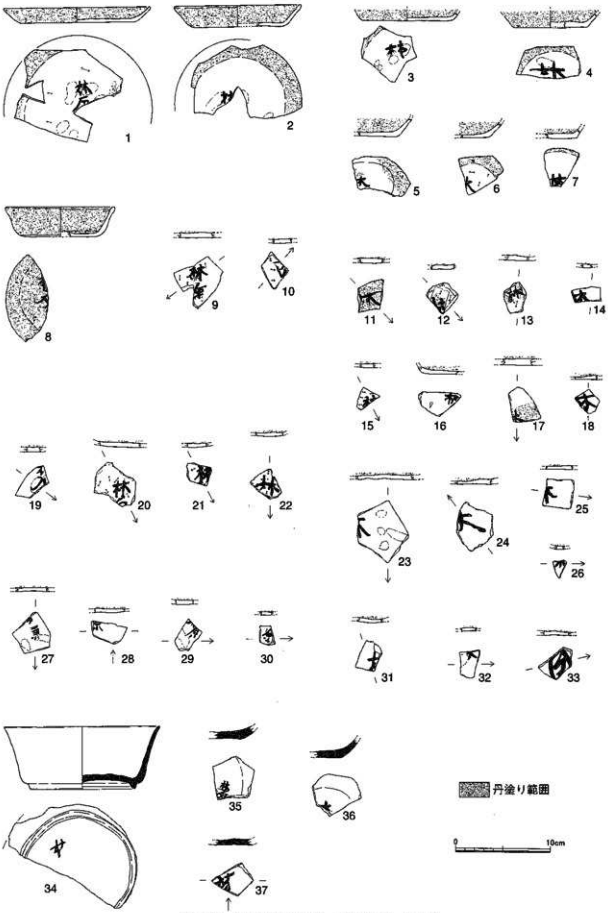
第52表　木製品観察表

図版	No	写真図版	種類	器　種	出土地	形態の特徴	法　量（残存値）（単位：cm）	残存率（復元根拠部位）	備　考
57	1	54	木製品	櫃（転用井戸枠）	校庭下井戸	柾目材、方形の釘孔、両端・小口面に漆皮膜	長：56.4　幅：23.9　厚：1.2	ほぼ完形	
57	2	54	木製品	櫃（転用井戸枠）	校庭下井戸	柾目材、方形の釘孔、小口面に漆皮膜	長：56.2　幅：22.0　厚：1.3	ほぼ完形	
57	3	54	木製品	櫃脚部	校庭下井戸	弓状に張り出した把手、面取り整形、方形の釘孔、漆皮膜	長：24.9　幅：2.1	完形	
57	4	54	木製品	櫃脚部	校庭下井戸	漆皮膜	—	1/2未満	
57	6	54	木製品	櫃脚部	校庭下井戸	—	—	1/2未満	
57	7	54	木製品	樹皮曲げ物	校庭下井戸	帯状の樹皮が3周する	最大幅：4.0　最小幅：2.8 最大高：3.1	—	
58	1	—	木製品	櫃（転用井戸枠）	校庭下井戸	柾目材、方形の釘孔、両端・小口面に漆皮膜	長：47.4　幅：23.6　厚：1.3	一部欠	
58	2	55	木製品	櫃（転用井戸枠）	校庭下井戸	柾目材、方形の釘孔、両端・小口面に漆皮膜	長：47.4　幅：24.7　厚：1.3	ほぼ完形	
58	3	—	木製品	井戸枠	校庭下井戸	柾目材？	長：119.6　幅：18.5　厚：4.0	ほぼ完形	
59	1	—	木製品	井戸枠	校庭下井戸	柾目材	長：121.3　幅：28.0　厚：4.0	ほぼ完形	
59	2	—	木製品	杭	校庭下井戸	芯持材	長：91.5　最大径：15.0	2/3程度	

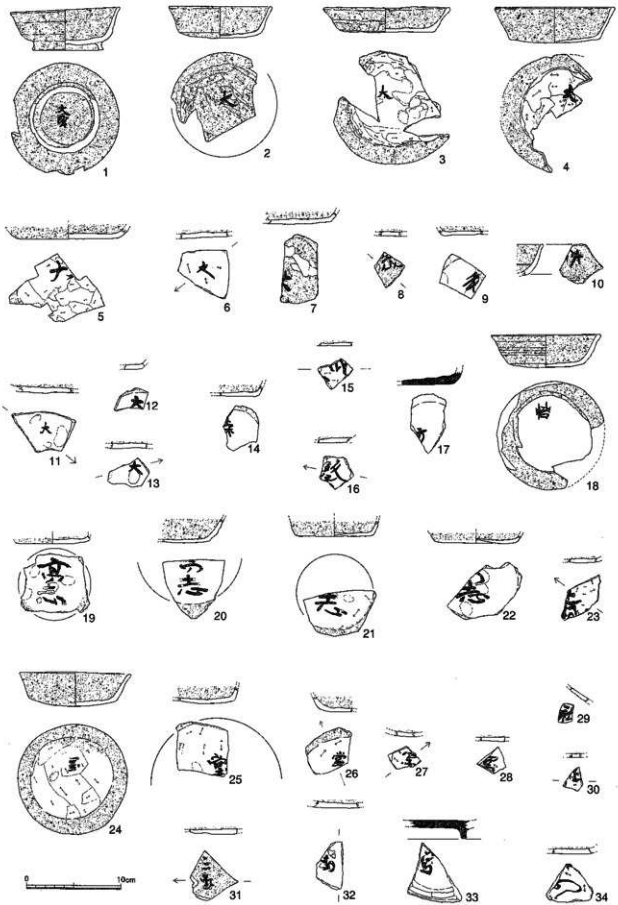
遺物実測図



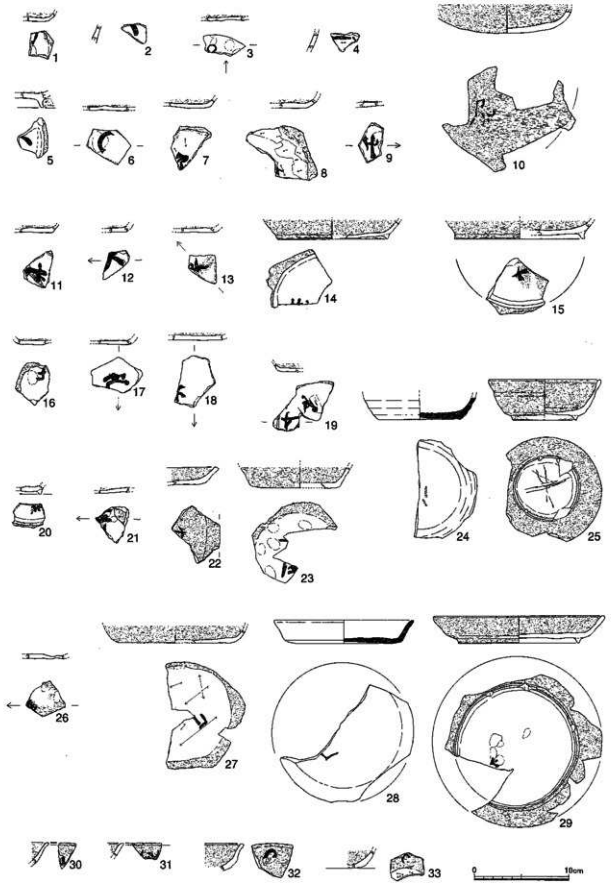
第26図　奈良三彩実測図（S＝1／2）



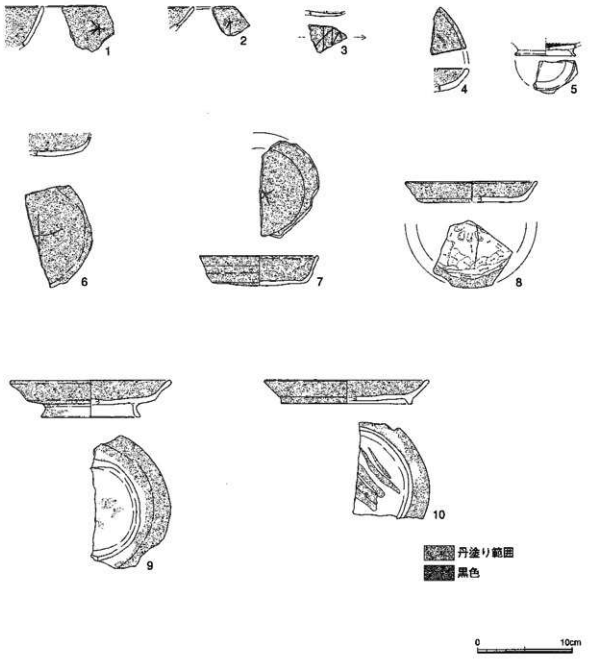
第27図　文字資料（墨書）実測図（S＝1／4）



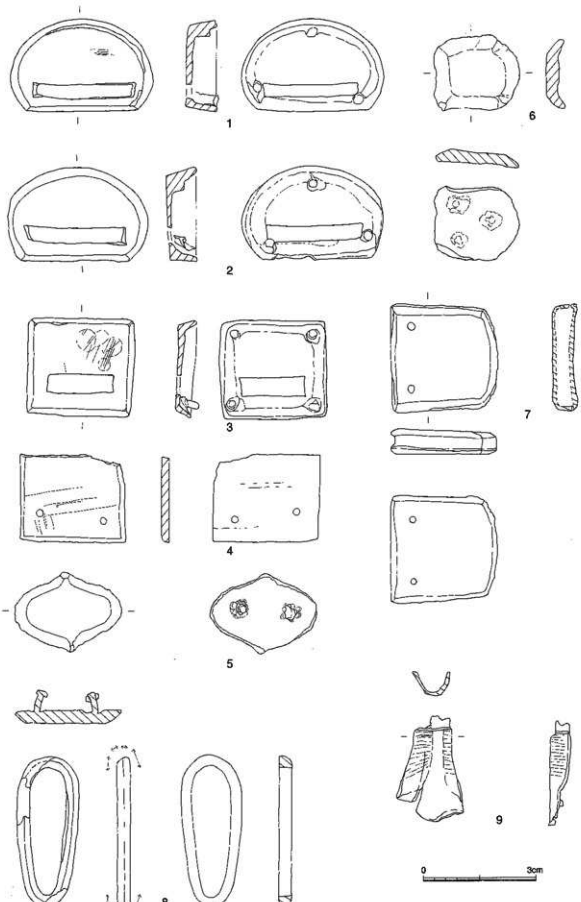
第28図　文字資料（墨書）実測図（S＝1／4）



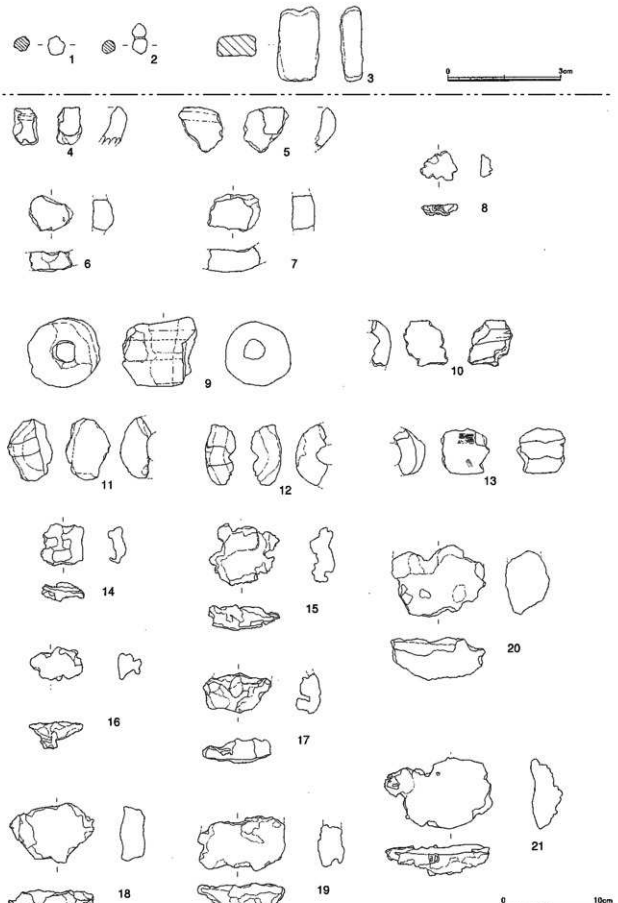
第29図　文字資料（墨書・線刻）実測図（S＝1／4）



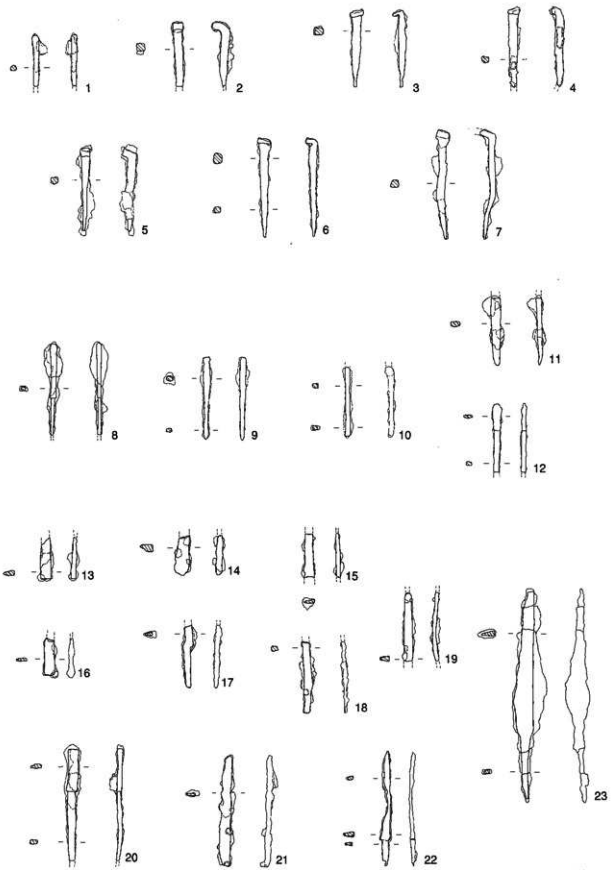
第30図　文字資料（線刻・朱墨）実測図（S＝1／4）



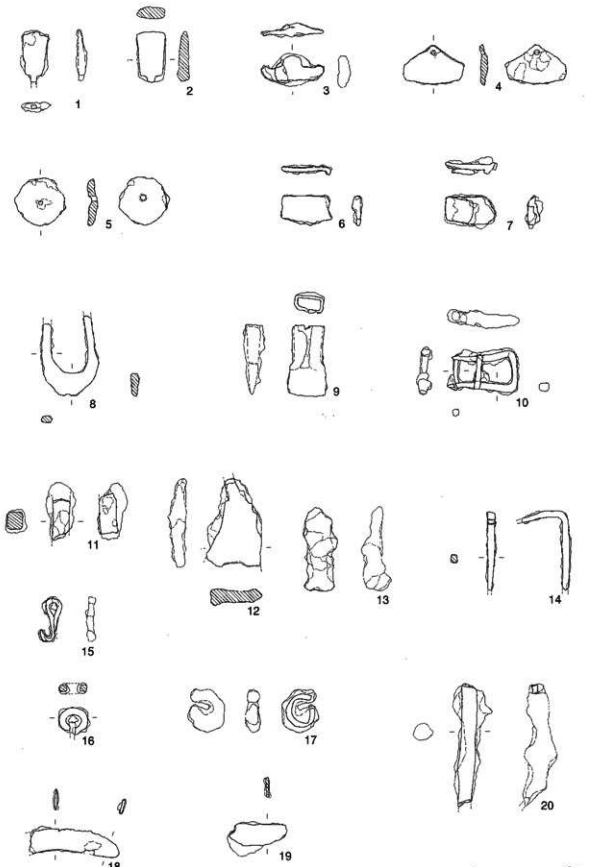
第31図　銅製品実測図（S＝1/1）



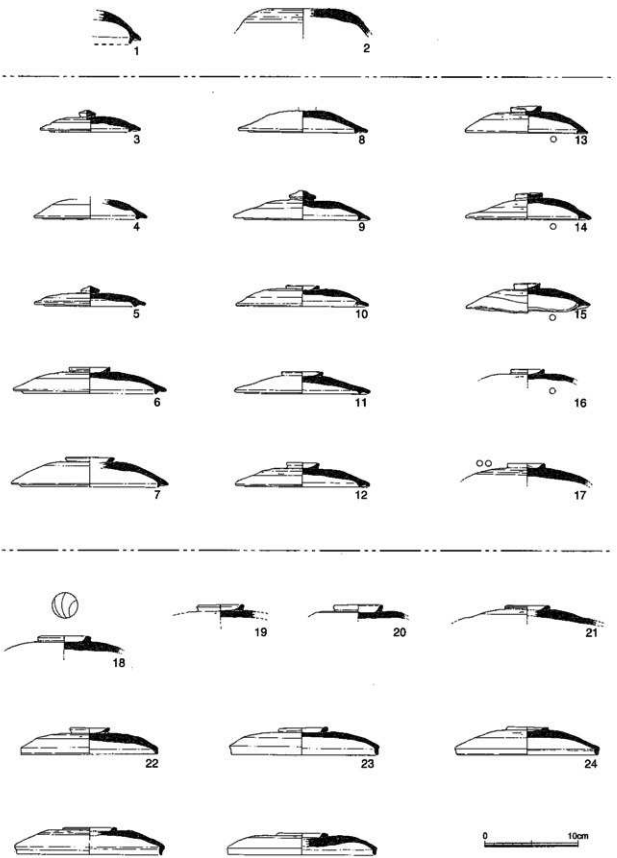
第32図　銅製品・銅関連遺物・鉄関連遺物実測図（1～3：S=1/1　4～21：S=1/4）



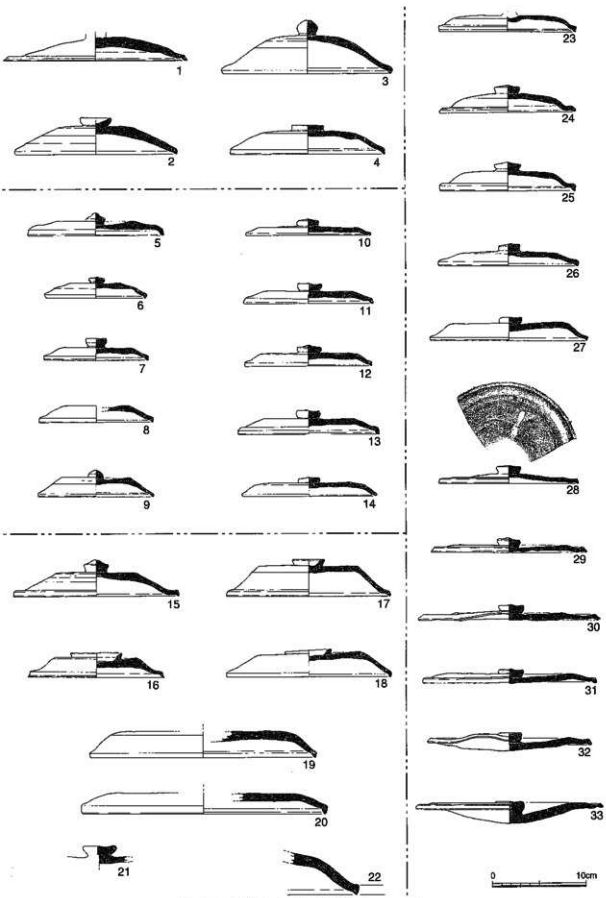
第33図　鉄製品実測図（S＝1／4）



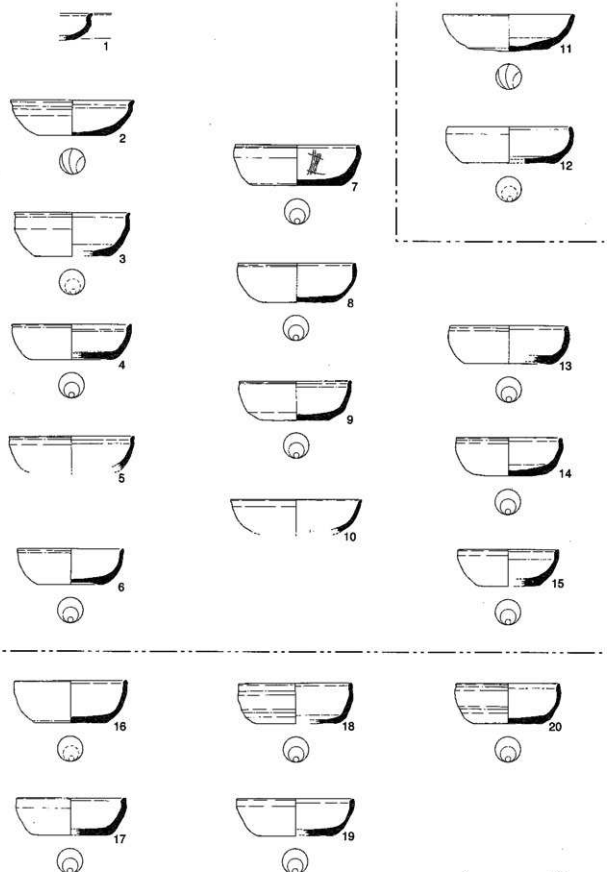
第34図　鉄製品実測図（S＝1／4）



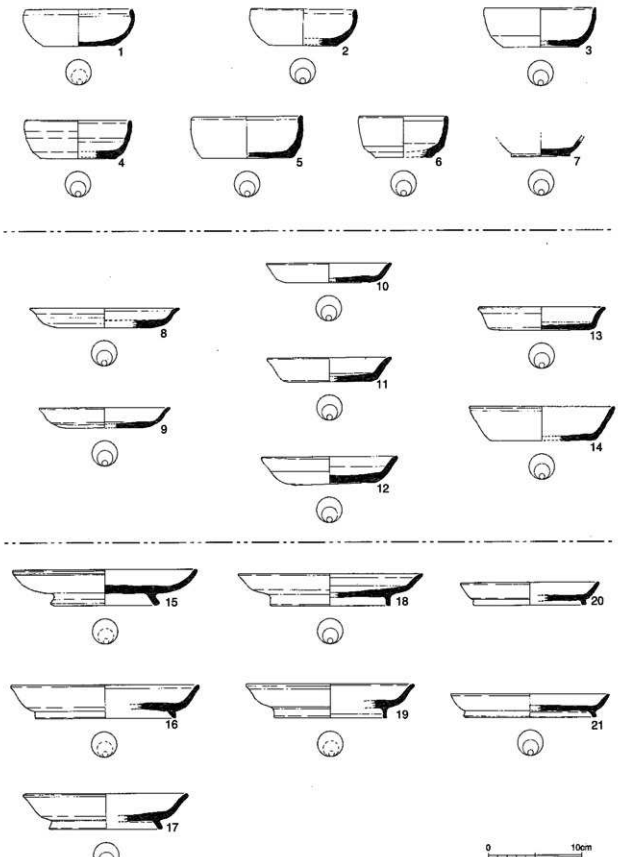
第35図　須恵器（坏蓋）実測図（S＝1／4）



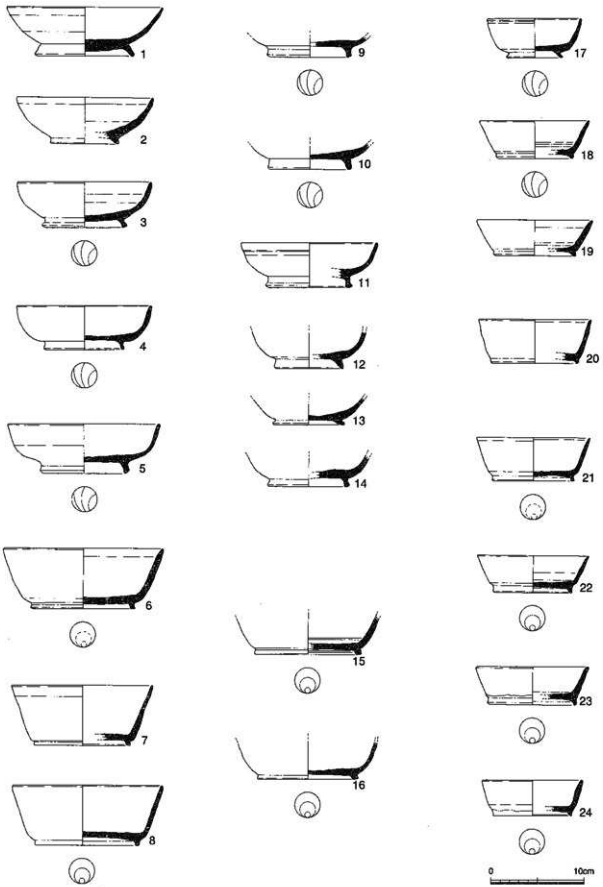
第36図　須恵器（坏蓋）実測図（S＝1／4）



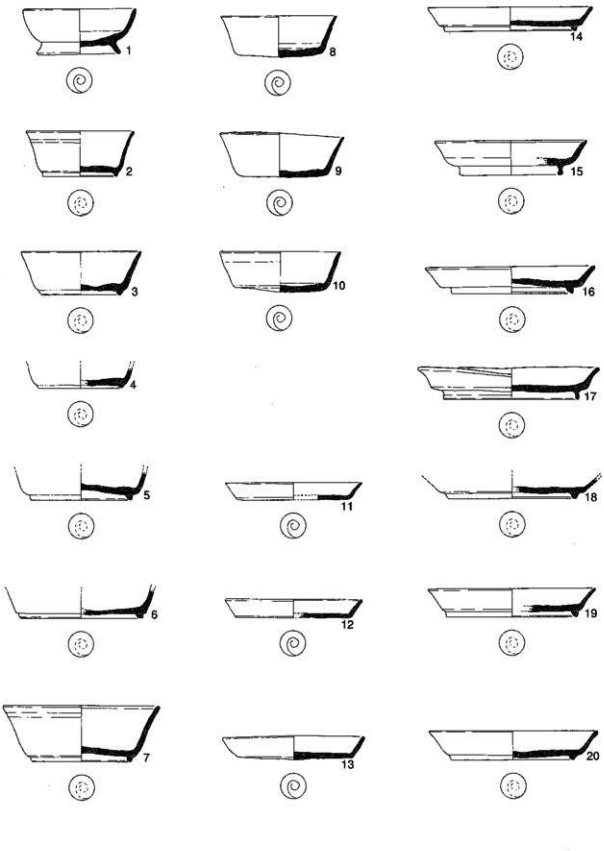
第37図　須恵器（坏身）実測図（S＝1／4）



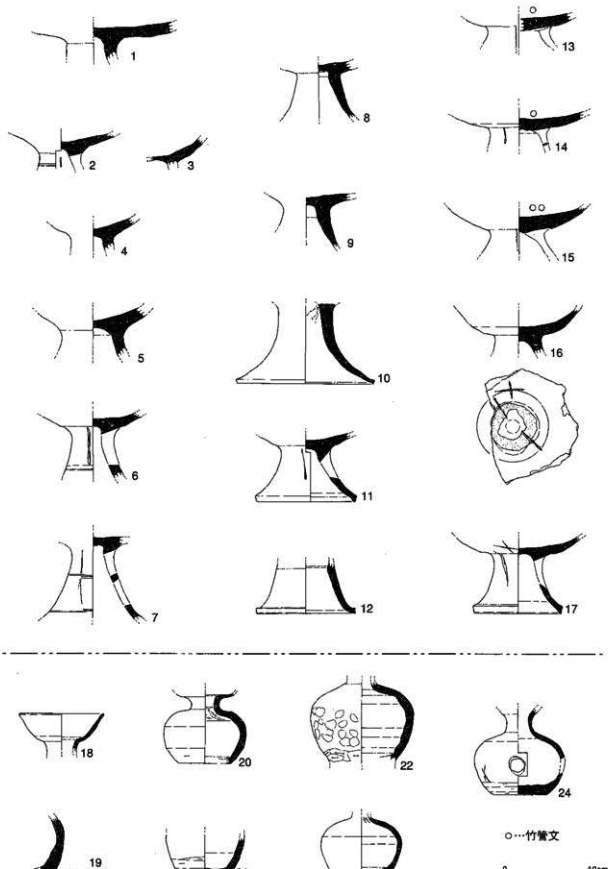
第38図　須恵器（坏身・皿）実測図（S＝1／4）



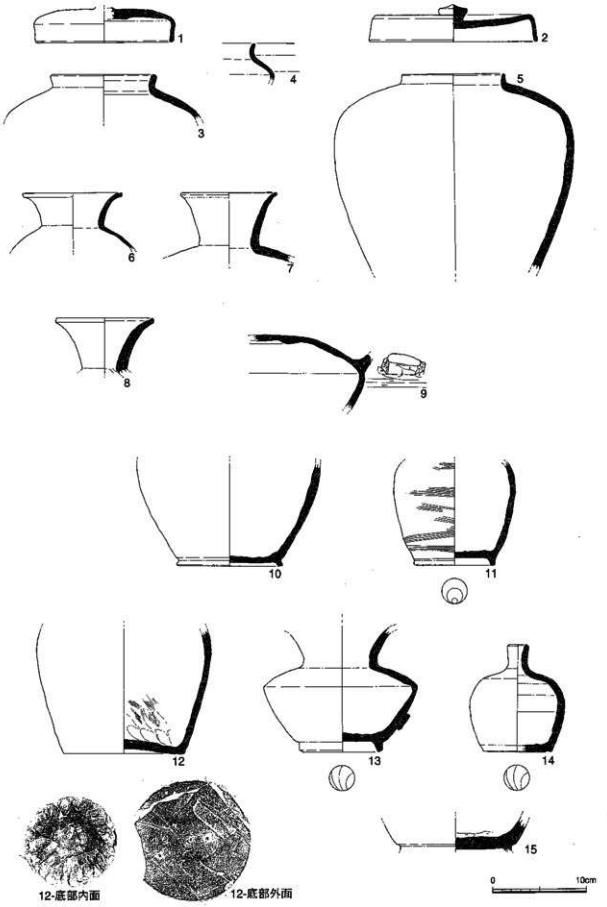
第39図　須恵器（坏身）実測図（S＝1／4）



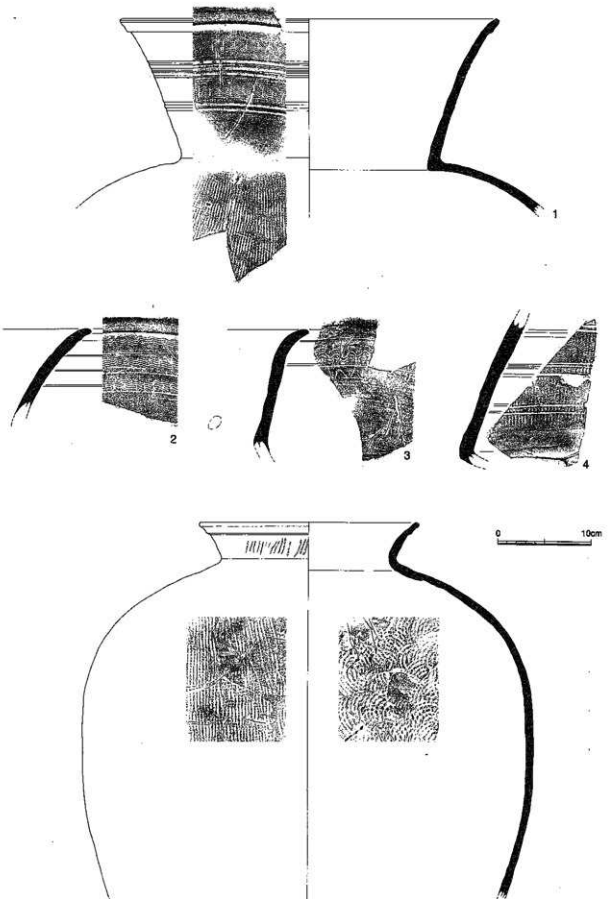
第40図　須恵器（ヘラ切り坏身・皿）実測図（S＝1／4）



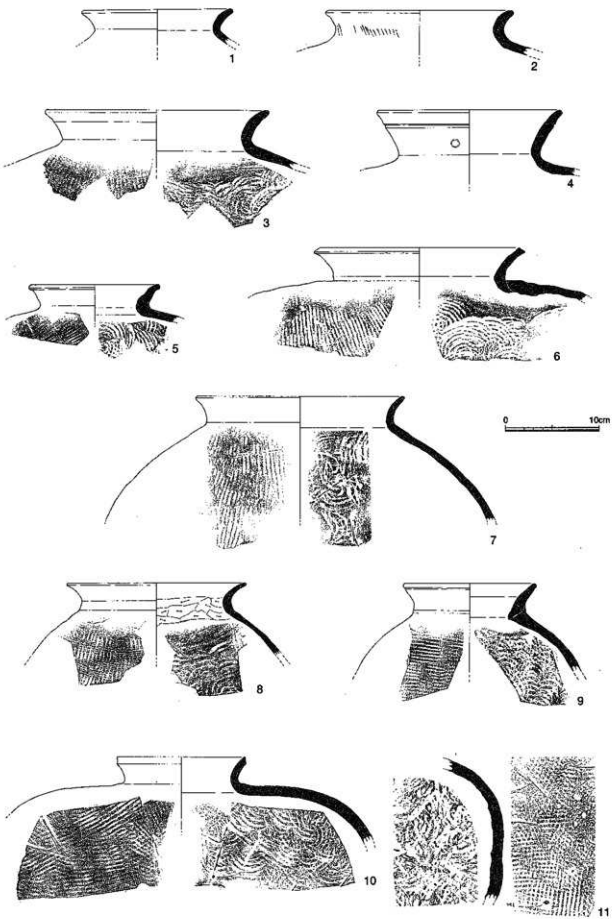
第41図　須恵器（高坏・瓶）実測図（S＝1／4）



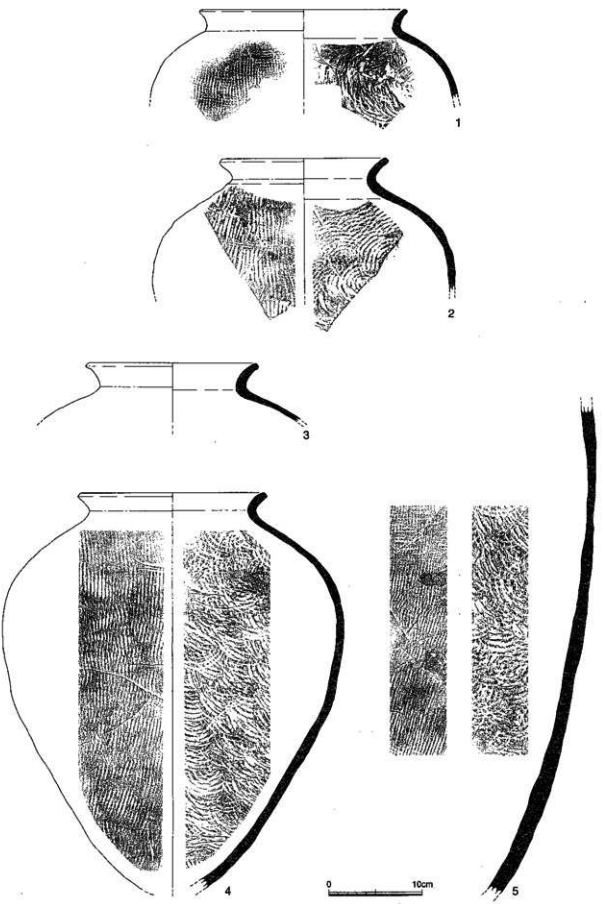
第42図　須恵器（壺類）実測図（S＝1／4）



第43図　須恵器（甕）実測図（S＝1／4）



第44図　須恵器（甕）実測図（S＝1／4）



第45図　須恵器（甕）実測図（S＝1／4）